志木市の文化財　第95集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 10

西原大塚遺跡第72地点

2024

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長　柚木　博

ここに刊行する『埋蔵文化財調査報告書10』は、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査事業の調査成果をまとめたもので、西原大塚遺跡第72地点を掲載しています。

現在、市内には、15か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

特に、縄文時代中期では、200軒以上の住居跡が、土坑域を囲むように分布しており、「環状集落」と呼ばれる集落であることが判明してきました。また、弥生時代後期～古墳時代前期では、今回の検出例を含め、西原大塚遺跡において、すでに670軒を超える住居跡が発見されており、本遺跡が県内においても屈指の集落跡として知られています。

さて、今回の第72地点では、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡16軒、中世以降の井戸跡1基などが見つかりました。

今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者や土地所有者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例　言

1．本書は、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡（県№09－007）の第72地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、事業者である個人から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行は、志木市教育委員会が実施した。

3．本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。なお、中世以降の遺物については、和光市教育委員会文化財調査指導員野澤　均氏にご教示を頂いた。

大久保聡　　第３章第１・３節の石器

深井恵子　　第３章第１節の遺構

4．遺物の実測は、星野恵美子・林ゆき子・増田千春・松浦恵子が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・池野谷有紀が行った。写真撮影は青木　修が行った。

5．本書に掲載した石器については、有限会社アルケーリサーチ（取締役社長　藤波啓容）に実測を委託した。

6．本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

7．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

凡　例

1．本報告書で使用した地図は以下のとおりである。
　第１図　　１：10,000「志木市全図」株式会社パスコ調製
　第２図　　１：2,500　ゼンリン電子住宅地図　デジタウン「埼玉県志木市」平成27年４月発行
　　株式会社ゼンリン
2．本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。
3．挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
4．遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。
5．ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位は㎝である。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。
6．遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
7．挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。
8．土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は［　］、推定値は（　）を付した。
　高：器高　　口：口径　　底：底径　　厚：器厚
9．遺構の略記号は、以下のとおりである。
　Ｙ＝弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡　　Ｈ＝古墳時代後期の住居跡　　Ｗ＝井戸跡
　Ｐ＝ピット

志木市遺跡調査会調査組織（平成14年度）

〈役　　員〉

会　　長　細田信良（志木市教育委員会教育長）（平成12年7月～平成17年6月）
副 会 長　谷合弘行（志木市教育委員会教育政策部長）（平成12年4月～平成15年3月）
理　　事　神山健吉（志木市文化財保護審議会委員長）
井上國夫（志木市文化財保護審議会委員）
高橋長次（　〃　）
高橋　豊（　〃　）
内田正子（　〃　）
理事兼事務局長　土橋春樹（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長）

〈監　　査〉

監　　事　金子雅佳（生涯学習課主幹）
荒井正夫（　〃　）
福田鮎子（社会教育指導員）

〈事 務 局〉

担 当 課　志木市教育委員会教育政策部生涯学習課
事 務 局　土橋春樹（教育政策部参事兼生涯学習課長）
金子雅佳（生涯学習課主幹）
関根正明（生涯学習課主査）
佐々木保俊（　〃　）
新井由紀子（生涯学習課主任）
尾形則敏（　〃　）
調査担当者　佐々木保俊
調 査 員　内野美津江
発掘協力員　朝香照郎・阿部公子・阿部ふみ子・伊野部三千子・岸田純一・
高杉朝子・塚田和枝・土屋富子・富田静江・永井真理・
成田しのぶ・二階堂美知子・松浦佐代子・松崎陽子・宮川幸佳・
矢野恵子
整理作業員　朝香照郎・阿部公子・阿部ふみ子・伊野部三千子・岸田純一・
高杉朝子・塚田和枝・土屋富子・富田静江・永井真理・
成田しのぶ・二階堂美知子・松浦佐代子・松崎陽子・宮川幸佳・
矢野恵子

志木市教育委員会組織（令和５年度）

教育長	柚木　博
教育政策部長	今野美香
生涯学習課長	土崎健太
生涯学習課副課長	吉成和重
生涯学習課主査	徳留彰紀
〃	大久保聡
生涯学習課主任	尾形則敏
〃	石川千尋
〃	塚原会理（～令和５年７月）
生涯学習課主事	木村結香
生涯学習課主事補	吉田優奈（令和５年８月～）
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
〃	深瀬　克（委員）
〃	上野守嘉（委員）
〃	新田泰男（委員）
〃	大木雄平（委員）（令和５年度～）

○整理作業

担当者	徳留彰紀・大久保聡・尾形則敏・木村結香
調査員	深井恵子・青木　修
調査補助員	星野恵美子
整理作業員	池野谷有紀・小林詠美子・二階堂美知子・松浦恵子・山口優子

目　　次

はじめに
例　　言／凡　　例／目　　次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第１章　遺跡の立地と環境 …… 1
　第１節　市域の地形と遺跡 …… 1
　第２節　遺跡の概要 …… 8
第２章　発掘調査の概要 …… 11
　第１節　調査に至る経緯 …… 11
　第２節　発掘調査の経過 …… 11
第３章　検出された遺構・遺物 …… 14
　第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物 …… 14
　第２節　中世以降の遺構 …… 51
　第３節　遺構外出土遺物 …… 52
第４章　調査のまとめ …… 63
　第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物について …… 63

図　　版
報告書抄録

挿図目次

第１図　市域の地形と遺跡分布（１／20,000）…… 2
第２図　西原大塚遺跡の調査地点（１／5,000）…… 9
第３図　遺構分布図（１／250）…… 13
第４図　404号住居跡（１／60）…… 14
第５図　404号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 15
第６図　405号住居跡（１／60）…… 17
第７図　405号住居跡出土遺物１（１／４・２／３）…… 18
第８図　405号住居跡出土遺物２（１／３）…… 19
第９図　406号住居跡（１／60）…… 23
第10図　406号住居跡出土遺物１（１／４・１／３）…… 24
第11図　406号住居跡出土遺物２（１／３）…… 25
第12図　407号住居跡（１／60）…… 29
第13図　407号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 29
第14図　408号住居跡（１／60）…… 31
第15図　408号住居跡出土遺物１（１／４・１／３）…… 32
第16図　408号住居跡出土遺物２（１／３）…… 33
第17図　409号住居跡（１／60）…… 35
第18図　409号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 35
第19図　415号住居跡（１／60）…… 36
第20図　415号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 37
第21図　416号住居跡（１／60）…… 38
第22図　416号住居跡出土遺物１（１／４）…… 39
第23図　416号住居跡出土遺物２（１／３）…… 40
第24図　417号住居跡（１／60）…… 43
第25図　417号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 44
第26図　418号住居跡（１／60）…… 47
第27図　418号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 47
第28図　419号住居跡（１／60）…… 49
第29図　419号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 49
第30図　420号住居跡出土遺物（１／４・１／３）…… 50
第31図　遺構外出土遺物１（１／３・２／３）…… 53
第32図　遺構外出土遺物２（１／３）…… 54
第33図　遺構外出土遺物３（１／４・１／３）…… 55
第34図　西原大塚遺跡第72地点における土器変遷１（１／８）…… 72
第35図　西原大塚遺跡第72地点における土器変遷２（１／８）…… 73
第36図　西原大塚遺跡第72地点における土器変遷３（１／８）…… 74
第37図　西原大塚遺跡第72地点における土器変遷４（１／８・１／６）…… 75
第38図　弥生時代後期～古墳時代前期の各住居跡出土土器の器種別割合 …… 83

表 目 次

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧 …… 1
第２表　西原大塚遺跡第72地点の発掘調査工程表 …… 12
第３表　404号住居跡出土土器一覧 …… 15
第４表　405号住居跡出土土器一覧（１） …… 20
　　405号住居跡出土土器一覧（２） …… 21
　　405号住居跡出土土器一覧（３） …… 22
第５表　405号住居跡出土土製品・石器一覧 …… 23
第６表　406号住居跡出土土器一覧（１） …… 26
　　406号住居跡出土土器一覧（２） …… 27
第７表　407号住居跡出土土器一覧 …… 30
第８表　408号住居跡出土土器一覧（１） …… 33
　　408号住居跡出土土器一覧（２） …… 34
第９表　409号住居跡出土土器一覧 …… 36
第10表　415号住居跡出土土器一覧 …… 37
第11表　416号住居跡出土土器一覧（１） …… 41
　　416号住居跡出土土器一覧（２） …… 42
第12表　417号住居跡出土土器一覧（１） …… 45
　　417号住居跡出土土器一覧（２） …… 46
第13表　418号住居跡出土土器一覧 …… 48
第14表　419号住居跡出土土器一覧 …… 50
第15表　420号住居跡出土土器一覧 …… 51
第16表　遺構外出土石器一覧 …… 56
第17表　遺構外出土縄文土器一覧（１） …… 56
　　遺構外出土縄文土器一覧（２） …… 57
　　遺構外出土縄文土器一覧（３） …… 58
第18表　遺構外出土縄文時代土製品一覧 …… 59
第19表　遺構外出土弥生時代後期～古墳時代後期土器一覧（１） …… 59
　　遺構外出土弥生時代後期～古墳時代後期土器一覧（２） …… 60
第20表　遺構外出土陶磁器・土器一覧（１） …… 61
　　遺構外出土陶磁器・土器一覧（２） …… 62
第21表　遺構外出土金属製品一覧 …… 62
第22表　弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年基準 …… 64
第23表　各器種に見られる主な属性の推移（１） …… 76
　　各器種に見られる主な属性の推移（２） …… 77
　　各器種に見られる主な属性の推移（３） …… 78
第24表　弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡出土の掲載土器個体数と器種別割合 …… 81

図版目次

図版1　1．調査前風景　2．表土剥ぎ風景　3．404号住居跡遺物出土状態
4～6．405号住居跡遺物出土状態　7．405号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
8．405号住居跡
図版2　1．406号住居跡遺物出土状態　2．406号住居跡　3．406号住居跡貯蔵穴
4．407・408号住居跡　5．408号住居跡　6．409号住居跡　7．415号住居跡
8．調査風景
図版3　1～3．416号住居跡遺物出土状態　4．416号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
5．417号住居跡　6．418号住居跡　7．419号住居跡　8．420号住居跡
図版4　1．404号住居跡出土遺物　2．405号住居跡出土遺物1
図版5　405号住居跡出土遺物2
図版6　406号住居跡出土遺物1
図版7　1．406号住居跡出土遺物2　2．407号住居跡出土遺物　3．408号住居跡出土遺物1
図版8　1．408号住居跡出土遺物2　2．409号住居跡出土遺物　3．415号住居跡出土遺物
図版9　416号住居跡出土遺物1
図版10　1．416号住居跡出土遺物2　2．417号住居跡出土遺物
図版11　1．418号住居跡出土遺物　2．419号住居跡出土遺物　3．420号住居跡出土遺物
図版12　遺構外出土遺物1
図版13　遺構外出土遺物2
図版14　遺構外出土遺物3

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　市域の地形と遺跡

（１）地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.05㎢、人口約７万６千人の自然と文化の調和する都市である。

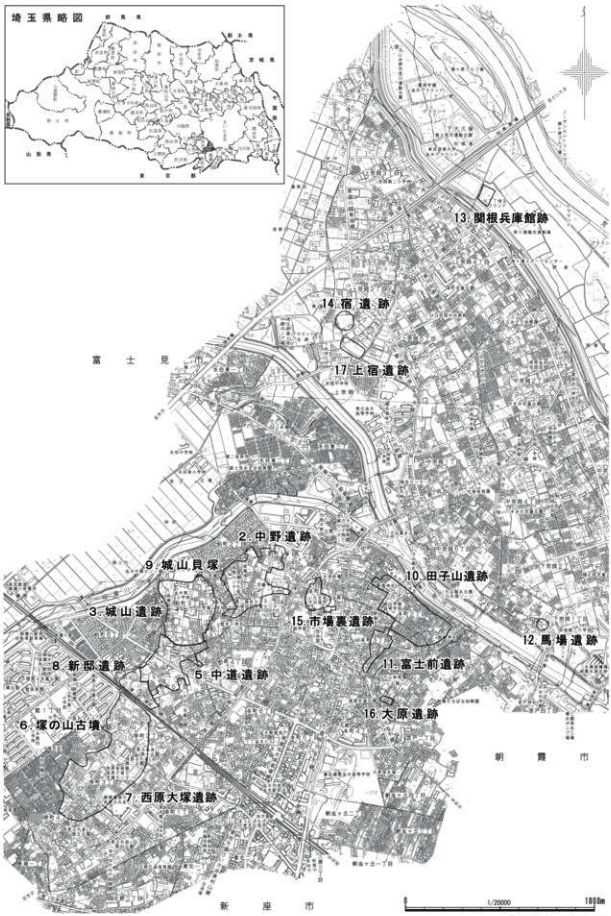
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（７）、新邸遺跡（８）、中道遺跡（５）、城山

№.	遺跡名	遺跡の規模	地　目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中　野	71,220㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城　山	82,520㎡	畑・宅地	貝塚・城館跡・集落跡・墓跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（中・後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中　道	54,420㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古　墳	古　墳？	古　墳？	なし
7	西原大塚	164,960㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新　邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前・後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝　塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830㎡	宅　地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑？、溝跡？	弥生土器、土師器
12	馬　場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グランド	館　跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	水　田	館　跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	15,120㎡	宅　地	集落跡・墓跡	縄文、弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大　原	1,700㎡	宅　地	集落跡	近世以降？	溝跡	なし
17	上　宿	8,600㎡	水田・宅地	集落跡・墓跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器、陶磁器、板碑等
合　計		524,580㎡					

令和５年10月31日現在

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）

遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2か所、平成7（1995）年度には1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。令和元（2019）年には、第224地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91㊱地点からは、礫群1基が検出された。令和元～2（2019～2020）年にかけて発掘調査された中野遺跡第109地点では、立川ローム層第Ⅳ層下部～第Ⅴ層を中心とする石器集中地点が検出されており、石核調整剥片の良好な接合資料が出土している。

城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2か所で石器集中地点が検出されている。平成20・21（2008・2009）年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも石器集中地点1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部で石器集中地点2か所、礫群9基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅵ層・第Ⅶ層で石器集中地点や礫群が検出されている。

2．縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、令和4（2022）年に田子山遺跡第172

地点で市内初となる撚糸文期の住居跡が１軒検出された。また、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点では、早期末葉（条痕文系）の10号住居跡が検出されている。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。令和元（2019）年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点、令和３～４（2021～2022）年に実施された中野遺跡第116①地点では、前期後葉の諸磯a式期の住居跡が検出されている。そのうち、城山遺跡第96地点では貝層を持つ住居跡が３軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に分布していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡１軒が確認されているが、平成28（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曽利ＥⅣ式の両耳壺を出土する住居跡１軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡２軒と加曽利Ｂ式期の住居跡１軒、遺物集中地点１か所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）１軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑１基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。その他、平成26（2014）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的まとまって出土している。最新資料として、平成30（2018）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第216地点で、堀之内１式期の住居跡が１軒検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行Ⅲｃ式・千網式の土器片が少量発見されている。また、令和３（2021）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第234地点で、遺構外出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる土器片が１点発見されている。以降、市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

３．弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元（2019）年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡１軒、方形周溝墓１基が検出された。住居跡からは壺、甕、高坏、抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。なお、これらの資料のうち、土器、石器、土製品計44点の城山遺跡10号住居跡出土遺物は、考古資料として、市指定文化財（令和３年７月１日付け）に指定されている。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27・28

（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が650軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅鈴が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位のなまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺形土器が出土している。なお、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月1日付け）に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4．古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後葉から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後葉以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化

材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、５世紀後葉から７世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で265軒、次いで中野遺跡で58軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で17軒、新邸遺跡で１軒を数える。

また住居跡以外では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、６世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で２か所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

５．奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山・富士前遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成８（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」１文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶が２枚とその近くからは鉄鎌１点と土錘１点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

最新では、令和元（2019）年と令和３（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、平安時代の住居跡・土壙・溝跡などが検出され、宗岡地区における自然堤防上に立地する遺跡の存在が明らかになりつつある。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか９点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の冨壽神寶ほか２点の遺物は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月１日付け）に指定されている。

６．中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『舘村旧記』（註１）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記』（註２）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山　1988・2002）。

また、平成７（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出され

ている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鋳造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鋳造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鋳型、鍋の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札（よろいのさね）である鉄製品1点と鉄鏃1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『舘村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『舘村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院（しょうりんざんかんのんじだいじゅいん）」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

最新資料としては、令和2・3年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第234地点の地下式坑（912号土坑）から、人骨（女性2体）と完形品の擂鉢が共伴する良好な資料が発見された。人骨は「通常とは異なる状況」で埋葬されたと考えられ（田中　2022）、擂鉢は古瀬戸後期Ⅳ古～新段階（藤澤　2008）に比定されることから、時期は中世（15世紀中葉～後葉）のものと考えられる。

また、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、中・近世の土壙・井戸跡・溝跡などの多くの遺構が検出され、中世における『宗岡宿』の様相や近世における千光寺に関連する墓域群などを知ることができる貴重な成果

につながった。

７．近代以降

近代以降の遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治２～５年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第２節　遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町２～４丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約１kmに位置している。北東－南西方向に約700m、北西－南東方向に約150mの広がりをもち、遺跡面積164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は10～18mと遺跡内で８mの比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高14～16mに位置しており、おおむね緩やかな傾斜をもち台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点が確認されている。

昭和48（1973）年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元（1989）年から平成19（2007）年までは、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。近年では区画整理事業の完了に伴い、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設などの各種土木工事が盛期を迎え、それらに伴う発掘調査も増加傾向にある。

本遺跡は、これまでに244回の調査（令和５年10月31日現在）が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では住居跡約200軒以上からなる大規模な環状集落が形成され、また、弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡670軒以上、方形周溝墓38基が調査され、さらに環濠の存在が確認されている。

特に本遺跡から発見された資料として、以下の２件が、平成24年度に市指定文化財に指定され、大きな成果を上げることができた。

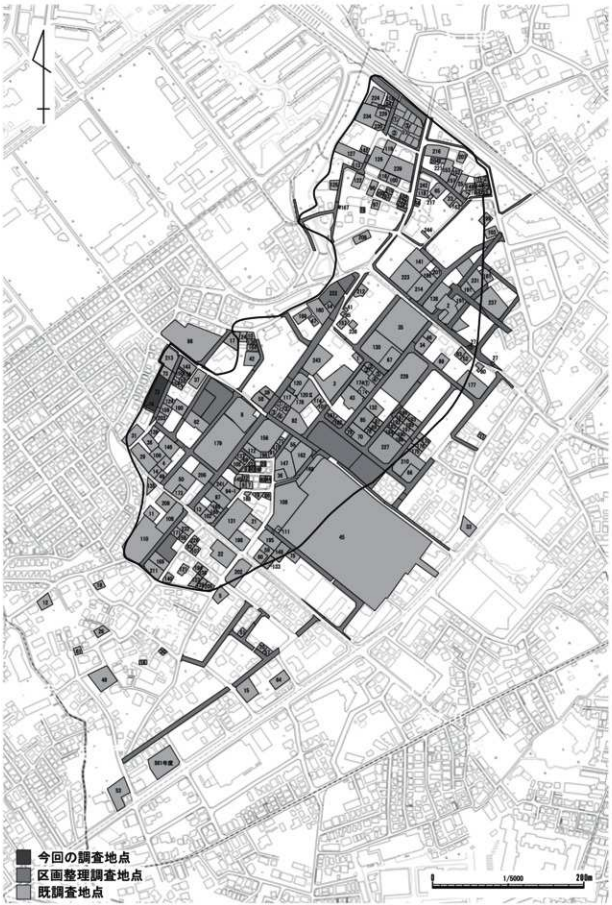
①西原大塚遺跡出土の動物形土製品

②西原大塚遺跡17号方形周溝墓出土遺物

[註]

註１　『舘村旧記』は、舘村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒（なかつね）が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註２　『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18（1486）年６月から10ヶ月



第２図　西原大塚遺跡の調査地点（1／5,000）

令和5年10月31日現在

間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

神山健吉　1988「「廻国雑記」に現れる　大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第７号
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号
田中　信　2022「第３章　調査のまとめ　第3節　中世以降について」『西原大塚遺跡第234地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第86集　埼玉県志木市教育委員会
藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

第２章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経緯

（１）調査に至る経過

平成14年７月、個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木行為計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町３丁目7360～7364（面積1,171.00㎡）内においての農地土壌改良を実施するということで、今の畑の現状から深さを平均60㎝切り下げるという内容のものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228－09－007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．現在、この区域は区画整理事業を実施している箇所であり、周辺の調査により、当該土木工事予定地については、埋蔵文化財の所在は明らかである。

２．上記１の内容と現況ＧＬから平均60㎝を切り下げることから、今回は埋蔵文化財確認調査を実施せずにこのまま計画を実施するようであれば、盛土保存は不可能であるので、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

その結果、計画を実施するという内容であることから、10月22日、教育委員会は依頼者である個人から埋蔵文化財発掘届を受理し、面積1,171.00㎡を発掘調査の対象と決定した。同時に教育委員会は依頼者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、依頼者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成14年11月20日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。

第２節　発掘調査の経過

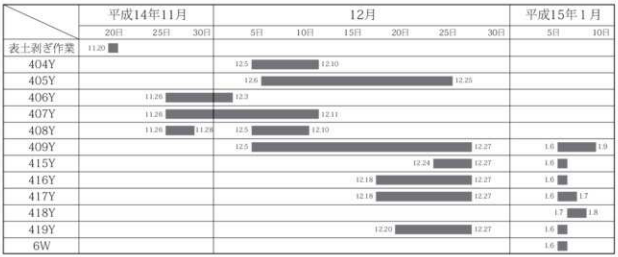
ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第２表の発掘調査工程表に示した。

11月20日　重機（バックホー）により、調査区長軸方向に合わせ、２本のトレンチを設定し、遺構の検出状況を確認する。その結果、調査区内には弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡が10軒程重複し、広がっていることが判明した。

22日　人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。検出された住居跡は重複が著しいため、新旧関係を把握することに努めた。

下旬　住居跡の新旧関係を把握した後、26日からは弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡３軒（406～408Ｙ）の精査を開始する。

12月上旬　新たに弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡３軒（404・405・409Ｙ）の精査を開始



第２表　西原大塚遺跡第72地点の発掘調査工程表

する。

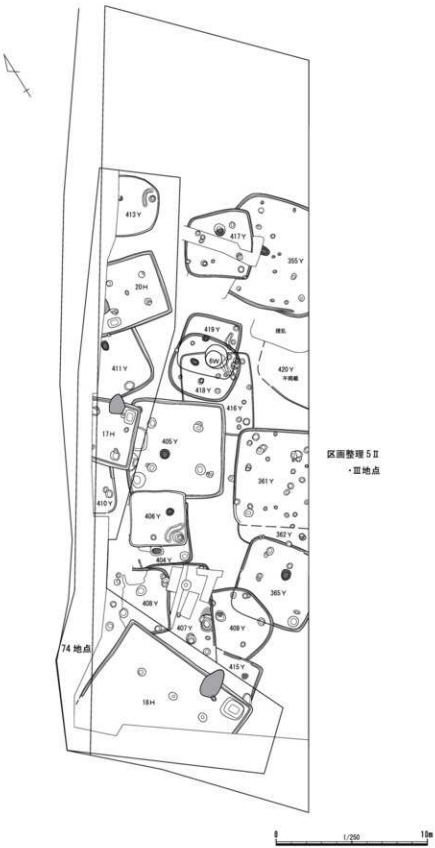
中旬　404・407・408Ｙの精査を終了する。405Ｙについては、引き続き精査を行う。

下旬　405Yの精査を終了する。新たに弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡３軒（416・417・419Ｙ）の精査を開始する。

１月６日　409・415～417・419Ｙの精査を再開し、415～417・419Ｙは精査を終了する。また、416・418・419Ｙの重複部分に井戸跡を検出したため精査を行った。

７日　415Ｙの精査に併行し、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（418Ｙ）の精査を開始する。

１月９日　すべての調査を完了する。埋戻し作業はなし。



第３図　遺構分布図（１／250）

第３章　検出された遺構・遺物

第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

（１）概　要

弥生時代後期から古墳時代前期については、今回対象地点としては、住居跡16軒（355・361・362・365・404～409・415～420Ｙ）が検出されている。そのうち、５軒（355・361・362・365・420Ｙ）については、区画整理第５Ⅱ・Ⅲ地点で報告されているため、今回報告する住居跡は11軒（404～409・415～419Ｙ）となるが、420Ｙについては、前回掲載遺物がなかったが、今回新たに遺物を確認できたので、合計12軒（404～409・415～420Ｙ）分を報告することとした。さらに、隣接する区画整理第74地点では、410・411・413Ｙ、17・18・20Ｈが報告されている（佐々木・内野・宮川　2009）。

（２）住居跡

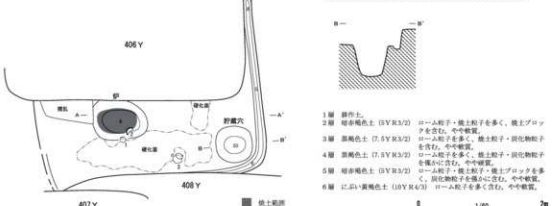
404号住居跡

遺　構（第４図）

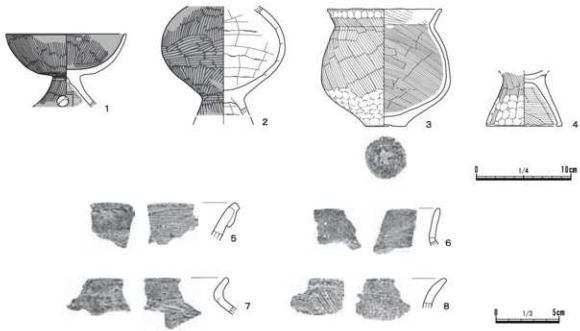
［位　置］調査区南西側。

［検出状況］406～408Ｙに切られる。住居南側と東壁付近のみの検出である。

［構　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸4.00m／短軸3.60m／確認面から床面までの深さ23～27㎝。**壁**：80°程で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－25°－Ｅ。**壁溝**：南・東壁で確認できた。上幅９～15㎝・下幅４～６㎝・深さ４～８㎝。**床面**：硬化面は南壁近くで確認できた。**炉**：南壁から60㎝程離れた位置からの検出で、406Ｙに北端は切られている。楕円形の地床炉である。掘り込みは長軸80㎝／短軸50㎝



第４図　404号住居跡（1／60）



第５図　404号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第５図1 図版４-1-1	高坏	口縁部～ 脚台部中 位60%	高 [7.7] 口 (12.8)	坏部は底部に弱い稜をもち、口縁部は内湾する／脚台部は裾部に向かって外反する、途中に円形の透かし孔２か所確認／脚台部内面を除き赤彩	内面：坏部はヘラ磨き調整、脚台部はハケ目調整／外面：全面にヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	炉南縁
第５図2 図版４-1-2	台付壺	胴部上半 ～脚台部 上半40%	高 [11.9]	小型台付壺／最大径は胴部下半にもち、やや下膨れ／脚台部は「ハ」の字状／外面に赤彩	内面：ヘラナデ／外面：全面ヘラ磨き調整	暗赤褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	炉内
第５図3 図版４-1-3	甕	90%	高 12.5 口 12.1 底 4.4	小型平底甕／「く」の字口縁／最大径は胴部下半にもつ／底部は輪台状で中央が円形状に窪む	内面：口縁部は粗い目のハケ目調整、胴部は細かい目のハケ目調整／外面：口縁部～胴部中位は粗い目のハケ目調整、胴部下半は指頭による成形痕が残る（未調整）、口縁部内外面は指頭による横ナデ、外面には指頭押捺痕が残る	暗黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒・小石を僅かに含む	南壁近くの床面上
第５図4 図版４-1-4	甕	胴底部～ 脚台部 80%	高 [5.8] 底 (8.2)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／底部は僅かに内湾する	内面：胴底部は剥落のため不明、脚台部は粗い目のハケ目調整／外面：粗い目のハケ目調整後指頭押捺	淡黄褐色／砂粒をやや多く含む	覆土中
第５図5 図版４-1-5	甕	口縁部 小破片	厚 1.0	幅広複合口縁／複合部は指頭による押捺痕が残る	内面：ハケ目調整／外面：複合部はハケ目調整、頸部は粗いヘラ磨き調整	暗橙色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第５図6 図版４-1-6	甕	口縁部 小破片	厚 0.4	「く」の字口縁／口唇部に刻みなし	内外面：ハケ目調整軽い横ナデ	黄橙色／茶褐色粒子・角閃石・砂粒を僅かに含む	覆土中
第５図7 図版４-1-7	甕	口縁部 小破片	厚 0.6	「く」の字口縁／口唇部に刻みがなく平坦	内面：口縁部は横ナデ、以下は粗いハケ目調整／外面：粗いハケ目調整	暗黄褐色を基調／砂粒をやや多く含む	覆土中
第５図8 図版４-1-8	甕	口縁部 小破片	厚 0.6	口縁部は外反する	内面：口縁上部は粗いハケ目調整、下部は細かいハケ目調整／外面：ハケ目調整後軽い横ナデ	黄褐色／砂粒をやや多く含む	覆土中

第３表　404号住居跡出土土器一覧

以上／深さ３㎝。南縁で高坏形土器（１）・小型台付壷（２）が出土している。**貯蔵穴**：住居南東コーナーで検出された。57×57㎝の隅丸方形で、深さ50㎝。**柱穴**：確認できなかった。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　　土］５層（２～６層）に分層される。

［遺　　物］高坏・壷・台付甕形土器が出土した。

［時　　期］古墳時代前期前葉。

遺　　物（第５図、図版４－１、第３表）

１は高坏形土器、２・５は壷形土器で、２は小型台付壷である。３・４・６～８は甕形土器である。

405号住居跡

遺　　構（第６図）

［位　　置］調査区中央やや西側。

［検出状況］406Y・17Hに切られ、416Yを切る。

［構　　造］**平面形**：方形。**規模**：長軸6.46m／短軸6.42m／確認面から床面までの深さ28～41㎝。**壁**：75°程度で立ち上がる。**長軸方位**：N－56°－W。**壁溝**：確認できた部分では全周する。上幅18～28㎝／下幅６～８㎝／深さ６～17㎝。**床面**：住居跡中央付近で硬化面を確認できた。北西壁に接する長方形の掘り込みは不明。**炉**：住居中央よりやや西側に位置する。円形に近い地床炉である。長軸65㎝／短軸64㎝／深さ６㎝。中央から礫3点が出土した。**貯蔵穴**：住居西コーナーから検出された。104×94㎝の楕円形で、深さ50㎝。器台形土器（９）・甕形土器（24・36）・砥石（45）が出土した。**柱穴**：Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と思われる。Ｐ２とＰ４は重複形を呈する。深さ69～80㎝。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：検出されなかった。

［覆　　土］５層（２～６層）を基本に分層される。

［遺　　物］坩・器台・鉢・高坏・壷・甕・甑形土器、ミニチュア土器、土製品（勾玉）、石器（砥石）が出土した。12・40～42は絵画土器であり、市内初の出土として注目される。

［時　　期］古墳時代前期中葉。

遺　　物（第７・８図、図版４－２、図版５、第４・５表）

［土　　器］（第７・８図１～42、図版４－２－１～15、図版５－16～42、第４表）

１～５は坩形土器、８～12は器台形土器、６・７・27・28は鉢形土器、13・14・25・26は高坏形土器、15～19・29・30・40は壷形土器、21～24・31～38・41・42は甕形土器、20は甑形土器、39はミニチュア土器である。

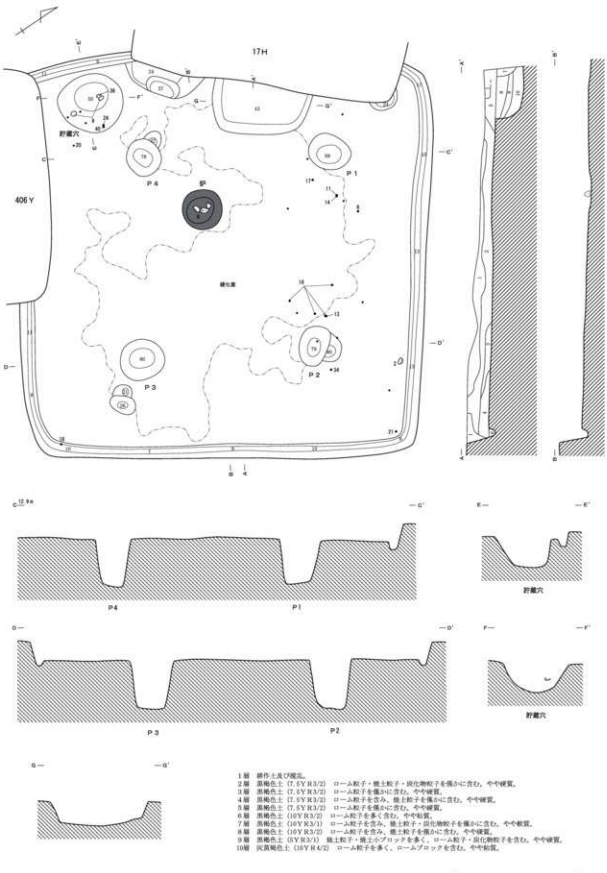
特に12・40～42は絵画土器で、12は器台形土器の脚台部、40は壷形土器の胴部小破片、41・42は接合しなかったが同一個体と思われる甕形土器の胴部小破片である。いずれも図柄は外面に細線により、12は裾部全体に展開するように「Ｌ」・「△」のような形状を組み合わせたもの、40は２本の直線、41・42は格子目状に描かれている。

［土 製 品］（第８図43、図版５－43、第５表）

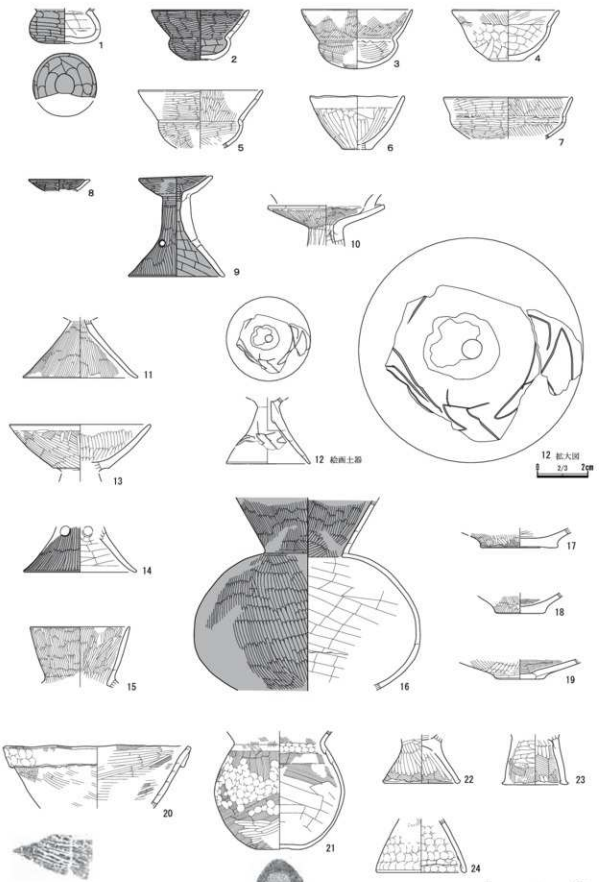
43は勾玉である。

［石　　器］（第８図、図版５－44・45、第５表）

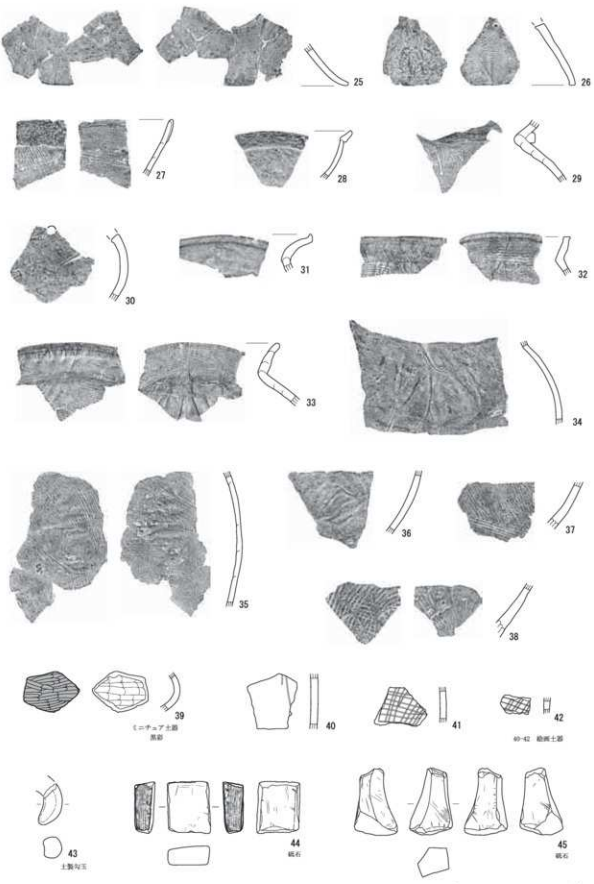
44・45は砥石である。



第６図　405号住居跡（1／60）



第７図　405号住居跡出土遺物１（1／4・2／3）



第８図　405号住居跡出土遺物２（1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 （㎝）	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第７図１ 図版4-2-1	坩	頸部～底部60％	高 [3.8] 底 6.0	体部から頸部は「く」の字状に屈曲する／体部は球状であるが偏平／平底であるが、中央は2.2×1.9㎝の楕円形に窪む／外面に赤彩	内面：口縁部はヘラ磨き調整、体部はヘラナデ／外面：幅が広いヘラ磨き調整	黄褐色／茶褐色粒子をやや多く、砂粒を僅かに含む	覆土中
第７図２ 図版4-2-2	坩	ほぼ完形品	高 5.3 口 10.44 底 3.0	口縁部はやや内湾気味に大きく開く／最大径は口縁部にもつ／体部は球状であるが偏平／体部から口縁部との境は屈曲する／碁笥底	内面：口縁部はヘラ磨き調整、体部はヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整	暗赤褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	住居東コーナーの北東壁近くのほぼ床面上
第７図３ 図版4-2-3	坩	40%	高 6.3 口 11.8	小型丸底坩／口縁部は内湾気味に開く／体部は球状であるが偏平／体部から口縁部との境は屈曲する／内外面に赤彩の可能性がある	内外面：ヘラ磨き調整、内面底部のヘラ磨き調整は１本単位ではなく、木の葉状に描かれ文様を意識しているかに思える	暗橙色／砂粒を含む	覆土中
第７図４ 図版4-2-4	坩	70%	高 5.4 口 11.4 底 3.8	体部との境は内面に屈曲し、輪積み痕が残る／口縁部は大きく開く／体部は膨らみをもつ／底部は平底であるが、ヘラ削りにより粗く作られている	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、以下は指頭による指ナデ／外面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、底部付近はヘラ削り、体部は指頭による成形痕が残る	黄橙色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第７図５ 図版4-2-5	坩	口縁部～体部下半20％	高 [6.2] 口 (13.2)	口縁部は大きく開き、体部は丸い／口縁部と体部との境はヘラ磨き調整により沈線状を呈している／底部を欠損する	内外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／茶褐色粒子を・砂粒を僅かに含む	覆土中
第７図６ 図版4-2-6	鉢	30%	高 5.6 口 (10.0) 底 (3.2)	小型鉢／全体に底部から口縁部にかけて内湾気味に開く／平底	内面：口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、体部は粗いヘラ磨き調整（ヘラ削り的）	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	P1東側のほぼ床面上
第７図７ 図版4-2-7	鉢	口縁部～体部下半30％	高 [4.5] 口 (13.6)	有段口縁鉢／口縁部は外傾する／口縁部と体部との境に段をもつ／底部を欠損する	内外面：ヘラ磨き調整／外面体部と口縁部との境に一部ハケ目痕が残る	淡橙色／茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第７図８ 図版4-2-8	器台	受部40％	高 [1.3] 口 (6.6)	口縁部は僅かに水平口縁状で、口唇部はやや細く尖り気味	内外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／砂粒を僅かに含む	覆土中
第７図９ 図版4-2-9	器台	90%	高 10.7 口 7.8 底 10.2	柱状脚器台／受部は皿状／裾部は内湾気味に開く／受部底に径1㎝程の貫通あり／脚台部に径0.8㎝程の円形の透かし孔（径約0.8㎝）３か所あり／内外面に赤彩	内面：受部はヘラ磨き調整、脚台部はヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整／受部底にソケット状の接合面が観察される	黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴内
第７図10 図版4-2-10	器台	受部～脚台部上半30％	高 [4.4]	有段器台／推定最大径12.4㎝／受部端部は平坦／口縁部の剥離痕が残る／中央に径1.2㎝程の貫通孔あり／脚台部上半は直線状で細い／色調が暗茶褐色を呈しているため黒色土器か／いわゆる北陸系装飾器台	内面：受部はヘラ磨き調整、端部及び内面は横ナデ、脚台部はヘラ削り／外面：受部はヘラ磨き調整、脚台部はヘラ削り、上部は指頭による成形痕が僅かに残る	淡茶褐色／茶褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む	床面上
第７図11 図版4-2-11	器台	脚台部30％	高 [6.5] 底 (12.2)	裾部は大きく外反する／円形の透かし孔なし	内外面：縦方向にヘラ磨き調整	黄褐色／茶褐色粒子を含む	P1東側のほぼ床面上
第７図12 図版4-2-12	器台	受部下半～脚台部下半70％	高 [7.0] 底 (8.9)	絵画土器／脚台部は裾部に向かって大きく外反する／中央に径0.7㎝の貫通孔あり	絵画は脚台部の全体に展開するもので、幅1㎜未満の細線により描かれている／図柄は「L」・「△」のような形状を組み合わせたもので何を表現したものか不明であるが、龍あるいは両翼を広げた鳥人にも見える／内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む	覆土中

第４表　405号住居跡出土土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第７図13 図版4-2-13	高坏	坏部70％	高 [5.0] 口 15.0	坏部は底部に稜をもち、口縁部は内湾気味に開く／内外面に赤彩の可能性あり	内面：横ナデ後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後口縁部は横ナデ、以下はその後ヘラ磨き調整	黄褐色を基調／角閃石・砂粒・小石を含む	P2北西側のほぼ床面上
第７図14 図版4-2-14	高坏	脚台部 20％以下	高 [4.8] 底 (12.0)	裾部は外反する／透かし孔（径1.1cm）1か所あり／外面に赤彩	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を含む	P1東側のほぼ床面上
第７図15 図版4-2-15	壷	口縁部～ 胴部上半 20％以下	高 [6.4] 口 (10.6)	口縁部は内湾気味に開く／頸部は「く」の字状に屈曲する	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整、部分的にハケ目痕が残る	暗橙色／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第７図16 図版5-16	壷	頸部～胴 部下半 60％	高 [20.4]	最大径は胴部下半にもち下膨れ／頸部は「く」の字状に屈曲する／頸部内面及び外面に赤彩	内面：頸部はハケ目調整後ヘラ磨き調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗赤褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	P2北西側の床面上から散在的
第７図17 図版5-17	壷	底部 100％	高 [2.1] 底 8.2	底部は輪台状で中央は円形状に窪む／遺存状態が悪く内面は剥落している	内面：ヘラ磨き調整か／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	P1南側のほぼ床面上
第７図18 図版5-18	壷	胴部下半 ～底部 60％	高 [2.2] 底 5.2	小型壷／平底	内面：ハケ目調整／外面：ヘラ磨き調整、部分的に指頭押捺による成形痕が見られる	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	住居南コーナーのほぼ床面上
第７図19 図版5-19	壷	胴部下半 ～底部 40％	高 [2.1] 底 (5.4)	平底／内外面黒色	内面：ハケ目調整／外面：幅広いヘラ磨き調整	暗黄褐色／砂粒・小石を含む	覆土中
第７図20 図版5-20	甕	口縁部～ 体部中位 40％	高 [6.7] 口 20.0	複合口縁／器形は全体に胴部から口縁部に向かって開く／口頸部は平坦／遺存状態は悪く胴部全体が剥落している／外面体部の一部に深い偏状の痕跡あり（刃部による研痕か）	内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整、口頸部とハケ目調整、複合部は指頭による成形痕が残る	黄褐色を基調／茶褐色粒子・黄褐色粒子を多く含む	貯蔵穴すぐ南東側のほぼ床面上
第７図21 図版5-21	甕	頸部～底 部70％	高 [12.5] 底 (4.6)	平底甕／最大径は胴部中位にもつ／頸部は「く」の字状に屈曲する／底部は輪台状で中央が円形状に窪んでいる／薄手／底部は平底であるが、中央は直径約2.5cmの円形に窪む	内面：頸部はハケ目調整後横ナデ、屈曲部は指頭押捺、胴部上半はハケ目調整、胴部中位以下はヘラナデ／外面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、以下はハケ目調整後指頭押捺、胴部下半は部分的に粗いヘラ磨き調整	黄褐色を基調／砂粒を僅かに含む	住居東コーナーのほぼ床面上
第７図22 図版5-22	甕	脚台部 50％	高 [5.2] 底 (8.2)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／裾部は内湾気味／底部は平坦気味	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き	暗茶褐色／白色砂粒をやや多く、黄褐色粒子を含む	覆土中
第７図23 図版5-23	甕	脚台部 20％	高 [5.3] 底 (7.0)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／脚台部上半内面に輪積み痕あり／底部は平坦で内角部に粘土がめくれている	内面：ハケ目調整後粗い目のヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後粗い目のヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第７図24 図版5-24	甕	脚台部 30％	高 [5.7] 底 (9.6)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／内面底部に折り返しあり／S字状口縁甕と考えられる	内外面：全面に指頭による成形痕が残る／外面：脚台部最上端はハケ目調整	黄褐色／砂粒を含む	貯蔵穴内
第８図25 図版5-25	高坏	脚台部 破片	高 [3.5] 厚 0.4	裾部は大きく外反する	内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第８図26 図版5-26	高坏	脚台部 破片	厚 0.5	脚台部は「ハ」の字状／裾部は僅かに内湾する	内面：ハケ目調整／外面：ヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第８図27 図版5-27	鉢	口縁部～ 胴部上半 破片	厚 0.5	鉢と思われる／複合口縁／複合部は剥落している	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	淡茶褐色／砂粒を含む	覆土中

第４表　405号住居跡出土土器一覧（２）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第8図28 図版5-28	鉢	口縁部～ 胴部上半 破片	厚 0.3	鉢と思われる／複合口縁／胴部は丸味をもつ	内面：ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外目：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／複合部に指頭による成形痕が残る	淡茶褐色／砂粒を含む	覆土中
第8図29 図版5-29	壺	頸部～胴 部上半破 片	厚 0.6	頸部は「く」の字状に屈曲する／頸部には凸帯がまわる	内面：頸部ヘラ磨き調整、胴部はヘラナデ／外面：はハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第8図30 図版5-30	壺	胴部上半 ～下半 破片	厚 0.5	小型壺か／胴部上半に径0.5cm程の穿孔が1か所ある／穿孔方向は外から内	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第8図31 図版5-31	甕	口縁部 破片	厚 0.7	受口状口縁甕／頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する／いわゆる近江系甕	内外面：横ナデ	黄褐色／砂粒・小石を含む	覆土中
第8図32 図版5-32	甕	口縁部～ 頸部破片	厚 0.4	口唇端部は平坦／口縁部は僅かに内湾気味に開く／頸部は「く」の字状に屈曲する／外面は黒く煤けている	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整後口縁部は横ナデ	黒褐色／橙色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第8図33 図版5-33	甕	口縁部～ 同部上半 破片	厚 0.6	「く」の字口縁／口唇部は丸く刻みなし／外面口縁部直下に輪積み痕が残る	内面：ハケ目調整、胴部は口縁部より目の粗いハケ目／外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第8図34 図版5-34	甕	胴部上半 破片	厚 0.4	胴部は球状／外面は黒く煤けている	内面：ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	P2すぐ東側の ほぼ床面上
第8図35 図版5-35	甕	胴部上半 破片	厚 0.3	胴部は球状／外面は黒く煤けている	内外面：ハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第8図36 図版5-36	甕	胴部破片	厚 0.4	胴部は球状／外面は黒く煤けている	内面：ハケナデ／外面：目の細かいハケ目調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴内
第8図37 図版5-37	甕	胴部破片	厚 0.5	胴部は球状／外面は黒く煤けている	内外面：ハケ目調整、内面は外面より目の粗いハケ目	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第8図38 図版5-38	甕	胴部下半 破片	厚 0.8	叩き甕／タタキ目は胴部下半の底部に近い部分に施されている	内面：タタキ成形後ヘラ磨き調整／外面：タタキ成形	淡茶褐色を基調／砂粒・小石を含む	覆土中
第8図39 図版5-39	ミニチュア土器か	体部 小破片	高 [3.2]	甜形か／球状の体部／外面に黒色処理が施されている	内面：指頭によるナデ／外面：ヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第8図40 図版5-40	壺	胴部 小破片	厚 0.4	絵画土器と思われる	絵画と思われるものは幅1mm未満の細線による2本の直線で、長さは1本が2.5cm、もう1本が0.7cm／内面：ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗茶褐色／茶褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む	覆土中
第8図41 図版5-41	甕	胴部 小破片	厚 0.4	絵画土器／42と同一個体と思われる	絵画は幅1mm未満の細線により格子目状に描かれている／細線の施文順は縦線より横線が後／図柄は切妻家屋の屋根を表しているものか／内面：ハケ目調整	淡茶褐色／黄褐色粒子を僅かに含む	貯蔵穴内
第8図42 図版5-42	甕	胴部 小破片	厚 0.4	絵画土器／41と同一個体と思われる	絵画は幅1mm未満の細線により格子目状に描かれている／細線の施文順は縦線より横線が後／図柄は切妻家屋の屋根を表しているものか／内面：ハケ目調整	淡茶褐色／黄褐色粒子を僅かに含む	覆土中

第４表　405号住居跡出土土器一覧（３）

挿図番号 図版番号	種別	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	特　徴	出土位置
第８図43 図版５-43	土製品	勾　玉	3.2	1.5	1.8	8.2	上端部を欠損する／内側側面は丸くなくやや角張っている／内外面は黒色（黒色処理か）／胎土中に角閃石を僅かに含む	覆土中
第８図44 図版５-44	石　器	砥　石	4.1	3.4	1.6	38.0	上下両端を欠損／長方形／砥面は表裏面の２面／左右両側面に成形時の加工痕／凝灰岩製	覆土中
第８図45 図版５-45	石　器	砥　石	5.3	3.4	3.4	53.0	上下両端を欠損／平面形は上部から下部に向かって末広がり状となる／横断面は五角形／砥面は表裏面、右側面、左上下側面の５面／泥岩製	貯蔵穴内

（単位：cm，g）

第５表　405号住居跡出土土製品・石器一覧

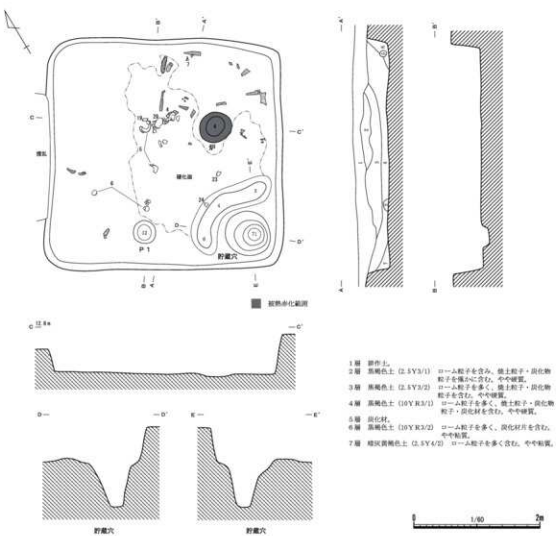
406号住居跡

遺　　構（第９図）

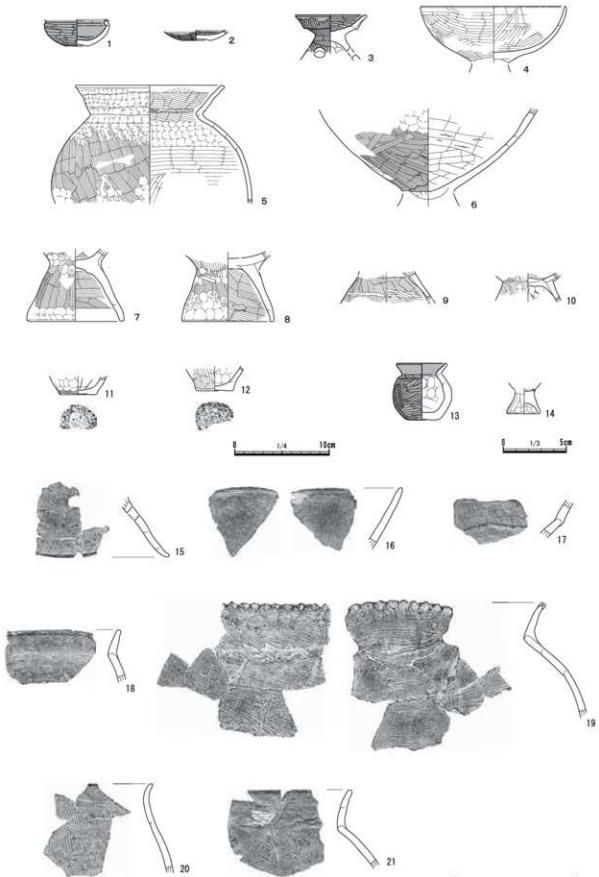
［位　　置］調査区南西側。

［検出状況］404・405Yを切る。

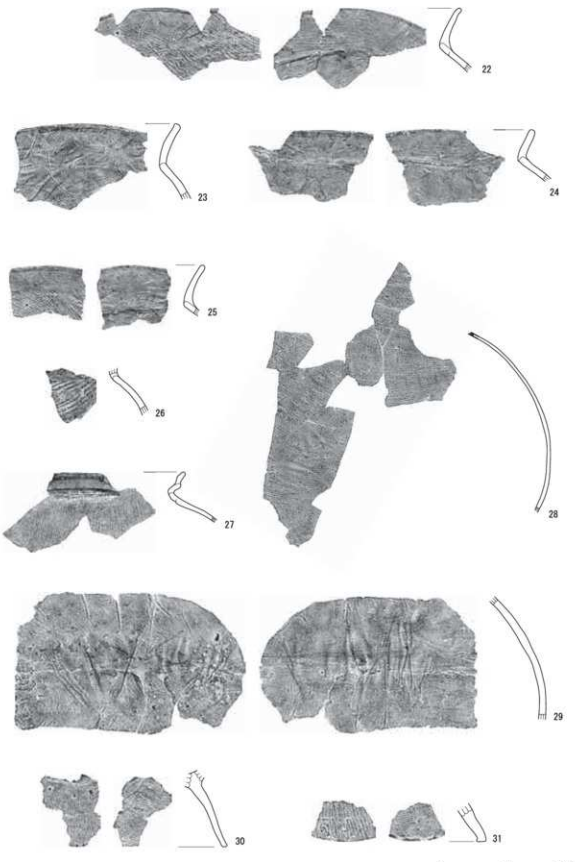
［構　　造］**平面形**：方形。**規模**：長軸3.80m／短軸3.68m／確認面から床面までの深さ48～62㎝。**壁**：75°程度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－30°－Ｅ。**壁溝**：検出されなかった。**床面**：住居跡中央か



第９図　406号住居跡（1／60）



第10図　406号住居跡出土遺物１（1／4・1／3）



第11図　406号住居跡出土遺物２（1／3）

掲図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第10図1 図版6-1	坩	頸部～底部90%	高 [2.9] 底 2.4×2.2	小型坩／口縁部を欠損する／頸部は「く」の字状／底部は基台底（楕円形）／内外面に赤彩	内外面：ヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／茶褐色粒子・黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図2 図版6-2	坩	体部下半～底部70%	高 [1.1] 底 2.8	小型坩／底部は基台底／内外面に赤彩	内面：ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図3 図版6-3	器台	口縁部～脚台部上半40%	高 [4.2] 口 (7.6)	有段口縁／口縁部は外反する／脚台部途中に円形の透かし孔2カ所確認／内外面に赤彩	内面：口縁部はヘラ磨き調整、脚台部は指頭による成形痕が残る／外面：ヘラ磨き調整、口縁部はその後横ナデ	暗黄褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第10図4 図版6-4	高坏	坏部70%	高 [6.0] 口 15.4	坏部は全体的に内湾する器形／脚台部は欠損／脚台部との接点は平坦で丸く出っ張っていない／赤彩は不明	内面：ヘラナデ後ヘラ磨き調整／外面：ヘラ磨き調整、口縁部は器面の遺存状態が不良のため不鮮明	暗黄褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を含む	住居中央やや北東壁寄りのほぼ床面上
第10図5 図版6-5	甕	口縁部～胴部中位70%	高 [12.5] 口 15.8	「く」の字口縁／口縁部は外反する／最大径は胴部中にもつ／内外面全体が赤味の強い土器	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部はハケ目調整後に上半部は指頭押捺、中位以下はヘラ磨き調整／外面：口縁部からその直下は指頭押捺後に横ナデ、以下はハケ目調整後に指頭押捺	暗赤褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	住居中央のほぼ床面上（2点接合）
第10図6 図版6-6	甕	胴部下半20%	高 [9.6]	台付甕／脚台部との接点はソケットタイプでない	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後胴部中位以上は指頭押捺	暗赤褐色／茶褐色粒子・黄褐色粒子・砂粒を含む	住居中央から西コーナー寄りの床面上（2点接合）
第10図7 図版6-7	甕	胴底部～脚台部50%	高 [7.7] 底 (10.2)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／裾部は内湾する	内面：胴底部はハケ目調整後ヘラナデ。脚台部はハケ目調整で、裾部は横ナデ／外面：ハケ目調整後部分的に指頭押捺	暗橙色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	北東壁近くのほぼ床面上
第10図8 図版6-8	甕	胴底部～脚台部40%	高 [7.4] 底 (9.8)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／全体に僅かに内湾気味	内面：胴底部はヘラナデ、脚台部はハケ目調整／外面：ハケ目調整後部分的に指頭押捺、その後胴底部はヘラ磨き調整	暗赤褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図9 図版6-9	甕	脚台部上半70%	高 [3.4]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／内面に成形時の粘土紐付痕が観察できる	内外面：粗い目のハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗茶色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図10 図版6-10	甕	胴底部～脚台部上半40%	高 [3.1]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面：指ナデ／外面：粗い目のハケ目調整後部分的に指頭押捺	暗黄褐色を基調／砂粒を含む	覆土中
第10図11 図版6-11	壺	胴部下半～底部50%	高 [2.0] 底 4.0	小型壺／底部は輪台状で中央が円形状に僅かに窪む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後指頭による押捺	黄褐色／茶褐色粒子（大粒で7mm）・角閃石・砂粒を含む	覆土中
第10図12 図版6-12	壺	胴部下半～底部50%	高 [2.6] 底 4.0	小型壺／底部からの立ち上がりは急なため、胴部はあまり膨らまないと思われる／底部は輪台状で中央が円形状に窪んでいる／外面に黒斑あり	内面：指頭によるナデ／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図13 図版6-13	ミニチュア土器	80%	高 4.5 口 (4.0) 底 2.8	壺形／「く」の字口縁／最大径は胴部中位にもつ／平底であるが、底部中央は僅かに窪んでいる／口縁部内面及び外面に赤彩	内面：口縁部は横ナデ、以下はナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／砂粒・小石を含む	覆土中
第10図14 図版6-14	ミニチュア土器	胴底部～脚台部90%	高 [2.0] 底 2.7	台付甕形か／脚台部は「ハ」の字状	内面：胴底部はヘラ磨き調整、脚台部は指頭による成形痕が残る／外面：ヘラ磨き調整、裾部には指頭による成形痕が残る	暗黄褐色／茶褐色粒子・橙色粒子・砂粒をやや多く含む	覆土中
第10図15 図版6-15	高坏	脚台部破片	高 [5.6]	脚台部は「ハ」の字状／裾部は外反する／外面に赤彩	径1cmほどの透かし孔1か所あり／内面：ヘラナデ後裾部は横ナデ／外面：ハケ目調整後裾部は横ナデ、その後ヘラ磨き調整	暗赤褐色／黄褐色粒子をやや多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中

第６表　406号住居跡出土土器一覧（１）

掲図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第10図16 図版6-16	高坏	坏口縁部 破片	厚 0.5	全体に口縁部に向かって内湾気味に開く／内外面に赤彩	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図17 図版6-17	高坏	坏部下半 破片	厚 0.6	下半部に段があまる／口縁部は外反する／内外面に赤彩か	内外面：ヘラ磨き調整	暗黄褐色／角閃石・黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図18 図版6-18	鉢	口縁部～ 胴部上半 破片	厚 0.5	「く」の字口縁／口縁部は外反する／内外面に赤彩	内外面：ヘラ磨き調整	暗赤褐色／角閃石・茶褐色粒子・白色砂粒を含む	貯蔵穴内
第10図19 図版6-19	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [9.3]	「く」の字口縁／口縁部は直立気味に外反する／口唇部内面にハケ状工具による刻みをまわし、交互押捺状／内面胴部上半に明瞭な輪積み痕が残る／内面は部分的に黒く煤けている	内面：口縁部はハケ目調整、胴部上半はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整、以下（輪積み痕以下）はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後口縁部は軽く横ナデ	暗赤褐色／砂粒を含み、茶褐色粒子・小石を僅かに含む	住居中央やや北東壁寄りのほぼ床面上
第10図20 図版6-20	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	厚 0.4	胴部から口縁部の移行はスムーズ／口縁部は外反する／口唇部は丸い／外面及び内面口縁部は黒色	内面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整	暗赤褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第10図21 図版6-21	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [6.0] 厚 0.4	「く」の字口縁／口縁部は外反する／口唇部は丸い	内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整	暗赤褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第11図22 図版6-22	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [6.2] 厚 0.6	「く」の字口縁／口縁部は外反する／口唇部は僅かに平ら／外面は黒く煤けている	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第11図23 図版6-23	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [6.2] 厚 0.6	「く」の字口縁／口縁部は内湾気味に開く／口唇部は僅かに平ら／外面は黒く煤けている	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	炉の南西側のほぼ床面上
第11図24 図版6-24	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [4.2] 厚 0.5	「く」の字口縁／口縁部は外反する／口唇部は僅かに平ら／外面は僅かに黒く煤けている	内面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ	暗赤褐色を基調／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	貯蔵穴凸堤上
第11図25 図版6-25	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [3.8]	「く」の字口縁／口縁部は外反する／口唇部は丸い	内面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後口縁部は横ナデ	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第11図26 図版6-26	甕	頸部～胴部上半 小破片	厚 0.4	胴部から頸部の移行はスムーズ	内面：頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ／外面：頸部は横ナデ、胴部は粗い目のハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第11図27 図版6-27	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [3.7] 厚 0.2～ 0.4	S字口縁甕／胴部上半の張りは強い／全体に薄手で精巧に作られている／外面は黒く煤けている	内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部は目の細かいハケ目調整／内面胴部には指頭による成形痕が残り、指紋も観察できる	淡黄褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第11図28 図版7-1-28	甕	胴部上半 ～下半 破片	厚 0.1～ 0.3	S字口縁甕の胴部破片／胴部上半の張りは強い／全体に薄手で精巧に作られている／外面は黒く煤けている	内面：ヘラナデ／外面：細かいハケ目調整、ハケ目は胴部上半は羽状構成、以下は左上がり／内面胴部には指頭による成形痕が残り、指紋も観察できる	灰褐色／砂粒を含む	覆土中
第11図29 図版7-1-29	甕	胴部上半 ～中位 破片	厚 0.4	胴部は球状／外面胴部上半は黒く煤けている	内面：細かい目のハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整	暗赤褐色を基調／黄褐色粒子をやや多く、角閃石・茶褐色粒子・砂粒を含む	住居中央やや北東壁寄りのほぼ床面上
第11図30 図版7-1-30	甕	胴底部～ 脚台部 破片	高 [6.0]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面：胴底部はヘラナデか／脚台部内外面はほぼハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第11図31 図版7-1-31	甕	脚台部	高 [2.8]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／裾部は内湾気味に開く	内外面：粗い目のハケ目調整	暗茶褐色／黄褐色粒子・橙色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中

第６表　406号住居跡出土土器一覧（２）

ら東側にかけて硬化面を確認できた。**炉**：住居跡中央よりやや南東壁寄りに位置する。楕円形の地床炉である。長軸53㎝／短軸46㎝／深さ４㎝。**貯蔵穴**：住居南コーナーより検出された。74×69㎝の楕円形で、深さ71㎝。北側に、高さ３～６㎝の凸堤が確認できた。**柱穴**：主柱穴と思われるものは確認できなかった。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：南西壁中央のＰ１が入口ピットと思われる。38×36㎝の円形で、深さ12㎝。

［覆　　土］６層（２～７層）に分層される。床面上から炭化材を多く出土した。

［遺　　物］坩・器台・鉢・高坏・壷・甕形土器、ミニチュア土器が出土した。

［時　　期］古墳時代前期後葉。

［所　　見］床面上から炭化材が多く出土したことから、焼失住居と考えられる。

遺　　物（第10・11図、図版６、図版７－１、第６表）

１・２は坩形土器、３は器台形土器、18は鉢形土器、４・15～17は高坏形土器、11・12は壷形土器、５～10・19～31は甕形土器、13・14はミニチュア土器で、13は壷形、15は台付甕形と思われる。

407号住居跡

遺　　構（第12図）

［位　　置］調査区南西隅。

［検出状況］408Ｙ・18Ｈに切られ、404・409・415Ｙを切る。住居内西側はかなりの部分が攪乱により破壊されている。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形か。**規模**：長軸6.60m以上／短軸4.20m以上確認面から床面までの深さ13～22㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：不明。**壁溝**：上幅13～15㎝／下幅４～６㎝／深さ４～10㎝。**床面**：一部硬化面を確認できた。**炉**：僅かであるが408Ｙとの境にある被熱赤化範囲が炉と思われる。**貯蔵穴**：東南壁際から検出された。外側は112×70㎝方形で深さ10㎝程のテラスがあり、その内側が80×65㎝の楕円形に掘り込まれている。深さ45㎝。**柱穴**：主柱穴と思われるものはＰ１とＰ２の２本でＰ２は重複形を呈する。深さ37～82㎝。**赤色砂利層**：貯蔵穴の北側の床面直上に85×50㎝の範囲で確認できた。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　　土］３層（２～４層）に分層される。

［遺　　物］器台・高坏・壷・甕形土器が出土した。その他として、穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩１点が出土している。

［時　　期］古墳時代前期中葉。

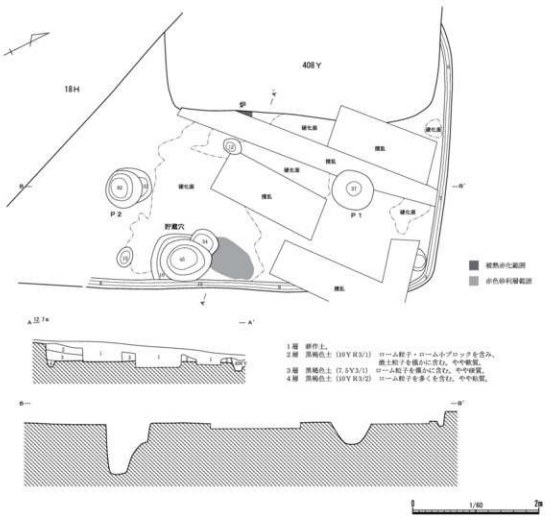
遺　　物（第13図、図版７－２、第７表）

［土　　器］（第13図１～11、図版７－２－１～11、第７表）

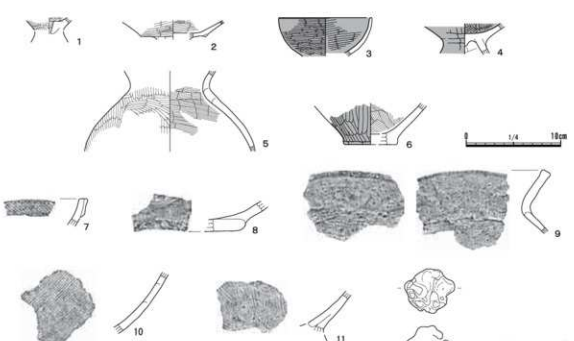
１・２は器台形土器、３・４は高坏形土器、５～８は壷形土器、９～11は甕形土器である。

［そ の 他］（第13図12、図版７－２－12）

12は穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩である。長さ4.0㎝・幅3.5㎝・厚さ2.3㎝・重さ15.6ｇ。穿孔の大きさは大小さまざまで、小さなものは径２㎜、大きなもので径４㎜。穿孔は中心では１つ１つがかなり重なっており、やや広い空間状になっている。色調は淡黄褐色～赤褐色で、全体に被熱しているものと思われる。覆土中の出土である。



第12図　407号住居跡（1／60）



第13図　407号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第13図1 図版7-2-1	器台	受部下半 破片	高 [1.7]	中心に径0.8cm程の貫通孔あり／受部にソケット状の接合部が残る	内外面：ヘラ磨き調整	明黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子を含む	覆土中
第13図2 図版7-2-2	器台	受部20％	高 [2.0]	有段口縁／口縁部は外傾する	内外面：ヘラ磨き調整、僅かに細かい目のハケ目調整が残る／外面の坏部と脚台部の境には指頭による成形痕が残る	黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒をやや多く含む	覆土中
第13図3 図版7-2-3	高坏	坏部20％	高 [4.1] 口 (9.9)	口縁部は内湾する／体部下半に弱い稜をもつ／内外面に赤彩	内外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／砂粒・角閃石をやや多く、茶褐色粒子を含む	覆土中
第13図4 図版7-2-4	高坏	坏部下半 ～脚台部 上半60％	高 [3.3]	坏部は外傾する／脚台部は「ハ」の字状／坏底部はソケット状／脚台部内面を除き赤彩	内面：坏部はヘラ磨き調整、脚台部はヘラナデ／外面：ヘラナデ	赤褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第13図5 図版7-2-5	壺	頸部～胴 部中位 40％	高 [8.6]	球状の胴部から頸部はすぼまり、頸部は外反気味に立ち上がる／口頸部内面及び外面に赤彩か	内面：ハケ目調整／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／砂粒・小石をやや多く、茶褐色粒子を含む	覆土中
第13図6 図版7-2-6	壺	胴部下半 ～底部 40％	高 [4.4] 底 (5.8)	平底／外面に赤彩	内面：ハケ目調整／外面：粗い目のヘラ磨き調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第13図7 図版7-2-7	壺	口縁部 小破片	厚 0.5	小型壺／幅狭の複合口縁／口縁部はやや内湾気味に開く／口頸部は平坦／内面に赤彩	文様は外面複合部にR無節斜縄文を施文し、円形赤彩文1か所を付す／内面：ヘラ磨き調整	黒褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第13図8 図版7-2-8	壺	胴部下半 ～底部 20％	高 [2.6]	平底／外面に赤彩	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第13図9 図版7-2-9	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [5.0]	「く」の字口縁／口縁部は外傾する／口唇部は僅かに平坦／外面に煤付着	内面：口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整／口縁部は横ナデ、胴部はハケ目調整	黄褐色／砂粒・小石をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	覆土中
第13図10 図版7-2-10	甕	胴部下半 破片	厚 0.7	胴部下半から脚台部への移行はすぼまる	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	暗黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第13図11 図版7-2-11	甕	胴部中位 ～下半 破片	厚 0.5	胴部は丸味をもつ	内面：ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整	黒褐色／角閃石・砂粒を含む	覆土中

第７表　407号住居跡出土土器一覧

408号住居跡

遺　　構（第14図）

［位　　置］調査区南西隅。

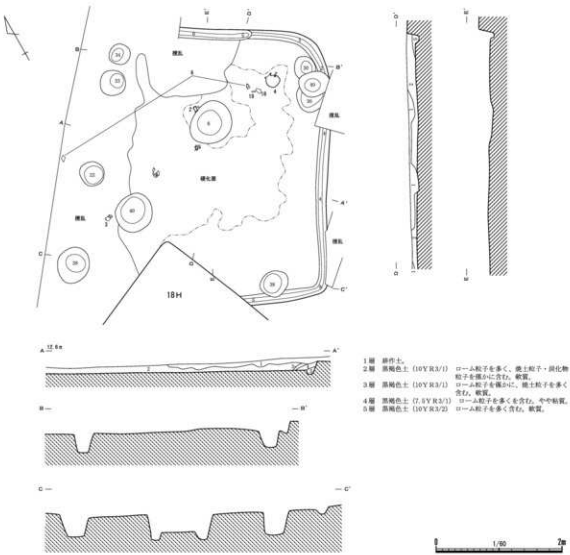
［検出状況］18Hに切られ、404・407Ｙを切る。住居西側は撹乱により大きく壊されている。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸4.38m／短軸4.20ｍ以上／407Ｙ床面からの深さ15㎝前後。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－30°－Ｅ。**壁溝**：上幅14～19㎝／下幅４～７㎝／深さ２～８㎝。**床面**：住居跡中央付近に硬化面が確認できた。**炉**：中央よりやや西側に位置する。楕円形の地床炉である。長軸72㎝／短軸60㎝／深さ６㎝。**貯蔵穴**：確認できなかった。**柱穴**：検出されたピットが本遺構に伴うのか不明。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　　土］４層（２～５層）に分層される。

［遺　　物］器台・高坏・壺・甕・甑形土器、ミニチュア土器が出土した。

［時　　期］古墳時代前期後葉。



第14図　408号住居跡（1／60）

遺　　物（第15・16図、図版７－３、図版８－１、第８表）

１は器台形土器、２・３・８は高坏形土器、４・９～13は壷形土器、５・６・14～19は甕形土器、20は甑形土器である。７はミニチュア土器の底部破片である。

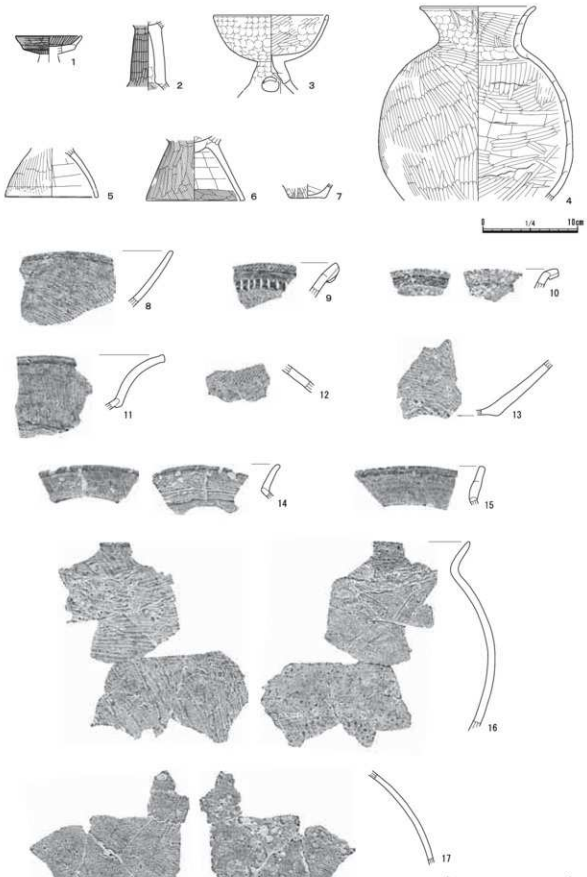
409号住居跡

遺　　構（第17図）

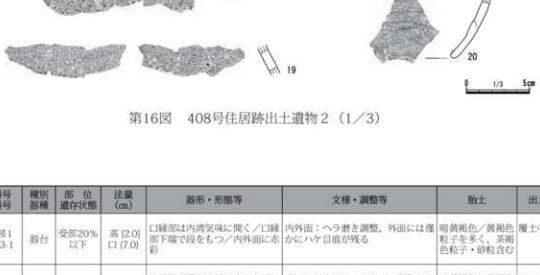
［位　　置］調査区南西隅。

［検出状況］365・407・415Yに切られる。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形か。**規模**：長軸5.1m以上／短軸4.2m以上／確認面から床面までの深さ23～36㎝。**壁**：80°程度で立ち上がる。**長軸方位**：不明。**壁溝**：上幅15～20㎝／下幅4～6㎝／深さ4～7㎝。**床面**：炉の周辺から南壁にかけて硬化面が確認できた。**炉**：住居跡中央よりやや北側に位置する。楕円形の地床炉である。長軸78㎝／短軸63㎝／深さ23㎝。礫が中央から４点、炉跡西側から２



第15図　408号住居跡出土遺物１（1／4・1／3）



第16図　408号住居跡出土遺物２（1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第15図1 図版7-3-1	器台	受部20% 以下	高 [2.0] 口 (7.0)	口縁部は内湾気味に開く／口縁部下端で段をもつ／内外面に赤彩	内外面：ヘラ磨き調整、外面には僅かにハケ目痕が残る	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒含む	覆土中
第15図2 図版7-3-2	高坏	脚柱部～ 裾部80%	高 [7.3]	柱状脚／裾部は外反すると思われる／外面に赤彩	内面：坏底部はヘラナデ、脚柱部は指ナデ、裾部はハケ目調整／外面：ヘラ磨き調整、脚部上半には指頭による成形痕が残る	暗黄褐色／黄褐色粒子・角閃石・砂粒・小石を含む	炉のすぐ北側のほぼ床面上
第15図3 図版7-3-3	高坏	口縁部～ 脚台部裾 部50%	高 [8.3] 口 (12.2)	坏部は全体に内湾する／脚台部は「ハ」の字状で裾部は内湾する／脚台部に大きな円形の透かし孔（径1.8cm程）3か所あり、下方は開放しないと思われる	内面：坏部はヘラ磨き調整後指頭押捺、脚台部は指頭押捺／外面：指頭押捺により全体がぼんやりしている	淡黄褐色／砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	西コーナー近くのほぼ床面上
第15図4 図版7-3-4	壺	口縁部～ 胴部下半 50%	高 [20.5] 口 12.2	口頸部は外反する／最大径は胴部下半／外面胴部に黒斑	内面：ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整、頸部に指頭押捺痕／外面：口縁部は軽いヘラ磨き調整、胴部はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、口頸部はその後指頭押捺／ヘラ磨き調整は幅広	黄褐色粒子をやや多く、雲母・砂粒を含む	住居東コーナーのほぼ床面上
第15図5 図版7-3-5	甕	脚台部 50%	高 [5.2] 底 (9.8)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／裾部にかけて全体に内湾気味	内面：ヘラナデ後裾部は横ナデ／外面：粗い目のハケ目調整後ヘラ磨き調整、裾部はその後粗いヘラナデ／ヘラ磨き調整は幅広	暗赤褐色／橙色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第15図6 図版7-3-6	甕	脚台部 50%	高 [6.8] 底 10.4	台付甕／「ハ」の字状／脚台部内面の上端は粘土塊によりソケット状	内面：胴底部はヘラナデ、脚台部はハケ目調整後ヘラナデ／外面：ハケ目調整目	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	住居東・西コーナー付近の床面上から散在的(2点接合)
第15図7 図版7-3-7	ミニチュア土器	胴部下半 ～底部 60%	高 [1.5] 底 3.8	壺形／平底	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、部分的に指頭による底形痕が残る	暗赤褐色／黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図8 図版8-1-8	高坏	口縁部 破片	厚 0.4	口縁部は内湾気味に開く／口唇部は平坦気味／内外面に赤彩	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／ハケ目痕は外面が顕著に残る	暗黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第15図9 図版8-1-9	壺	口頸部 破片	高 [3.2]	幅狭複合口縁／口縁部は緩やかに外反する／口唇部は平坦／内外面に赤彩か	外面複合部下端にハケ状工具による刻みが走まわる／口唇部にＬＲ単節斜縄文が施文／内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図10 図版8-1-10	壺	口頸部 小破片	高 [1.7]	幅狭複合口縁／口縁部は屈曲し、外反する／内面口縁部直下及び外面複合部直下に赤彩	内面口縁部にＲＬ単節斜縄文、口唇部にＬＲ単節斜縄文を施文／内面：無文部及び外面はヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中

第８表　408号住居跡出土土器一覧（1）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第15図11 図版8-1-11	壷	口縁部 破片	高 [5.7]	二重口縁壷／口唇部は平坦／口縁部は外反する	内面：ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整、口縁部上半はハケ目調整後軽い横ナデ、その後ヘラ磨き調整	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第15図12 図版8-1-12	壷	胴部上半 破片	厚 0.6	胴部は膨らみをもつ／外面無文部に赤彩	胴部上半に自縄結節文を伴うＬＲ単節斜縄文を施文／内面：ヘラナデ／外面：無文部はヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図13 図版8-1-13	壷	胴部下半 ～底部 破片	高 [4.8]	平底から底部から立ち上がり、胴部は膨らみをもつ	内面：ヘラナデ／外面：底部までハケ目調整が顕著で、その後僅かにヘラ磨き調整	黄褐色を基調／砂粒をやや多く、角閃石・黄褐色粒子・橙色粒子を含む	覆土中
第15図14 図版8-1-14	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	厚 0.5	「く」の字口縁／口縁部は僅かに外反する／胴部と口縁部の境に輪積み痕が残る	内外面：口縁部はハケ目調整後横ナデ、胴部はハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図15 図版8-1-15	甕	口縁部 破片	厚 0.6	「く」の字口縁／口縁部は外傾する／口唇部はやや中央が窪み平坦気味／外面は黒く煤けている	内外面：横ナデ	暗茶褐色／茶褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第15図16 図版8-1-16	甕	口縁部～ 胴部下半 破片	高 [15.8] 厚 0.5	「く」の字口縁／口縁部は内湾気味に開く／口唇部は丸く、刻みなし／胴部は球状で、最大径は胴部中位にもつ	内面：口縁部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部は上半がハケ目調整、中位以下はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整か	黄褐色を基調／橙色粒子を多く、黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第15図17 図版8-1-17	甕	胴部上半 ～中位 破片	厚 0.4	胴部は膨らみをもつ／外面は黒く煤けている	内面：ハケ目調整後ヘラナデ／外面：ハケ目調整	淡茶褐色を基調／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第16図18 図版8-1-18	甕	胴部下半 破片	厚 0.7	台付甕／脚台部に近い部分はくびれて器厚が厚くなっている／内面は黒く煤けている	内面：ヘラナデ／外面：粗い目のハケ目調整	淡茶褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	住居東コーナーのほぼ床面上
第16図19 図版8-1-19	甕	脚台部 破片	厚 0.7	脚台部は「ハ」の字状	内外面：粗い目のハケ目調整	暗赤褐色を基調／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	住居東コーナーのほぼ床面上
第16図20 図版8-1-20	甕	胴部下半 ～底部 破片	厚 0.6	小型品／底部穿孔タイプ／器形は全体的に逆三角形になるものか／外面に赤彩	内面：ナデ、底部付近に布目圧痕あり、ナデについても布目によるナデか／外面：ヘラ磨き調整	暗黄褐色／砂粒を僅かに含む	覆土中

第８表　408号住居跡出土土器一覧（２）

点出土した。**貯蔵穴**：確認できなかった。**柱穴**：検出されたものが伴うのか不明。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：南壁中央のＰ１が入口ピットと思われる。36×30㎝の円形で、深さ12㎝。

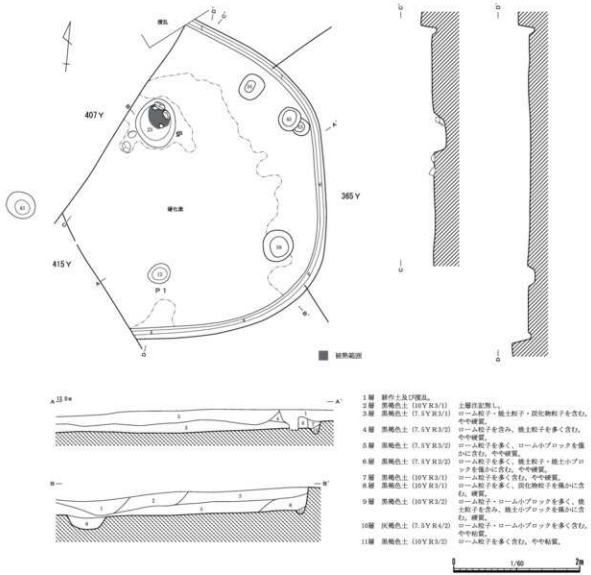
［覆　　土］10層（２～11層）に分層される。

［遺　　物］坩・鉢・壷形土器が出土した。

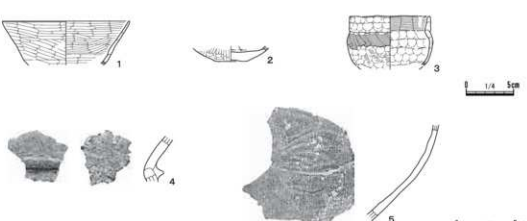
［時　　期］弥生時代後期末葉。

遺　　物（第18図、図版８－２、第９表）

１・２は坩形土器、３は鉢形土器、４・５は壷形土器である。



第17図　409号住居跡（1／60）



第18図　409号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第18図1 図版8-2-1	坩	口縁部～ 体部中位 20%	高 [4.7] 口 (13.4)	口縁部は内湾気味に外傾する／口縁部から底部にかけてややくびれ、体部は丸味をもつ／内外面が黒色であることから黒色土器と思われる	内外面：ヘラ磨き調整、外面の底部付近はヘラ削り的にやや粗く面になっている	暗茶褐色を基調／黄褐色粒子・橙色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第18図2 図版8-2-2	坩	胴部下半 ～底部 60%	高 [1.6] 底 3.4	碁笥底であるが、やや輪台状	内面：ヘラナデ（先端がささくれ状）／外面：ヘラ磨き調整／底部付近に指頭による成形痕が僅かに残る	暗黄褐色／砂粒を含む	覆土中
第18図3 図版8-2-3	鉢	口縁部～ 胴部下半 40%	高 [5.6] 口 (8.4)	小型鉢／坩であろうか／口縁部は直立し、複合口縁状に輪積み痕を残す／最大径は胴部上半にもつ／内外面が黒色であることから黒色土器と思われる	内面：口縁部はハケ目調整、胴部は指頭による指ナデ及び押捺／外面：口縁部は指頭による指ナデ、胴部上半はハケ目調整、底部はヘラ削り。但し、胴部中位から下半は器面が剥離しているように一段下がりハケ目痕を僅かに残すが指頭押捺が施される	暗茶褐色を基調／橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第18図4 図版8-2-4	壺	頸部～胴 部上半 破片	厚 0.6	頸部屈曲部に断面三角形の凸帯がまわる	内面：ハケ目調整後ヘラナデ／外面：ハケ目調整、凸帯部は横ナデ／内面頸部には指頭による成形痕が僅かに残る	黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第18図5 図版8-2-5	壺	胴部中位 ～下半 破片	厚 0.3	胴部は丸味をもつ	内面：ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／内面は遺存状態が悪く剥落が著しい	淡茶褐色／砂粒を含む	覆土中

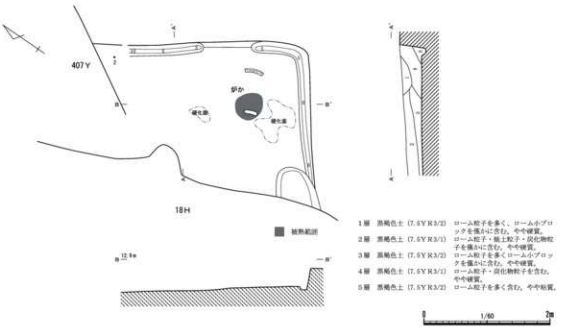
第９表　409号住居跡出土土器一覧

415号住居跡

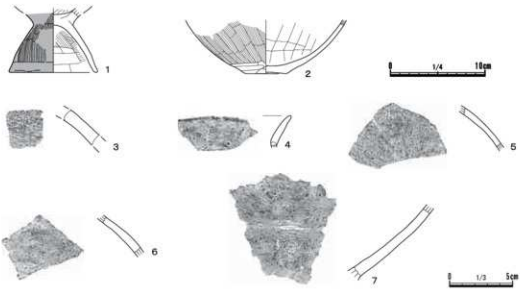
遺　　構（第19図）

［位　　置］調査区南西隅。

［検出状況］407Ｙ・18Ｈに切られ、409Ｙを切る。住居東コーナー部分のみの検出である。住居跡南



第19図　415号住居跡（1／60）



第20図　415号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

掲図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第20図1 図版8-3-1	高杯	胴部下半 ～脚台部	高 [6.8] 底 (9.4)	台付甕／脚台部は「ハ」の字状、中位は僅かに膨らみをもつ／外面に赤彩	内面：ハケ目調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整、裾部はその後横ナデ	暗赤褐色／赤褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第20図2 図版8-3-2	甕	胴部下半 ～底部 60%	高 [5.7] 底 4.6	平底甕か／緩筒底	内面：ヘラナデ／外面：粗い目のハケ目調整、胴部下半はヘラ削り／被熱により遺存状態が悪いためか器面全体が剥落気味	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	北東壁の北隅のほぼ床面上
第20図3 図版8-3-3	壺	胴部上半 小破片	厚 0.9	胴部は膨らみをもつ	文様はＲＬ単節斜縄文の下端に自縄結節文３段を施文／内面：ヘラナデ／外面：無文部はハケ目調整後ヘラ磨き調整	淡茶褐色を基調／黄褐色粒子・黒色粒子・砂粒を含む	覆土中
第20図4 図版8-3-4	甕	口縁部小 破片	厚 0.5	口縁部は外反する	内外面：横ナデ	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第20図5 図版8-3-5	甕	胴部上半 破片	厚 0.3	胴部は膨らみをもつ	内面：ハケナデ／外面：ハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒含む	覆土中
第20図6 図版8-3-6	甕	胴部上半 破片	厚 0.6	口縁部は外反する	内面：粗い目のハケ目調整／外面：目の細かいハケ目調整	淡茶褐色を基調／砂粒を含む	覆土中
第20図7 図版8-3-7	甕	胴部下半 破片	厚 0.8	台付甕／胴部下半から脚台部の移行はくびれている／内外面黒色	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗茶褐色／黄褐色粒子・橙色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中

第10表　415号住居跡出土土器一覧

端の18Ｈとの境にある掘り込みについては不明。

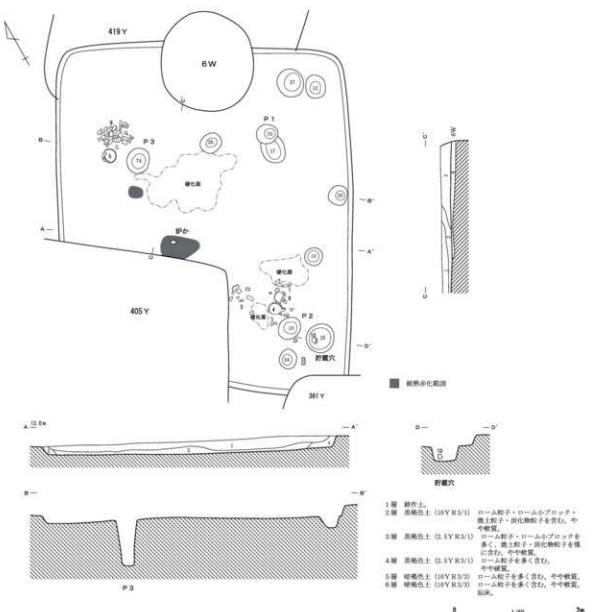
［構　　造］**平面形**：方形か。**規模**：長軸3.40m以上／短軸2.60m以上／確認面から床面までの深さ25～35㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－38°－Ｗ。**壁溝**：北東壁で一部途切れている。上幅13～20㎝／下幅3～8㎝／深さ3～10㎝。**床面**：一部硬化面を確認できた。**炉**：住居東コーナーから検出された被熱範囲を炉と考えた。被熱上面から礫が1点出土した。**貯蔵穴**：確認できなかった。**柱穴**：確認できなかった。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　　土］５層に分層される。

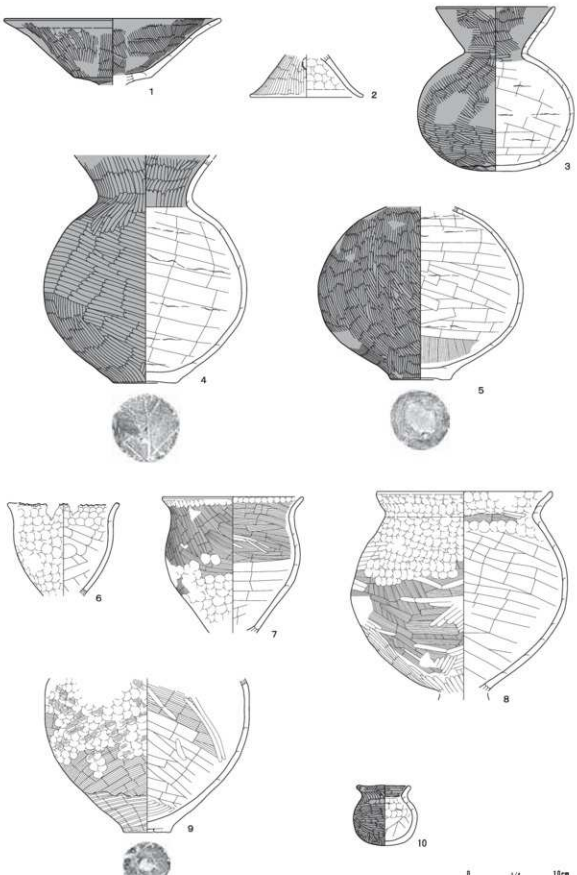
［遺　　物］高坏・壷・甕形土器が出土した。
［時　　期］古墳時代前期前葉。
遺　　物（第20図、図版８－３、第10表）
１は高坏形土器、３は壷形土器、２・４～７は甕形土器である。

416号住居跡

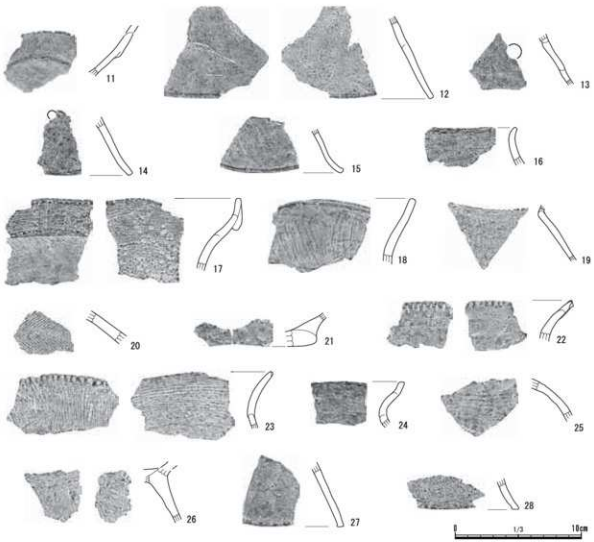
遺　　構（第21図）
［位　　置］調査区中央。
［検出状況］361・405・419Y・６Wに切られ、418Ｙを切る。
［構　　造］**平面形**：隅丸長方形。**規模**：長軸5.48m／短軸4.70m／確認面から床面までの深さ10～18㎝。**壁**：65°程度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－28°－Ｅ。**壁溝**：検出されなかった。**床面**：一部で硬



第21図　416号住居跡（1／60）



第22図　416号住居跡出土遺物１（1／4）



第23図　416号住居跡出土遺物２（1／3）

化面を確認できた。**炉**：住居中央付近の被熱赤化した部分が炉と思われる。楕円形で、長軸63㎝／短軸不明／掘り込みなし。礫1点出土した。**貯蔵穴**：住居南コーナーよりで検出された。径45㎝のほぼ円形で、深さ25㎝。坑底近くからミニチュア土器（10）が出土した。**柱穴**：Ｐ１～Ｐ３が主柱穴と思われるが、Ｐ2の深さは10㎝と浅いため伴うものか疑問が残る。Ｐ１の深さは70㎝、Ｐ３の深さは74㎝。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：確認できなかった。

［**覆　　土**］５層（２～６層）に分層される。

［**遺　　物**］高坏・壷・甕形土器、ミニチュア土器が出土した。

［**時　　期**］古墳時代前期前葉。

遺　　物（第22・23図、図版９、図版10－１、第11表）

１・２・11～15は高坏形土器、３～５・16～21は壷形土器、６～９・22～28は甕形土器である。10はミニチュア土器と思われる。

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第22図1 図版9-1	高坏	坏部25％	高 [7.0] 口 (23.0)	口縁部は大きく外反する／坏部下端に稜をもつ／内外面に赤彩	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面口縁部はヘラ磨き調整前に横ナデ、口縁部直下には指頭による成形痕が残る	暗赤褐色を基調／茶褐色粒子・黄褐色粒子・砂粒を含む	住居南コーナー P2北側のほぼ床面上
第22図2 図版9-2	高坏	脚台部 20％以下	高 [4.5] 底 (12.0)	「ハ」の字状の脚台部で、裾部は大きく外反する／上半部に円形の透かし孔２か所確認	内面：指頭による成形痕、裾部は横ナデ／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴内
第22図3 図版9-3	壺	50％	高 17.4 口 12.6	口縁部は僅かに内湾気味に外傾する／頸部から口縁部は「く」の字状に屈曲する／最大径は胴部中位にもつ／丸底／口縁部内面及び外面に赤彩／外面胴部から底部にかけて黒斑	内面：口縁部はヘラ磨き調整、以下はヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整、部分的にハケ目痕が残る	暗赤褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	住居南コーナー P2北側のほぼ床面上
第22図4 図版9-4	壺	頸部～底部40％	高 [24.1] 底 6.8	胴部から頸部は「く」の字状に屈曲する／最大径は胴部中位にもつ／平底／底部に木葉底／口縁部内面及び外面に赤彩／口縁部は欠損する	内面：口縁部はヘラ磨き調整、胴部はヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子・橙色粒子を非常に多く、砂粒を含む	住居南コーナー P2すぐ北側のほぼ床面上
第22図5 図版9-5	壺	胴部上半部～底部60％	高 [18.3] 底 6.6	胴部下半に最大径をもつ／底部は輪台状に中央が窪んでいる／外面に赤彩	内面：胴部上半から中位はヘラナデ、胴部下半以下は縦方向のハケ目調整後ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	P3北西側のほぼ床面上
第22図6 図版9-6	甕	口縁部～胴部下半40％	高 [9.9] 口 (11.8)	小型甕／台付甕か不明／口縁部は外反し、口唇部に刻みがまわる／胴部から口縁部の移行は屈曲しない／胴部の膨らみは弱く、最大径は口縁部にもつ／内外面は黒く煤けており、器面の遺存状態は悪い	内外面：外面：全体に指頭押捺による仕上げ	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・橙色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第22図7 図版9-7	甕	口縁部～胴部下半70％	高 [14.5] 口 (15.0)	台付甕／口縁部は外反する／口唇部に刻みなし／胴部から口縁部の移行は屈曲しない／胴部の膨らみは中位にもち、器形は縦に長い／最大径は口縁部にもつ／外面は黒く煤けている	内面：口縁部から胴部中位はハケ目調整を基本、胴部中位以下はヘラナデ（先端はささくれ状）、口縁部は指頭押捺／外面：ハケ目調整、その後胴部中位以下と口縁部直下は指頭押捺による仕上げ	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・橙色粒子を多く含む	覆土中
第22図8 図版9-8	甕	口縁部～胴部下半80％	高 [21.4] 口 18.6	台付甕／口唇部外面に弱い面取りが施され、口縁部は僅かに内湾するため、受口状になるが、本来の受口状口縁部とは異なる／胴部から口縁部の移行は「く」の字状に屈曲する／最大径は胴部中位にもつ	内面：口縁部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整、胴部中位以下はその後粗いヘラ磨き調整、口縁部～胴部上半はハケ目調整後指頭押捺による仕上げ	黄褐色を基調／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	P3北側のほぼ床面上からまとまって出土
第22図9 図版9-9	甕	胴部中位～底部40％	高 [16.3] 底 5.2	甲type／胴部下半は細身／底部は小さく、輪台状に中央が凹形状に窪んでいる	内面：ハケ目調整後底部付近は粗いヘラ磨き調整、胴部中位はヘラナデ及び粗いヘラ磨き調整／外面：胴部下半～底部及び底面はタタキ成形、その後、胴部中位～下半はハケ目調整後指頭押捺による仕上げ	黄褐色を基調／砂粒をやや多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	住居南コーナー P2すぐ北側のほぼ床面上
第22図10 図版9-10	ミニチュア土器	80％	高 6.4 口 5.8	壺形／「く」の字口縁／口唇部はヘラ削りにより平坦／最大径は胴部中位にもつ／丸底／口縁部内面及び外面に赤彩	内面：口縁部はヘラ磨き調整、胴部上半は指頭による成形痕が残る、胴部下半は指頭によるナデ／外面：ヘラ磨き調整、胴部上半に一部指頭による成形痕が残る	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒を含む	貯蔵穴下層
第23図11 図版9-11	高坏	坏部 破片	厚 0.5	有段口縁高坏か／坏部下半に明瞭な段をもつ／内外面に赤彩	内外面：ヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図12 図版9-12	高坏	脚台部 破片	高 [6.2] 厚 0.5	「ハ」の字状の脚台部で、裾部はゆるやかに外反する／外面に赤彩	内面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整、裾部は横ナデ後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中

第11表　416号住居跡出土土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第23図13 図版9-13	高坏	脚台部 破片	厚 0.4	脚台部は全体に裾部に向かって大きく開く／円形の透かし孔１か所あり／外面に赤彩	内面：ハケ目調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図14 図版9-14	高坏	脚台部 破片	厚 0.5	裾部は大きく開く／円形の透かし孔１か所あり／外面に赤彩	内面：ハケ目調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗赤褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	覆土中
第23図15 図版10-1-15	高坏	脚台部 破片	厚 0.5	「ハ」の字状の脚台部で、裾部は外反する／外面に赤彩	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗赤褐色／茶褐色粒子をやや多く、黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図16 図版10-1-16	壷	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [3.0] 厚 0.5	跡の可能性あり／頸部でややすぼまり、口縁部は外反する／外面黒色	内面：ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第23図17 図版10-1-17	壷	口縁部～ 頸部破片	高 [3.0]	幅広複合口縁／頸部は外反し、口縁部は内湾気味に直立する	内面：ハケ目調整後／外面：複合部ハケ目調整、頸部はハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第23図18 図版10-1-18	壷	口頸部 破片	高 [5.5] 厚 0.7	単純口縁／口唇部は平坦／口縁部はやや内傾気味に開く	内面：ヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、その後全体に粗い目のハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第23図19 図版10-1-19	壷	頸部～胴 部上半 破片	厚 0.5	胴部から頸部は「く」の字状に屈曲する／外面に赤彩	内面：頸部はハケ目調整後ヘラ磨き調整、胴部はハケ目調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図20 図版10-1-20	壷	胴部上半 破片	厚 0.8	胴部は膨らみをもつ	文様は単節斜縄文を上下２段に施文し羽状構成／円形赤彩文（径１cm程）１か所あり／内面：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子を多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図21 図版10-1-21	壷	底部破片	高 [2.1]	平底	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、橙褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図22 図版10-1-22	甕	口頸部 破片	厚 0.6	口縁部は内湾気味に開く／口唇部外面に刻みがまわる／内外面黒色	内面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整	黒褐色／黄褐色粒子・黒色粒子を含む	覆土中
第23図23 図版10-1-23	甕	口頸部 破片	高 [4.0] 厚 0.5	頸部は外反し、口縁部は内湾気味に大きく開く／口唇部外面にハケ状工具による刻みがまわる／内外面は部分的に黒く煤けている	内面：口縁部はハケ目調整、頸部はその後ヘラナデ／外面：ハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図24 図版10-1-24	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	高 [3.5] 厚 0.5	受口状口縁甕／口縁部は外面に面取りが施され、内湾する／口唇部は平坦／胴部から口縁部の移行は「く」の字状に屈曲するいわゆる近江系甕	内面：横ナデ／外面：ハケ目調整後横ナデ	黄褐色を基調／橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図25 図版10-1-25	甕	胴部 破片	厚 0.6	胴部は膨らみをもつ／外面は黒く煤けている	内外面：粗い目のハケ目調整	黒褐色／黄褐色粒子を多く、橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第23図26 図版10-1-26	甕	脚台部 破片	厚 0.6	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面：ハケ目調整	暗黄褐色／砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	覆土中
第23図27 図版10-1-27	甕	脚台部 破片	高 [5.1] 厚 0.6	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面：ヘラナデ	黄褐色を基調／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第23図28 図版10-1-28	甕	脚台部 破片	高 [2.6] 厚 0.5	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面：粗い目のハケ目調整	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒をやや多く、小石を僅かに含む	覆土中

第11表　416号住居跡出土土器一覧（２）

417号住居跡

遺　構（第24図）

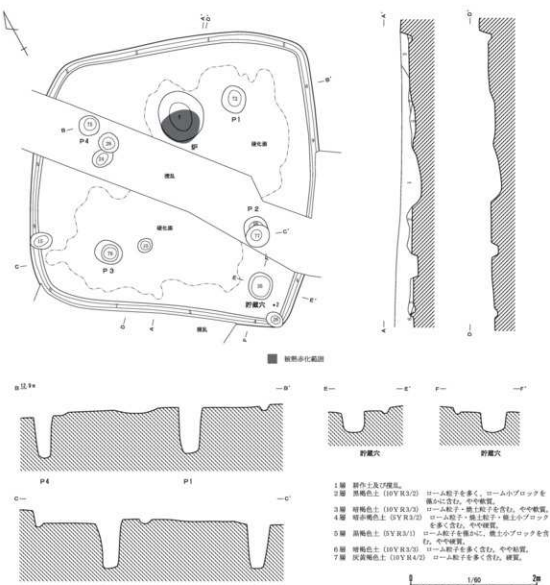
［位　置］調査区北東側。

［検出状況］365Ｙを切る。住居跡中央に幅50～60㎝程の撹乱が横断している。

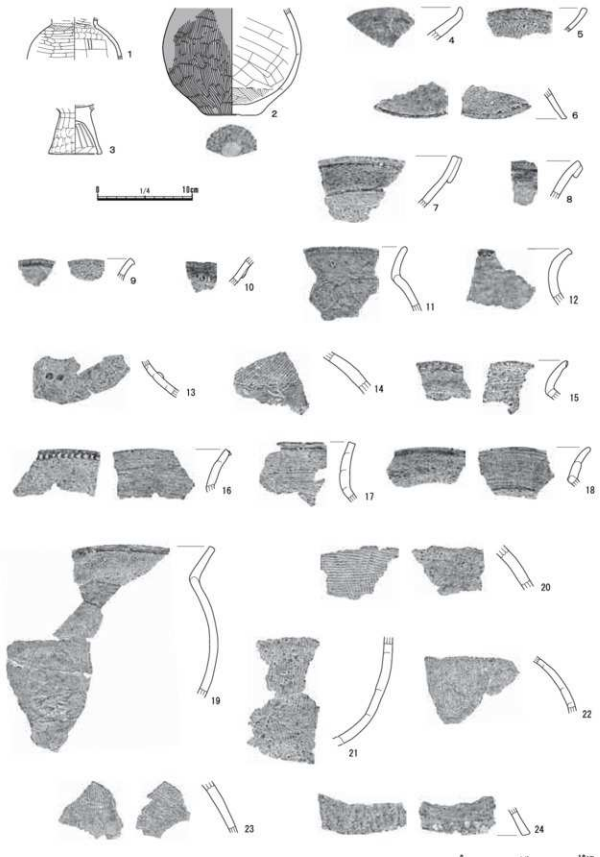
［構　造］**平面形**：不整な隅丸方形。**規模**：長軸4.64m／短軸4.53m／確認面から床面までの深さ10～23㎝。**壁**：75°程度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－28°－Ｅ。**壁溝**：全周する。上幅13～18㎝／下幅4～8㎝／深さ4～9㎝。**床面**：壁際を除いて、硬化面を確認できた。**炉**：住居中央より北東側に位置する。楕円形の地床炉である。長軸79㎝／短軸71㎝／深さ7㎝。炉の南側が被熱により赤化していた。**貯蔵穴**：住居南コーナーで検出された。41×38㎝の隅丸方形で、深さ35㎝。**柱穴**：Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と思われる。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　土］６層（１～７層）に分層される。

［遺　物］器台・高坏・壷・甕形土器が出土した。



第24図　417号住居跡（1／60）



第25図　417号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第25図1 図版10-2-1	壺	頸部～胴部中位 40%	高 [4.5]	小型壺／頸部は直立気味に外反する／胴部中位に最大径をもつ	内面：頸部はヘラ磨き調整、胴部中位はヘラナデ、胴部中位は指頭による成形痕が残る／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図2 図版10-2-2	壺	胴部上半～底部 30%	高 [11.4] 底 5.5	胴部中位に最大径をもつ／底部は輪台状に中央が径1.8cmの円形状に僅かに窪んでいる／外面に赤彩	内面：胴部上半から下半はヘラナデ（先端はささくれ状）、底部近くは粗いⅡ目のハケ目調整／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／砂粒を僅かに含む	住居南コーナーのほぼ床面及び貯蔵穴内
第25図3 図版10-2-3	鉢	脚台部 40%	高 [5.2] 底 (5.6)	小型台付鉢／ミニチュア土器ではあろうか／脚台部は「ハ」の字状	内面：坏部はヘラ磨き調整、脚台部はヘラナデ、裾部は指頭によるナデ／外面：脚台部中位以上は粗いヘラ磨き調整ナデ、以下は指頭による成形痕が残る	暗黄褐色／砂粒を僅かに含む	貯蔵穴内
第25図4 図版10-2-4	器台	受部 小破片	厚 0.7	受部は浅身／口縁部は短く内湾気味に立ち上がる／内外面に赤彩	内面：横ナデ後ヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ後ヘラ磨き調整、以下はヘラ磨き調整	暗黄褐色／石英・砂粒を含む	覆土中
第25図5 図版10-2-5	器台	脚台部 小破片	高 [2.2] 厚 0.3	器台の口縁部か／口縁部は内湾気味に開く／内外面は黒く煤けている	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、裾部は横ナデ	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図6 図版10-2-6	高坏	脚台部 小破片	厚 0.4	器台か／脚台部は「ハ」の字状／底部は平坦／外面に赤彩か／外面黒色	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黒褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図7 図版10-2-7	壺	口頸部 破片	高 [4.6]	幅広複合口縁／口縁部は内湾気味に開く／口頸部は中央が窪んでいる／内外面に赤彩か	内面：ヘラ磨き調整／外面：複合部はヘラ磨き調整、頸部はハケ目調整後ヘラ磨き調整	黒褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第25図8 図版10-2-8	壺	口頸部 小破片	高 [3.1]	幅狭複合口縁／口頸部は平坦／口縁部は外反する／内外面に赤彩	文様は口頸部にＬＲ単節斜縄文を施文／内面及び外面頸部：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図9 図版10-2-9	壺	口頸部 小破片	厚 0.4	小型壺／口縁部は外反する／口頸部は面取りにより複合口縁気味／内外面に赤彩か／外面は部分的に黒色	文様は内面口縁部に櫛描波状文と鋸歯文を施文／櫛描波状文の櫛歯は6本一単位／外面：頸部はハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／砂粒・小石を含む	覆土中
第25図10 図版10-2-10	壺	口頸部 小破片	厚 0.5	小型壺か／幅広複合口縁／複合部下端に刻みがまわる／内面及び外面複合部に赤彩	外面複合部直下にＲＬ単節斜縄文を施文／内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：複合部に横ナデ	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図11 図版10-2-11	壺	口縁部～胴部上半 破片	高 [5.5] 厚 0.5	「く」の字口縁／口唇部は丸い／口縁部内面及び外面に赤彩	内外面：ヘラ磨き調整	明赤褐色／黄褐色粒子をやや多く、茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図12 図版10-2-12	壺	口頸部 破片	厚 0.7	単純口縁／口縁部は外反する／口唇部は平坦／内面は黒色	内外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図13 図版10-2-13	壺	頸部～胴部上半 破片	高 [3.2] 厚 0.5	胴部から頸部にかけて緩やかにすぼまる	文様は径8mm程の円形赤彩文を横位に3段を全周させるように施文し、2段目の位置に径5mm程の円形貼付文2個を付す／内面：ヘラナデか／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図14 図版10-2-14	壺	胴部上半 破片	厚 0.8	胴部は膨らみをもつ／外面は黒色	文様は端末結節文を伴うＬＲ単節斜縄文1段が見られる／内面：ヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図15 図版10-2-15	鉢	口縁部～胴部上半 小破片	厚 0.5	壺か／「く」の字口縁／口縁部は外反する／口唇部外面にハケ状工具による連続した刻みがまわる（押引き的）／口縁部内外面に赤彩か	内外面：口縁部は粗い目のハケ目調整後ヘラ磨き調整、胴部は粗い目のハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子を多く、橙色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中

第12表　417号住居跡出土土器一覧（1）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第25図16 図版10-2-16	甕	口頸部 破片	厚 0.7	口頸部は外反する／口唇部外面に刻みがまわる／外面は黒く煤けている	内面：ハケ目調整／外面：横ナデ、指頭による成形痕が残る	淡茶褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図17 図版10-2-17	甕	口頸部 破片	厚 0.7	口頸部は外反する／口唇部は平坦で刻みなし	内面：口縁部は粗い目のハケ目調整、以下はヘラナデ／外面：粗い目のハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図18 図版10-2-18	甕	口縁部～ 胴部上半 破片	厚 0.6	「く」の字口縁と思われる／口縁部は外反する／口唇部は丸い	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、胴部は粗い目のハケ目調整	淡茶褐色／砂粒を含み、角閃石・金雲母を僅かに含む	覆土中
第25図19 図版10-2-19	甕	口縁部～ 胴部下半 破片	高 [15.8] 厚 0.5	「く」の字口縁／口縁部は内湾気味に開く／口唇部は平坦気味／胴部は球状で、最大径は胴部上半にもつ／外面は黒く煤けている	内面：口縁部はハケ目調整、胴部はヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後口縁部は横ナデ、胴部下半は粗いヘラ磨き調整	暗赤褐色を基調／茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図20 図版10-2-20	甕	胴部上半 破片	厚 0.7	胴部は膨らみをもつ／外面は上半が一部黒く煤けている	内面：ヘラナデ／外面：粗い目のハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第25図21 図版10-2-21	甕	胴部上半 ～下半 破片	厚 0.6	胴部は膨らみをもつ／最大径は胴部中位にもつと思われる／内外面黒色	内面：粗い目のハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：粗い目のハケ目調整	黒褐色／黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	覆土中
第25図22 図版10-2-22	甕	胴部上半 破片	厚 0.5	胴部は膨らみをもつ／外面は頸部直下が一部黒く煤けている	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	暗黄褐色／角閃石・黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第25図23 図版10-2-23	甕	脚台部 破片	厚 0.6	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内外面：ハケ目調整	黄褐色／黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第25図24 図版10-2-24	甕	脚台部 破片	高 [2.7] 厚 0.5	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面：ハケナデ／外面：ハケ目調整	暗赤褐色を基調／角閃石・茶褐色粒子・白色砂粒を含む	覆土中

第12表　417号住居跡出土土器一覧（２）

［時　　期］古墳時代前期初頭。

遺　　物（第25図、図版10－２、第12表）

４・５は器台形土器、６は高坏形土器、１・２・７～14は壺形土器、３・15～24は甕形土器である。

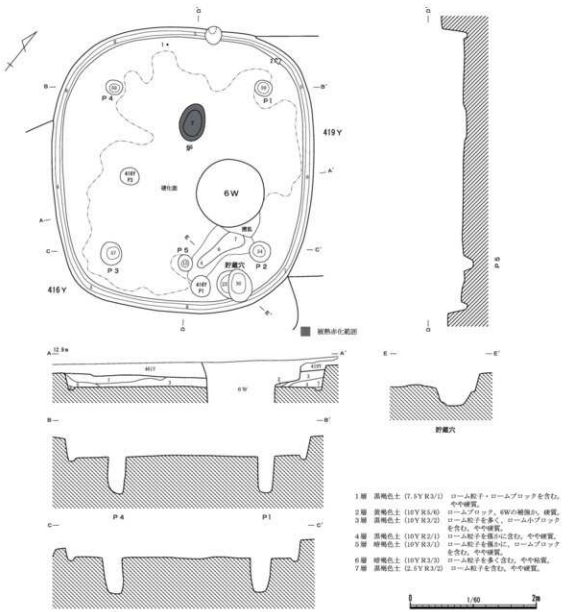
418号住居跡

遺　　構（第26図）

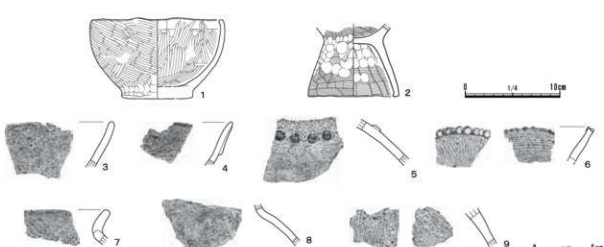
［位　　置］調査区ほぼ中央。

［検出状況］416・419Ｙ・６Ｗに切られる。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸4.52m／短軸4.12m／確認面から床面までの深さ29～35㎝。**壁**：80°程度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－40°－Ｗ。**壁溝**：全周する。上幅15～18㎝／下幅４～８㎝／深さ４～８㎝。**床面**：壁際を除いて、硬化面を確認できた。**炉**：住居中央より北西側に位置する。楕円形の地床炉である。長軸60㎝／短軸41㎝／深さ７㎝。被熱により赤化していた。**貯蔵穴**：住居東コーナー近くで検出された。重複形の楕円形で、60×50㎝、深さ23・30㎝。西側に４～７㎝の凸



第26図　418号住居跡（1／60）



第27図　418号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第27図1 図版11-1-1	鉢	70%	高 8.5 口 (14.0) 底 7.6	底部から立ち上がり全体に内湾する／平底	内面：ヘラナデ（先端部はさざくれ状）後ヘラ磨き調整／外面：ヘラ磨き調整、底部付近に指頭による成形痕が残る／	黄褐色／茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む	北西壁近くのほぼ床面上
第27図2 図版11-1-2	甕	胴底下半～脚台部90%	高 [7.7] 底 9.6	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／胴底部内面は黒く煤けている	内面：胴底部はハケ目調整、脚台部は上半部がヘラナデ、中位以下がハケ目調整（工具先端がさざくれ状）、その後全体に指頭押捺／外面：ハケ目調整後全体に指頭押捺	暗黄褐色／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	住居北コーナーの床面上
第27図3 図版11-1-3	壺	口縁部破片	厚 0.5	口縁部は内湾気味に開く／胴部から口縁部の境は「く」の字状に屈曲する／内外面に赤彩	内外面：外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	暗黄褐色／白色砂粒をやや多く、角閃石・黄褐色粒子を僅かに含む	覆土中
第27図4 図版11-1-4	壺	口縁部小破片	厚 0.5	幅広複合口縁／口縁部は僅かに外反する／内外面に赤彩	内面：ヘラ磨き調整／外面：複合部はヘラ磨き調整、複合部以下はハケ目調整	淡茶褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第27図5 図版11-1-5	壺	胴部上半破片	厚 0.6	胴部は膨らみをもつ／外面無文部に赤彩	胴部文様帯にはＲＬ単節斜縄文の下端に2段の自縄結節文を施文、さらにその下端に円形貼付文（径7mm前後）４個が付される／内面：ハケ目調整／外面：無文部はハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第27図6 図版11-1-6	壺	口縁部小破片	厚 0.5	口縁部は内湾気味に開く／内外面僅かに煤けている	口唇部にハケ状工具による刻みが巡わる／内外面：ハケ目調整	淡茶褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む	覆土中
第27図7 図版11-1-7	壺	口縁部～胴部上半小破片	厚 0.6	「く」の字口縁／内外面黒色	内面：粗い目のハケ目調整後横ナデ／外面：粗い目のハケ目調整後横ナデ、その後ヘラ磨き調整	黒色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中
第27図8 図版11-1-8	壺	頸部～胴部上半破片	厚 0.5	胴部から頸部にかけて僅かにくびれている／外面は黒く煤けている	内面：ハケナデ後粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整	淡茶褐色を基調／黄褐色粒子を多く、砂粒を僅かに含む	覆土中
第27図9 図版11-1-9	壺	胴部下半小破片	厚 0.8	台付甕／脚台部に近い部分は内湾し器厚が厚くなっている	内外面：ハケ目調整	暗黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中

第13表　418号住居跡出土土器一覧

堤が確認できた。**柱穴**：Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と思われる。深さ54～59㎝。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：Ｐ５が入口ピットと思われる。深さ15㎝。

［覆　　土］７層に分層される。

［遺　　物］鉢・壺・甕形土器が出土した。

［時　　期］弥生時代後期末葉。

遺　　物（第27図、図版11－１、第13表）

１は鉢形土器、３～５は壺形土器、２・６～９は甕形土器である。

419号住居跡

遺　　構（第28図）

［位　　置］調査区ほぼ中央。

［検出状況］６Ｗに切られ、416・418Ｙを切る。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形か。**規模**：長軸不明／短軸3.84m／確認面から床面までの深さ9～14㎝。

壁：75°程度で立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－45°－Ｗ。**壁溝**：北西壁で途切れている。上幅14～18㎝／下幅５～７㎝／深さ２～８㎝。**床面**：一部硬化面を確認できた。**炉**：住居中央よりやや北側に位置する。楕円形の地床炉である。長軸47㎝／短軸35㎝／深さ６㎝。**貯蔵穴**：住居東コーナーで検出された。27×30㎝の隅丸方形で、深さ30㎝。西側に３～６㎝の凸堤が確認できた。**柱穴**：検出されたものが伴うのか不明。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：確認できなかった。

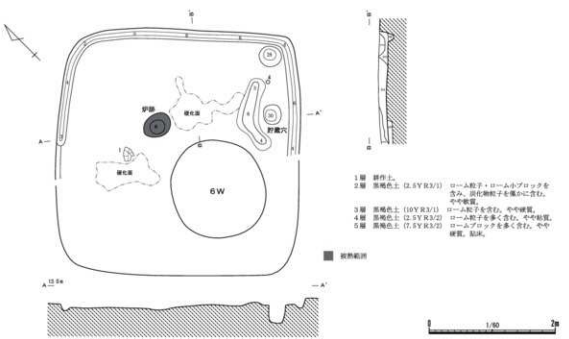
［**覆　　土**］４層（２～５層）に分層される。

［**遺　　物**］高坏・鉢・壷・甕形土器、ミニチュア土器が出土した。

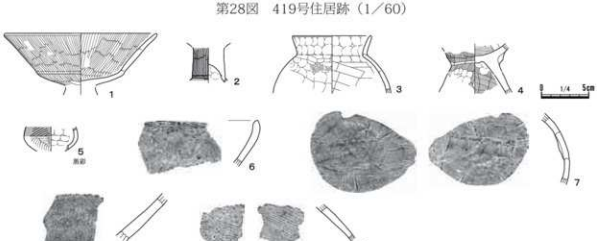
［**時　　期**］古墳時代前期後葉。

遺　物（第29図、図版11－２、第14表）

１・２は高坏形土器、６は鉢形土器、３・７は壷形土器、４・８・９は甕形土器、５はミニチュア土器である。



第28図　419号住居跡（1／60）



第29図　419号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第29図1 図版11-2-1	高坏	坏部60%	高 [5.5] 口 16.3	脚台部を欠損するが、いわゆる屈折脚有段高坏か／脚台部を欠損する／口縁部はゆるやかに大きく外反する／坏部下端に段をもつ	内外面：丁寧なヘラ磨き調整	黄褐色／茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	P1の西側のほぼ床面上
第29図2 図版11-2-2	高坏	脚台部 破片	高 [3.7]	柱状脚高坏／上下部分とも欠損する／脚柱部と裾部の境に輪積み痕が残る／外面に赤彩／器台の可能性あり	内面：指頭による成形痕が残る／外面：ヘラ磨き調整	暗黄褐色／砂粒を含む	覆土中
第29図3 図版11-2-3	壺	口縁部～ 胴部中位 40%	高 [6.1] 口 8.4	小型壺／「く」の字口縁／胴部は球状	内面：口縁部から胴部上半は指頭押捺、その後ヘラナデ／外面：全体に指頭による押捺あるいはナデ、胴部にはハケ目痕が僅かに残る	明橙色を貴重／黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	覆土中
第29図4 図版11-2-4	甕	胴部下半 ～脚台部 中位70%	高 [5.3]	台付甕／脚台部は「ハ」の字状／胴部と脚台部の境に断面三角形の凸帯がまわる	内面：胴底部はヘラナデ後ヘラ磨き調整、脚台部はハケ目調整、上端部は指頭押捺／外面：ハケ目調整後脚台部は分割に指頭押捺	暗黄褐色／黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	住居東コーナーの貯蔵穴凸壁先端近くのほぼ床面上
第29図5 図版11-2-5	ミニチュア 土器	体部小 破片	高 [2.6]	坩形か／体部下半に膨らみをもつ／外面体部上半は黒色処理（光沢をもつ）	内面：指ナデ／外面：ヘラ磨き調整	明黄褐色／茶褐色粒子を僅かに含む	覆土中
第29図6 図版11-2-6	鉢	口縁部～ 胴部上半 破片	厚 0.5	胴部から口縁部にかけて内湾する	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、口縁部付近には僅かに指頭押捺痕が残り指紋も観察できる	黄褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第29図7 図版11-2-7	壺	胴部上半 ～下半 破片	厚 0.5	胴部は球状／内面胴部上半に輪積み痕を顕著に残す	内面：胴部上半はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整、以下はヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	覆土中
第29図8 図版11-2-8	甕	胴部下半 破片	厚 0.8	台付甕か／胴部下半は器厚が厚く、くびれているため脚台部が付くと思われる	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	淡茶褐色／黄褐色粒子をやや多く、角閃石・橙色粒子・砂粒を含む	覆土中
第29図9 図版11-2-9	甕	胴部上半 破片	厚 0.3	胴部は膨らみをもつ／外面は黒く煤けている	内外面：粗い目のハケ目調整	淡茶褐色／黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	覆土中

第14表　419号住居跡出土土器一覧

420号住居跡

遺　構（第3図）

［位　置］調査区中央やや東側。

［検出状況］東側部分は調査区外であり、北東部分は撹乱により破壊されているため、詳細不明である。

［遺　物］壷・甕形土器の破片が僅かに出土した。

［時　期］古墳時代前期初頭。

遺　物（第30図、図版11－3、第15表）

2は壷形土器、1・3は甕形土器である。

第30図　420号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	部　位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態等	文様・調整等	胎土	出土位置
第30図1 図版11-3-1	甕	胴部下半 ～脚台部 60%	高 [2.3]	脚台部から胴部は外反し開く	内面：粗い目のハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：粗い目のハケ目調整／脚台部には接合面が観察できる	暗茶褐色を基調／黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	覆土中
第30図2 図版11-3-2	壺	口縁部 破片	厚 0.6	口縁部は全体に外反する／口唇部は僅かに面取りされる	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	黒茶褐色を基調／砂粒を含む	覆土中
第30図3 図版11-3-3	甕	胴部中位 ～下半 破片	厚 0.6	胴部下半は屈曲する	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	覆土中

第15表　420号住居跡出土土器一覧

第２節　中世以降の遺構

（1）概　要

中世以降の遺構については、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡である416・418・419号住居跡の精査の際に中世以降の井戸跡１基（６W）が検出された。時期については、出土遺物がなかったため、詳細は不明であり、さらに図面等の記録がなかったため、挿図版についても掲載できなかった。遺物はなく、覆土の観察も不明であるが、ここでは中世以降とした。

（2）井戸跡

６号井戸跡

遺　構（第３図）

[位　置] 調査区中央ほぼ中央。

[検出状況] 416・418・419Yを切る。

[構　造] **平面形**：全体に楕円形を呈するが、開口部はおおよそ円形と思われる。**規模**：開口部は直径1.10m。深さ1.0m程度では、やや東側に広がっており、長軸1.65m、短軸1.30mである。危険を伴うということで、深さ１m程の位置で精査を断念している。**壁**：ほぼ垂直で、足掛穴は確認できなかった。**長軸方位**：N－45°－E。

[遺　物] 出土しなかった。

[時　期] 中世以降と思われる。

第３節　遺構外出土遺物

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の遺物、弥生時代後期～古墳時代後期の土器、中世以降の遺物に分類する。

（１）縄文時代の遺物（第31・32図、図版12、図版13－53～63、第16～18表）

[石　　器]（第31図１～３、図版12－１～３、第16表）

１・２は打製石斧、３は二次加工のある剥片である。

[土　　器]（第31図４～29、第32図30～56、図版12－４～52、図版13－53～56、第17表）

４・５は前期中葉の黒浜式土器である。

６～12は前期後葉の土器で、６～11は諸磯式土器で、６～９は諸磯ｂ式、10・11は諸磯ｃ式である。12は貝殻波状文が施文される土器で、浮島・興津式土器と思われる。

13～20は中期前葉の五領ヶ台式土器である。

21～34は中期中葉の土器で、21～26は阿玉台式土器、27～34は勝坂式土器である。

35～56は中期後葉の加曽利Ｅ式土器で、35～53は加曽利Ｅ１式、54～56は加曽利Ｅ３式である。

[土 製 品]（第32図57～63、図版13－57～63、第18表）

57～62は土器片錘、63は土製円盤である。

（２）弥生時代後期～古墳時代後期の土器（第33図64～80、図版13－64～80、第19表）

64～77は弥生時代後期～古墳時代前期の土器である。64は高坏形土器、65・66・69～73は壷形土器、67・68・74～77は甕形土器である。

78～80は古墳時代後期の土器である。78・79は土師器高坏形土器、80は土師器壷形土器である。いずれも６世紀前葉のものと思われる。

（３）中世以降の遺物

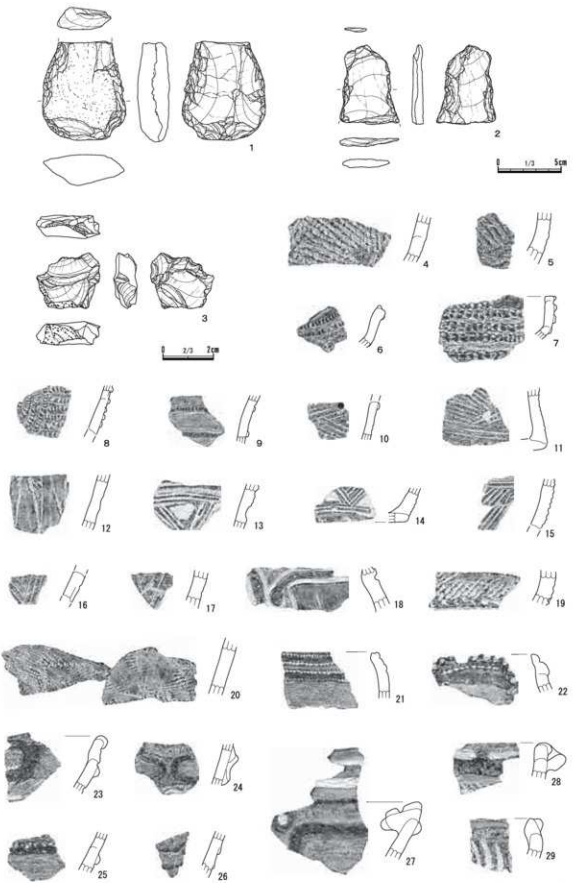
（第33図81～84・91～93・112・117～119、図版13－81～90、図版14、第20・21表）

[陶磁器・土器]（第33図81～84・91～93・112・117、図版13－81～90、図版14－91～116、第20表）

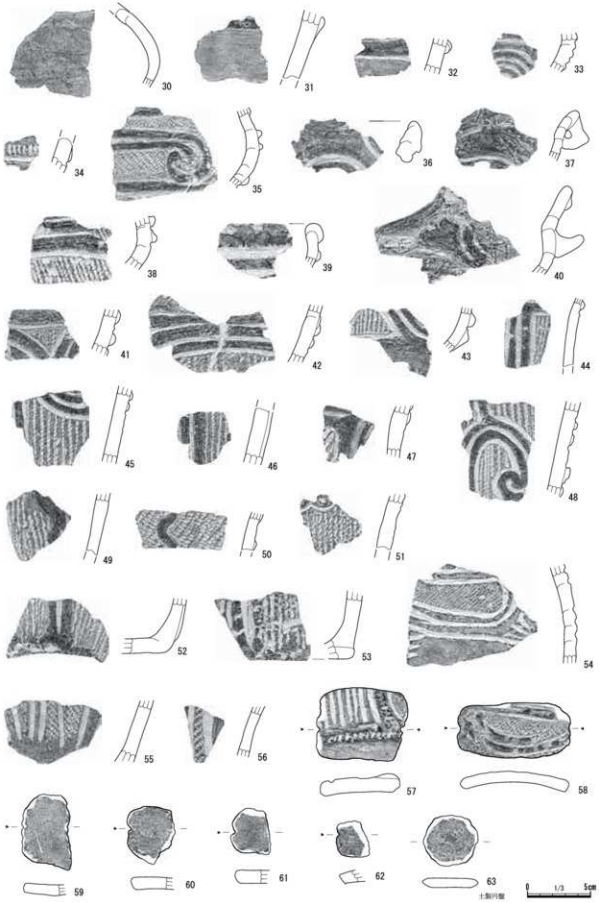
81～90は磁器、91～111は陶器、112～117は土器である。

[金属製品]（第33図118・119、図版14－118・119、第21表）

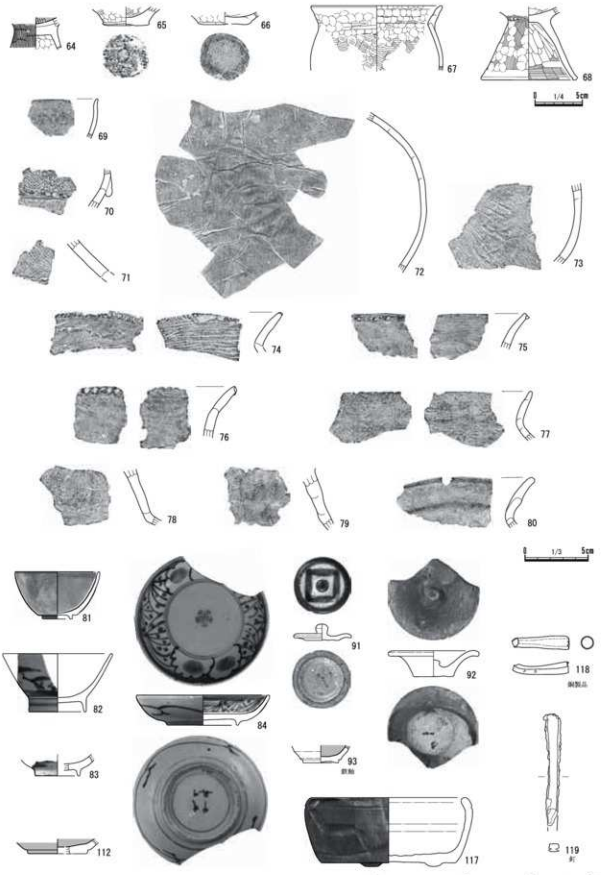
118は銅製品で、煙管の雁首である。119は鉄製品で、釘である。



第31図　遺構外出土遺物１（1／3・2／3）



第32図　遺構外出土遺物２（1／3）



第33図　遺構外出土遺物3（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特　徴	出土位置
第31図1 図版12-1	打製石斧	砂　岩	77.8	65.6	25.0	175.0	撥形か／上半部を欠損／正面に原礫面あり／刃部は弧状／両側縁に敲打剥離が認められ、側縁の稜上がやや潰れている	409Y
第31図2 図版12-2	打製石斧	頁　岩	62.5	46.3	9.2	175.0	撥形か／下半部を欠損／両側縁の稜上の一部が僅かに潰れており、敲打剥離と考えられる	416Y
第31図3 図版12-3	二次加工のある剥片	黒曜石	21.9	25.1	9.4	4.5	完形／正面側に一部ズリ面あり／主要剥離面側の周縁に二次的な剥離／主要剥離面にバルブが一部残存	遺構外

（単位：mm．g）

第16表　遺構外出土石器一覧

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時　期 型　式	出土遺構 出土位置
第31図4 図版12-4	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	僅かにカーブする	１段でＲ・Ｌの無節斜縄文を羽状構成	暗黄褐色／繊維・石英・雲母を含む	前期前葉 （黒浜式）	407 Y
第31図5 図版12-5	深鉢	胴部 小破片	厚 1.0	僅かにカーブする	１段でＲ・Ｌの無節斜縄文を羽状構成	暗茶褐色／砂粒を含む	前期前葉 （黒浜式）	409 Y
第31図6 図版12-6	深鉢	口縁部把手 小破片	厚 0.7	中空構造	浮線文系／半截竹管による連続爪形文を付す浮線により直線文・曲線文を施文	黄褐色／石英・角閃石・白色砂粒を含む	前期後葉 （諸磯ｂ式）	408 Y
第31図7 図版12-7	深鉢	口縁部 破片	厚 0.8	口縁部は屈曲する／高さ6mmの平坦な把手が一部残る	浮線文系／半截竹管による連続爪形文を付す４本の浮線文	暗茶褐色／白色砂粒・小石を含む	前期後葉 （諸磯ｂ式）	409 Y
第31図8 図版12-8	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	僅かにカーブする	浮線文系／半截竹管による連続爪形文を付す浮線により重弧文・直線文を施文	暗茶褐色／石英・雲母・白色砂粒を含む	前期後葉 （諸磯ｂ式）	409 Y
第31図9 図版12-9	深鉢	胴部 破片	厚 0.7	僅かに外傾する	浮線文系／半截竹管による連続爪形文を付す２本の横位浮線文を少し間隔を開け平行に施文	暗茶褐色／雲母・白色砂粒を含む	前期後葉 （諸磯ｂ式）	417 Y
第31図10 図版12-10	深鉢	胴部 小破片	厚 0.5	僅かに外傾する／上端は輪積み痕	半截竹管による平行沈線により格子目状に施文／直径5mmの円形貼付文が１つあり	暗茶褐色／角閃石・金雲母・白色砂粒をやや多く含む	前期後葉 （諸磯ｃ式）	418 Y
第31図11 図版12-11	深鉢	胴部下半 破片	高 [4.5]	底部は欠損するが、立ち上がりは一度内傾する	半截竹管による平行沈線により底部最下に横位直線文	暗茶褐色／石英・角閃石・金雲母・白色砂粒をやや多く含む	前期後葉 （諸磯ｃ式）	417 Y
第31図12 図版12-12	深鉢	胴部下半 破片	厚 0.8	僅かに外傾する	貝殻波状文	暗黄褐色／白色砂粒を含む	前期後葉 （浮島・興津式）	418 Y
第31図13 図版12-13	深鉢	胴部上半 破片	厚 0.8	僅かに外傾する	半截竹管による平行沈線により上方に横位直線文、直下には鋸歯状を施文し、鋸歯状内に三角印刻文	暗茶褐色／角閃石・砂粒を含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	417 Y
第31図14 図版12-14	深鉢	底部 破片	高 [2.9]	立ち上がりは外傾する	半截竹管による平行沈線により底部最下に横位直線文、直上には鋸歯状を施文し、鋸歯状内に三角印刻文	暗茶褐色／石英・金雲母・白色砂粒をやや多く含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	405 Y
第31図15 図版12-15	深鉢	胴部上半 破片	厚 0.7	僅かに外傾する	半截竹管による平行沈線により方位・斜位直線文	明茶褐色／石英・白色砂粒を含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	420 Y
第31図16 図版12-16	深鉢	胴部上半 小破片	厚 1.0	僅かに外傾する	半截竹管による平行沈線により斜位直線文	暗茶褐色／角閃石・白色砂粒を僅かに含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	415 Y
第31図17 図版12-17	深鉢	胴部 小破片	厚 1.0	僅かにカーブする	半截竹管による平行沈線により集合沈線文を施文	暗茶褐色／白色砂粒を多く含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	406 Y
第31図18 図版12-18	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	僅かに内傾する	沈線による曲線文／文様部分と下端は基本的に貼付けにより一段高くなっている	暗黄褐色／金雲母・白色砂粒をやや多く含む	中期前葉 （五領ヶ台式）	407 Y

第17表　遺構外出土縄文土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時　期 型　式	出土遺構 出土位置
第31図19 図版12-19	深鉢	胴部 破片	厚 1.2	僅かにカーブする	ＬＲ単節斜縄文の下方に竹管による横位の円形刺突列文	黄褐色／白色砂粒を多く含む	中期前葉 (五領ヶ台式)	409 Y
第31図20 図版12-20	深鉢	胴部 破片	厚 1.1	僅かにカーブする	上下異種の縄文による結束（単節斜縄文）	淡黄褐色／白色砂粒を含む	中期前葉 (五領ヶ台式)	404 Y 407 Y
第31図21 図版12-21	深鉢	口縁部 破片	高 [4.1]	僅かに内湾する	口縁部に２本の横位隆帯をめぐらせ、その上下の隆帯脇に竹管状工具による刺突列文を施文	暗茶褐色／金雲母を多く、白色砂粒・小石を含む	中期中葉 (阿玉台式)	遺構外
第31図22 図版12-22	深鉢	口縁部把手 破片	厚 0.7	鶏頭状把手	口唇上端部に刻み／内面に竹管状工具による刺突列文	暗茶褐色／金雲母を多く、白色砂粒・小石を含む	中期中葉 (阿玉台式)	418 Y
第31図23 図版12-23	深鉢	口縁部 破片	厚 0.7	小突起状口縁	小突起頂部から隆帯を懸垂させ楕円区画文を形成し、内部隆帯脇に竹管状工具による刺突列文	暗茶褐色／金雲母・白色砂粒を多く含む	中期中葉 (阿玉台式)	遺構外
第31図24 図版12-24	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	僅かに外傾する	口縁部直下に断面三角形の隆帯２本をめぐらせ、隆帯間に又状の隙間を開けるように断面逆状の粘土を貼付けている	暗茶褐色／石英・雲母を多く、白色砂粒を含む	中期中葉 (阿玉台式)	遺構外
第31図25 図版12-25	深鉢	胴部 小破片	厚 0.8	僅かに外傾する	１本の横位隆帯の下端の隆帯脇に竹管状工具による押引文を施文	暗茶褐色／石英・雲母を多く、白色砂粒を含む	中期中葉 (阿玉台式)	遺構外
第31図26 図版12-26	深鉢	胴部 小破片	厚 0.8	僅かに外傾する	胴部に横位のヒダ状押捺／指頭による押捺と思われ指紋が観察される	暗茶褐色／白色砂粒を含む	中期中葉 (阿玉台式)	418 Y
第31図27 図版12-27	深鉢	口縁部 破片	高 [4.2]	踏状口縁	口縁部上面に太沈線を２本めぐらし、外面口縁部直下には隆帯による環状貼付文とクランク状の文様／口縁部上面から内面に赤彩	茶褐色／白色砂粒をやや多く含む	中期中葉 (勝坂式)	409 Y
第31図28 図版12-28	深鉢	口縁部 破片	高 [3.2]	僅かに外傾する	外面口縁部直下に１本隆帯をめぐらし、１か所に小突起が見られ、上端には太沈線を施文／隆帯直下にＲＬ単節斜縄文	茶褐色／石英・角閃石・白色砂粒を含む	中期中葉 (勝坂式)	406 Y
第31図29 図版12-29	深鉢	口縁部 小破片	厚 1.1	口縁部は僅かに内湾する	外面口縁部直下に隆帯をめぐらし、直下には縦位沈線文が見られる	淡茶褐色／砂粒・小石を含む	中期中葉 (勝坂式)	419 Y
第32図30 図版12-30	深鉢	口縁部 破片	厚 0.9	口縁部は内湾する	口縁部は無文	暗黄褐色／角閃石・雲母・砂粒を含む	中期中葉 (勝坂式)	409 Y
第32図31 図版12-31	深鉢	頸部 破片	厚 1.3	頸部は外反する	口縁部直下に隆帯がまわる／頸部は無文	茶褐色／角閃石・白色砂粒を含む	中期中葉 (勝坂式)	417 Y
第32図32 図版12-32	深鉢	頸部 破片	厚 0.9	頸部は外反する	口縁部直下に隆帯がまわる／頸部は無文	茶褐色／角閃石・白色砂粒を含む	中期中葉 (勝坂式)	405 Y
第32図33 図版12-33	深鉢	胴部 小破片	厚 1.2	僅かに内湾する	沈線による重弧文	淡茶褐色／白色砂粒を僅かに含む	中期中葉 (勝坂式)	419 Y
第32図34 図版12-34	深鉢	胴部 小破片	厚 1.2	僅かに外傾する	連続爪形文を付す隆帯の下方に沈線文	暗黄褐色／金雲母・砂粒を含む	中期中葉 (勝坂式)	406 Y
第32図35 図版12-35	深鉢	胴部 破片	高 [6.2]	内湾する	口縁部に２本単位の隆帯による渦巻文／地文は縦位のＬＲ単節斜縄文	茶褐色／白色砂粒を多く含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図36 図版12-36	深鉢	口縁部 破片	厚 1.1	突起	円形の透かし窓状の突起	暗茶褐色／茶褐色粒子・黒褐色粒子・砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図37 図版12-37	深鉢	口縁部 破片	高 [3.5]	波状口縁／口縁部は外反する	口縁部直下に曲線的に隆帯を貼付け、波頂部から隆帯に短い隆帯を連結させ橋状にしている	暗茶褐色／角閃石・砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	406 Y

第17表　遺構外出土縄文土器一覧（２）

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時　期 型　式	出土遺構 出土位置
第32図38 図版12-38	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	内湾する	口縁部直下に１本の隆帯をめぐらし、口縁部文様帯は１本の隆帯により楕円区画文を形成／区画内はＲの撚糸文	茶褐色／石英・角閃石・白色砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	418Y
第32図39 図版12-39	深鉢	口縁部 破片	高 [3.6]	僅かに内湾する	外面口縁部直下に２本の隆帯をめぐらせ、下方は楕円区画になるものか	淡茶褐色／金雲母・白色砂粒を僅かに含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	遺構外
第32図40 図版12-40	深鉢	口縁部 破片	高 [7.5]	横状突起	波状口縁の頂部に横状突起が付される／隆帯脇には沈線がめぐる	暗黄褐色／砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	419 Y
第32図41 図版12-41	深鉢	口縁部 破片	厚 1.0	僅かに内湾する	口縁部と胴部との境に１本の隆帯をめぐらせる／口縁部文様帯は２本単位の隆帯を連弧状に施文／地文はＬの撚糸文	茶褐色／砂粒をやや多く、角閃石・茶褐色粒子を僅かに含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	遺構外
第32図42 図版12-42	深鉢	口縁部～ 胴部破片	厚 1.0	僅かに外傾する	３本の横位隆帯をめぐらし、地文にＬの撚糸文を施文	暗黄褐色／石英・白色砂粒をを含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	遺構外・ 420 Y
第32図43 図版12-43	深鉢	口縁部～ 胴部破片	高 [4.8]	口縁部から胴部は僅かに屈曲する	２本単位の隆帯により区画文を形成し、内部にＲの撚糸文を縦位に施文／口縁部直下は無文帯を形成	暗黄褐色／砂粒・小石を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	406 Y
第32図44 図版12-44	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	僅かに外傾する	口縁部と胴部との境に１本の隆帯をめぐらせる／胴部文様帯は２本単位の隆帯による懸垂文／地文は縦位のＲの撚糸文	淡茶褐色／砂粒・小石を僅かに含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図45 図版12-45	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	僅かに外傾する	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に隆帯による懸垂文と調巻文	暗黄褐色／砂粒・小石をやや多く含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	405 Y
第32図46 図版12-46	深鉢	胴部 小破片	厚 1.1	僅かに外傾する	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に２本単位の隆帯による懸垂文／内面は黒く煤けている	暗黄褐色／白色砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	404 Y
第32図47 図版12-47	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	僅かに外傾する	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に隆帯による懸垂文	暗黄褐色／白色砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図48 図版12-48	深鉢	胴部 破片	厚 0.9	僅かに外傾する	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に２本単位の隆帯による調巻文	暗黄褐色／砂粒をやや多く、石英・角閃石を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図49 図版12-49	深鉢	胴部 破片	厚 0.8	僅かに外傾する	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に隆帯による蛇行懸垂文	暗茶褐色／角閃石・白色砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図50 図版12-50	深鉢	胴部下半 破片	厚 0.7	僅かに外傾する	胴部文様帯はＲＬ単節斜縄文を地文に沈線による蛇行懸垂文	暗茶褐色／砂粒をやや多く含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図51 図版12-51	深鉢	胴部 破片	厚 1.0	僅かに外傾する	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に２本単位の沈線による小波状文	暗黄褐色／白色砂粒を多く含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	406 Y
第32図52 図版12-52	深鉢	胴部下半～ 底部破片	高 [4.5]	平底／底部から内湾気味に立ち上がる	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に２本単位の懸垂文	淡茶褐色／砂粒・を多く、角閃石を僅かに含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	409 Y
第32図53 図版13-53	深鉢	胴部下半～ 底部破片	高 [5.5]	平底／底部からの立ち上がりは外傾する	胴部文様帯はＬの撚糸文を地文に２本単位の懸垂文	淡茶褐色／砂粒・を多く、角閃石を僅かに含む	中期後葉 (加曽利ＥⅠ式)	405 Y
第32図54 図版13-54	深鉢	胴部上半 破片	厚 0.9	僅かに内湾する	太沈線文による横位文様を構成／楕円区画文内はＬＲ単節斜縄文	黄褐色／繊維・砂粒・小石をやや多く、角閃石を僅かに含む	中期後葉 (加曽利ＥⅢ式)	405 Y
第32図55 図版13-55	深鉢	胴部下半 破片	厚 1.2	底部近くは肥厚／外傾する	胴部文様帯はＬＲ単節斜縄文を地文に沈線による間隔が狭い懸垂文／磨消懸垂文を伴う	暗橙色／白色砂粒を含む	中期後葉 (加曽利ＥⅢ式)	406 Y
第32図56 図版13-56	深鉢	胴部 小破片	厚 0.7	僅かに外反する	胴部文様帯はＲＬ単節斜縄文を地文に太沈線による磨消懸垂文	暗黄褐色／砂粒を僅かに含む	中期後葉 (加曽利ＥⅢ式)	419 Y

第17表　遺構外出土縄文土器一覧（3）

挿図番号 図版番号	種別	遺存状態	長さ／幅／厚み	重量	特　徴	胎土	時　期 型　式	出土位置
第32図57 図版13-57	土器片錘	完形品	7.1／5.7／1.4	67.6	抉部２ヶ所／周縁部の摩耗は顕著／口縁部～頸部破片／口縁部と胴部の境に刻みをもつ隆帯を横走させ、口縁部文様帯は隆帯により区画された内部を縦位北縄文が充填	淡茶褐色／石英・白色砂粒を多く、礫（大きめで0.4×1.0cm）・砂粒を含む	縄文中期中葉（勝坂式）	409 Y
第32図58 図版13-58	土器片錘	完形品	8.5／4.4／0.8	52.5	抉部２ヶ所／周縁部の摩耗は顕著／胴部破片／文様は口縁部直下に１本の隆帯をめぐらせ、口縁部文様帯は２本単位の隆帯により区画文を形成／地文は縦位のＬＲ単節斜縄文	暗茶褐色／石英・角閃石・白色砂粒を含む	縄文中期後葉（加曽利Ｅ１式）	409 Y
第32図59 図版13-59	土器片錘	左側部分 40%	6.0／4.0／0.9	24.4	抉部２ヶ所、右側は弱い／周縁部の摩耗は右端部を除き顕著／器面に細縦が見られるが、基本は無文と思われる	黒褐色／角閃石・白色砂粒を含む	縄文中期後葉（加曽利Ｅ１式）	407 Y
第32図60 図版13-60	土器片錘	左側部分 50%	4.6／3.8／0.9	18.2	抉部１ヶ所／周縁部の摩耗は顕著／無文	黒褐色／雲母・白色砂粒を含む	縄文中期中葉～後葉	408 Y
第32図61 図版13-61	土器片錘	左側部分 60%	3.6／3.1／1.1	14.4	抉部１ヶ所／周縁部の摩耗は顕著／無文	暗黄褐色／白色針状物質・砂粒を含む	縄文中期中葉～後葉	409 Y
第32図62 図版13-62	土器片錘	左側部分 20%	2.9／2.6／0.9	7.4	抉部１ヶ所／周縁部の摩耗は顕著／不鮮明であるが地文にはＬＲ単節斜縄文か	黒色／白色砂粒を僅かに含む	縄文中期中葉～後葉	419 Y
第32図63 図版13-63	土製円盤	完形品	4.1／4.4／0.7	15.0	円形に近い六角形か／周縁部の摩耗は顕著／深鉢底部の再利用と思われる	淡茶褐色／砂粒を含む	縄文中期中葉～後葉	遺構外

（単位：cm，g）

第18表　遺構外出土縄文時代土製品一覧

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎　土	時期型式	出土遺構 出土位置
第33図64 図版13-64	高坏	坏部下半～脚台部20%	高 [3.4]	脚台部は直線的に開く	内面：指頭押捺痕／外面：ヘラ磨き調整／坏部内面及び脚台部外面に赤彩	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	弥生後期～古墳前期	遺構外
第33図65 図版13-65	壺	底部 100%	高 [1.3] 底 5.0/5.6	平底／底部は楕円形で歪んでいる	内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：指頭押捺痕が残る	黄褐色／黄褐色粒子・砂粒を含む	弥生後期～古墳前期	遺構外
第33図66 図版13-66	壺	底部 100%	高 [2.1] 底 4.9	底部は中央がやや窪み輪台状	内面：ハケ目調整／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	黄褐色／角閃石・粒子・黄褐色粒子・砂粒を含む	弥生後期～古墳前期	遺構外
第33図67 図版13-67	甕	口縁～胴部上半20%	口 (14.0) 高 [6.9]	口縁部は屈曲する／口唇部に刻みなし	内面：粗いハケ目調整後指頭圧痕／外面：粗いハケ目調整後口縁部は横ナデ、その後指頭押捺／外面は黒く煤けている	淡茶褐色／砂粒を僅かに含む	弥生後期～古墳前期	遺構外
第33図68 図版13-68	甕	胴部下半～脚台部60%	高 [7.7] 底 10.7	台付甕／脚台部は「ハ」の字状	内面：ヘラナデ後ハケ目調整、その後指頭押捺／外面：ハケ目調整後指頭押捺、その後脚部は軽い横ナデ／胴部下半は黒く煤けている	淡茶褐色／砂粒を僅かに含む	弥生後期～古墳前期	遺構外

第19表　遺構外出土弥生時代後期～古墳時代後期土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎　土	時期型式	出土遺構 出土位置
第33図69 図版13-69	壺	口縁部 小破片	厚 0.3	小型壺／単純口縁／ 甕形壺か／口唇部は 短く外反する	内外面：丁寧にヘラ磨き調整	黄褐色／角閃石・ 黄褐色粒子・橙色 粒子を僅かに含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図70 図版13-70	壺	口縁部 少破片	高 [3.2]	幅広複合口縁	外面複合部にＲＬ単節斜縄文 ／内面：ヘラ磨き調整／外 面：複合部直下はハケ目調整 後粗いヘラ磨き調整	暗黄褐色／黄褐色 粒子をやや多く、 砂粒を含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図71 図版13-71	壺	胴上半部 小破片	厚 0.7	緩やかにカーブする	ＲＬ単節斜縄文の下端に自縄 結節文がまわる／無文部はヘ ラ磨き調整後赤彩／外面はヘ ラナデ	黄褐色／黄褐色粒 子をやや多く含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図72 図版13-72	壺	胴部上半～ 下半破片	高 [13.4]	胴部中位に最大径を もつ	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ 磨き調整／外面に赤彩	暗黄褐色／茶褐色 粒子を多く含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図73 図版13-73	壺	胴部下半 破片	厚 0.6	球状を呈する	内面：ヘラナデ／外面：ハケ 目調整後粗いヘラ磨き調整／ 外面に赤彩か	暗黄褐色／砂粒を 含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図74 図版13-74	甕	口縁部 破片	厚 0.4	口縁部は外反し、口 唇上端に刻みあり	内外面：粗いハケ目調整／外 面は黒く煤けている	淡茶褐色／黄褐色 粒子・橙色粒子を やや多く、砂粒を 僅かに含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図75 図版13-75	甕	口縁部 破片	厚 0.5	口縁部は外反し、口 唇部にハケ状工具に よる刻みあり	内面：ハケ目調整／外面：指 頭押捺／外面は黒く煤けてい る	暗黄褐色／砂粒を 僅かに含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図76 図版13-76	甕	口縁～頸部 破片	高 [4.6]	口縁部は外反し、口 唇部にハケ状工具に よる刻みあり	内面：頸部はヘラナデ、口縁 部は横ナデ／外面：頸部はハ ケ目調整、その後口縁部は指 頭押捺／内外面黒く煤けてい る	暗黄褐色／黄褐色 粒子・砂粒を僅か に含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図77 図版13-77	甕	口縁～頸部 破片	高 [3.7]	頸部は屈曲し、口縁 部は屈曲し外反する ／口唇部は丸く刻み なし	内外面：粗いハケ目調整目調 整、口縁部はその後指頭押捺	暗黄褐色／黄褐色 粒子・橙色粒子を やや多く含む	弥生後期～ 古墳前期	遺構外
第33図78 図版13-78	高坏	脚台部 破片	高 [5.3]	裾部は屈曲し外反す る／短脚タイプ	内面：ハケ目調整後裾部は横 ナデ／外面：縦方向のヘラ削 り後粗いヘラ磨き調整、その 後裾部は横ナデ／外面及び内 面裾部は赤彩	暗黄褐色／砂粒を 多く、角閃石を僅 かに含む	古墳時代後期 (6c前葉)	遺構外
第33図79 図版13-79	高坏	脚台部 破片	高 [5.0]	裾部は屈曲し外反す る／短脚タイプ	内面：ヘラナデ／外面：縦方 向のヘラ削り／内外面に赤彩	暗黄褐色／砂粒を やや多く、角閃石 を僅かに含む	古墳時代後期 (6c前葉)	遺構外
第33図80 図版13-80	壺	口縁部 破片	高 [4.0]	有段口縁壺／頸部は 屈曲する	内面：ヘラ磨き調整／外面： 横ナデ／内外面に赤彩	暗黄褐色／角閃石 ・黄褐色粒子・砂 粒を含む	古墳時代後期 (6c前葉)	遺構外

第19表　遺構外出土弥生時代後期～古墳時代後期土器一覧（２）

挿図番号 図版番号	種別	器種（cm）	法量 （cm）	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
第33図81 図版13-81	磁器	碗	高 5.0 口 (9.0) 底 3.2	小碗／胎土：灰白色、精錬されている／被熱あり／遺存度40％	京焼	遺構外	近世 （19c）
第33図82 図版13-82	磁器	碗	高 6.2 口 (11.7) 底 (6.2)	広東碗／高台／外面に櫓閣山水文／高台に二重圏線／見込みに３か所ピン留め／遺存度60％	肥前系	遺構外	近世 （19c）
第33図83 図版13-83	磁器	碗	高 [2.3] 底 (4.8)	染付／高台／外面に風景文／体部下半～底部30％	肥前系	遺構外	近世 （18c後半）
第33図84 図版13-84	磁器	皿	高 3.2 口 14.2 底 7.6	染付／高台／内面：草花文、見込みに五弁花／外面：唐草文、崩し大明年製、高台に二重圏線／こんにゃく判／遺存度80％	肥前系	遺構外	近世 （18c）
図版13-85	磁器	碗	高 [3.1] 厚 0.3	筒碗／染付／内面：二重圏線／外面：松文／口縁部～体部破片	肥前系	416 Y	近世 （18c～ 19c）
図版13-86	磁器	碗	高 [3.0] 厚 0.3	染付／外面：風景文／口縁部～体部破片	肥前系	遺構外	近代 （19c）
図版13-87	磁器	碗	高 [2.8] 厚 0.4	染付／内面：草花文／外面：網目文／口縁部～体部破片	肥前系	416 Y	近世 （18c～ 19c）
図版13-88	磁器	碗	高 [2.3] 底 0.4	染付／外面：草花文／口縁部～体部破片	肥前系	416 Y	近世 （18c後半）
図版13-89	磁器	碗	高 [3.0]	平筒碗／高台／内面：二重圏線／外面：青磁／体部下半～底部破片	肥前系	416 Y	近世 （18c後半）
図版13-90	磁器	碗	高 [2.1]	染付／高台／外面：不明文様あり、高台に二重圏線／被熱あり／体部下半～底部破片	肥前系	遺構外	近世 （18c）
第33図91 図版14-91	陶器	蓋	高 1.7 口 6.3	急須蓋／丸摘み／摘み径 1.3cm／受部 3.6cm／穿孔あり／灰釉絵「□」／胎土：淡黄褐色、砂粒を含む／遺存度ほぼ完形	不明	417 Y	近代 （19c）
第33図92 図版14-92	陶器	蓋	高 2.8 口 9.7	灰蓋／丸摘み／摘み径 1.4cm／受部 4.3cm／外面に灰釉／胎土：黄白色、砂粒を含む／底部に回転糸切り痕あり／遺存度70％	瀬戸・美濃	遺構外	近世 （18c）
第33図93 図版14-93	陶器	碗	高 [1.8] 底 (3.7)	天目茶碗／削出し高台／内面に鉄釉／胎土：黄白色、砂粒を含む／体部下半～底部70％	瀬戸・美濃	409 Y	近世 （17c）
図版14-94	陶器	碗	高 [4.8] 厚 0.5	白天目／胎土：黄白色、砂粒を僅かに含む／口縁部～体部下半破片	瀬戸・美濃	遺構外	中世 （16c～ 17c）
図版14-95	陶器	皿	厚 0.6	内面及び外面口縁部に灰釉／胎土：黄白色、砂粒を僅かに含む／口縁部～体部下半破片	瀬戸・美濃	404 Y	中世 （15c～ 16c）
図版14-96	陶器	皿	厚 0.6	内面及び外面口縁部に灰釉／胎土：黄白色、砂粒を僅かに含む／口縁部～体部下半破片	瀬戸・美濃	417 Y	中世 （15c～ 16c）
図版14-97	陶器	皿	厚 0.3	内外面に灰釉／胎土灰白色、砂粒を僅かに含む／口縁部～体部小破片	瀬戸・美濃	405 Y	近世 （17c）
図版14-98	陶器	皿	厚 0.3	内面及び外面口縁部に緑色釉／胎土：灰白色、白色砂粒を僅かに含む／口縁部～体部下半破片	唐津	406 Y	近世 （17c）
図版14-99	陶器	皿	厚 0.4	内外面に鉄釉／内外面の一部に黒いタール状の付着物、灯明皿に使用された可能性あり／胎土灰褐色、砂粒を僅かに含む／口縁部～体部小破片	不明	遺構外	近世 （17c）
図版14-100	陶器	香炉	高 [2.2]	水平口縁／口縁部内面及び外面に鉄釉／胎土：黄白色、砂粒を僅かに含む／口縁部小破片／灰釉き	瀬戸・美濃	遺構外	近世 （18c）
図版14-101	陶器	皿	厚 0.7	内面底部近くに櫛歯状工具による波状文様あり／内外面に灰釉／胎土：黄白色、砂粒を僅かに含む／体部下半破片	瀬戸・美濃	405 Y	中世 （16c）

第20表　遺構外出土陶磁器・土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	種別	器種（cm）	法量 （cm）	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
図版14-102	陶器	皿	高[2.6]	高台／内面に透明釉／胎土：灰白色、白色砂粒を僅かに含む／体部下半～底部破片	瀬戸・美濃	遺構外	中　世 （16c）
図版14-103	陶器	皿	高[2.6]	菊花皿／高台／内面及び体部下半に透明釉、緑色釉／胎土：黄白色、砂粒を僅かに含む／体部下半～底部破片	瀬戸・美濃	遺構外	中　世 （16c）
図版14-104	陶器	皿	高[1.8]	高台／内面に灰釉／胎土：黄白色、砂粒を含む／体部下半～底部破片	瀬戸・美濃	418 Y	中　世 （16c）
図版14-105	陶器	瓶	厚 0.7	体部は全体に直線的に直立する／内外面に鉄釉／胎土：灰褐色、黄褐色粒子を含む／体部破片	瀬戸・美濃	遺構外	近　世 （18c）
図版14-106	陶器	徳利	高[3.6]	内外面に鉄釉／胎土：暗茶褐色、砂粒を僅かに含む／体部下半～底部破片	瀬戸・美濃	遺構外	近　世 （19c）
図版14-107	陶器	香炉	高[2.8]	平底／外面に鉄釉／胎土：黄白色を基調、砂粒を僅かに含む／体部下半～底部破片	瀬戸・美濃	407 Y	中　世 （16c）
図版14-108	陶器	擂鉢	高[7.0]	複合口縁／口縁部直下の沈線は内面に１本、外面に２本まわる／内外面に鉄釉／内面口縁部直下に７本一単位のハケ目／胎土：明茶褐色、砂粒・小石を含む／口縁部～体部上半破片	堀前系	遺構外	近　世 （19c）
図版14-109	陶器	擂鉢	厚 0.7	内面にハケ目／内外面に鉄釉／胎土：黄白色、白色砂粒を僅かに／体部破片	瀬戸・美濃	遺構外	近　世 （17c）
図版14-110	陶器	擂鉢	厚 1.0	内面にハケ目／内外面に鉄釉／胎土：黄白色、黒色粒子を多く、黄褐色粒子を含む／体部破片	瀬戸・美濃	416 Y	近　世 （18～19c）
図版14-111	陶器	捏鉢	厚 1.2	ロクロ成形／外面：体部下半はヘラ削り／胎土：灰色、砂粒・小石をやや多く含む／体部中位～下半破片	常滑	遺構外	中　世 （14c）
第33図112 図版14-112	土器	皿	高[1.6] 底(6.4)	ロクロ成形／底部は回転ヘラ削り／内外面黒色／胎土：黄褐色を基調、砂粒を僅かに含む／体部下半～底部破片	在地系	406 Y	中　世 （15c～ 16c）
図版14-113	土器	焙烙	高 5.6	内耳１か所あり／口唇部は面取りされ中央が窪んでいる／内面は黒く煤けている／ロクロ成形／平底／胎土：灰白色、砂粒を含む／口縁部～底部破片	在地系	遺構外	近　世 （17c）
図版14-114	土器	焙烙	高 4.7	内耳１か所あり／口唇部は面取りされ中央が窪んでいる／黒く煤けていない／ロクロ成形／平底／胎土：黄褐色、砂粒をやや多く含む／口縁部～底部破片／116と同一個体と思われる	在地系	遺構外	中　世 （16c）
図版14-115	土器	焙烙	高 5.0	内耳１か所あり／口唇部は面取りされ中央が窪んでいる／内外面は黒く煤けている／ロクロ成形／胎土：黄褐色、茶褐色粒子・砂粒を含む／口縁部～底部破片	在地系	遺構外	近　世 （17c）
図版14-116	土器	焙烙	高[1.8]	口唇部は面取りされ中央が窪んでいる／黒く煤けていない／ロクロ成形／胎土：黄褐色、砂粒をやや多く含む／口縁部～底部破片／114と同一個体と思われる	在地系	遺構外	中　世 （16c）
第33図117 図版14-117	土器	手焙り	高 7.3 口(17.0) 底 14.2	胴丸形／口縁部は内湾する／外面に多段の縦筋状の文様／ロクロ成形／内外面黒色／三足貼付／胎土：灰白色、砂粒を僅かに含む／遺存度60％	在地系	遺構外	中　世 （16c）

第20表　遺構外出土陶磁器・土器一覧（２）

挿図番号 図版番号	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重量	特　徴	出土位置
第33図118 図版14-118	銅製品	煙管雁首	4.5	1.0	0.5	3.0	幅付け左／火皿を欠損	405 Y
第33図119 図版14-119	鉄製品	釘	8.9	1.2	0.7	15.0	断面形は長方形／下端部を欠損	遺構外

（単位：cm，g）

第21表　遺構外出土金属製品一覧

第４章　調査のまとめ

今回は、本文中でも説明をしたが、本地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡16軒（355・361・362・365・404～409・415～420Ｙ）、中世以降の井戸跡１基（６Ｗ）が対象地点として検出されているが、すでに区画整理第５Ⅱ・Ⅲ地点・第74地点（佐々木・内野・宮川　2009）において報告が行われている経緯を含め、本報告においては改めて掲載はしなかったことを了承願いたい。

ただし、今回の調査のまとめを行うに当たり、本地点を含め、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡が非常に密集しており、さらに出土土器については、西原大塚遺跡全体を見渡してしても外来系の遺物が多く含まれており注目すべき良好な資料であったため、ここでは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡19軒（355・361・362・365・404～409・410・411・413・415～420Ｙ）から出土した土器についての考察を行うこととしたい。

第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物について

（１）住居跡の新旧関係について

ここでは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡19軒（355・361・362・365・404～409・410・411・413・415～420Ｙ）について、遺構間での新旧関係を確認することとしたい。

新旧関係については、第３図に示したように住居跡の密集度は甚だ高く、そして切り合い度も相当に著しい状況である。

そこで、今回の住居跡の新旧関係を以下のように事象毎に事象Ａ・Ｂにまとめることにより、本地点における時間軸の設定及び土器様相の変遷を考える上での基本とすることとしたい。

事象Ａ（355Ｙ・417Ｙ）２軒の新旧関係＋420Ｙの存在　（古）⇨（新）
①355Ｙ⇨417Ｙ

事象Ａから判明したことは、417Ｙが355Ｙを切ることが明らかであることから、２時期が設定可能となる。また、355Ｙの南西側に攪乱を介し420Ｙが存在するが、417Ｙと同時期も考えられるため、少なくとも２時期の設定は可能であろう。

事象Ｂ（361・362・365・404～409・415・416・418・419Ｙ）13軒の新旧関係（古）⇨（新）
①362Ｙ→361・365Ｙ　②409Ｙ→365・407・415Ｙ　③415Ｙ→407Ｙ　④407Ｙ→408Ｙ
⑤404Ｙ→406・407Ｙ　⑦405→406Ｙ　⑧416Ｙ→361・405Ｙ　⑧418Ｙ→416Ｙ→419Ｙ

事象Ｂについては、事象Ａ以外のすべての住居跡13軒が細長い楕円状に１周ぐるりと新旧関係で連なっており、相当複雑な状況である。しかし、個々での切り合いと全体的な切り合いの結果から、時間軸上の変遷は長時間に亘ることが考えられ、おそらく西原大塚全体での時間軸上全体の推移をこれらの一群が示していると言ってもよいような事例として重要な事象となりうるであろう。最も新しい住居跡は365・406・408・419Ｙの４軒と考えられ、これらは古墳時代前期中葉より新しい後葉まで下るもの

である。時期の設定については、今回最も古い１期の段階から最新の６期の段階までの６時期の設定が可能であろう。

（２）時期区分と土器様相の変遷について

ここでは、前項での住居跡の新旧関係を基本に各住居跡から出土した土器の特徴を検討することで、時期区分については、１～６期に区分することとした。

今回の編年基準の最も古い段階の１期については、壷形土器がまだ頸部形態が屈曲しない、甕形土器は口唇部に刻みをもち、「く」の字口縁とならないことから、弥生時代後期でも末葉まで下らない後期後葉とし、最新の６期については、高坏形土器である柱状脚高坏の出現、壷形土器では二重口縁壷、甕形土器では叩き甕、Ｓ字口縁甕の共伴、さらに弥生時代在来土器や東海系土器などが希薄化となり、畿内系土器による土器組成が安定した段階として、いわゆる五領Ⅲ式相当の土器構成が見られる段階とすることで、古墳時代前期後葉に位置付けられる。

時期の区分と設定及び該当する住居跡については、比較資料として、基本となる弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年基準を組み込んだ内容を第22表に示した（註１）。

それでは、時期区分毎に各住居跡から出土した土器様相の変遷図である第34～37図と各器種に見られる主な属性の推移を示した第23表を参考に土器様相の変遷を考えてみることにする。

今回、器種構成の分類としては、①坩形土器、②器台形土器、③鉢形土器、④高坏形土器、⑤壷形土器、⑥甕形土器、⑦甑形土器、⑧ミニチュア土器と便宜的に番号と器種を一致させ時期毎に説明することとする。

畿内編年	関川 1976	纒向2式	纒向3式					纒向4式
	寺沢 1986	庄内2式		庄内3式	布留0式	布留1式	布留2式	
近年の久ヶ原式編年	安藤 2017(再設定)	久ヶ原Ⅲ式新段階	日吉台式	－		－	－	
	大村 2004	山田橋2式古	山田橋2式新	中台1・2式	草刈1式	草刈2式	草刈3式	
	古屋 2014	北川谷4期古	北川谷4期新～北川谷5期新			北川谷6期	－	
	比田井 2001	後期Ⅲ段階古	後期Ⅲ段階新	古墳前期1古	古墳前期1新	古墳前期Ⅱ段階	古墳前期Ⅲ段階	
	松本 2005	久ヶ原3式		－		－	－	
尾張編年	宮腰 1987	元屋敷古段階				元屋敷新段階		
廻間編年	赤塚 1990	廻間Ⅱ式				廻間Ⅲ式		
		1段階	2段階	3段階	4段階	1段階	2～3段階	
		廻間5期（古）	廻間5期（新）	廻間6期（古）	廻間6期（新）	廻間7期	廻間8期	
稲荷台遺跡編年	書上 1994	第1段階				第2段階	第3段階	
		前		中	後			
児玉地方編年	松本 2022	－	弥生終末期	古墳前期初頭	古墳前期前葉	古墳前期中葉	古墳前期後葉	
反町遺跡編年	赤熊・福田 2011	－	－	－	Ⅱ-1期	Ⅱ-2期	Ⅱ-3期	
		－	－	－	3c末～4c前半	4c前半～中葉	4c中葉～末	
従来南関東編年	埼玉県史 1982	弥生町式	前野町式	五領Ⅰ式		五領Ⅱ式	五領Ⅲ式	
	横川 1982	－	前野町式	五領Ⅰ式		五領Ⅱ式	五領Ⅲ式	
	笹森 1989・1990	弥生町式	前野町式	五領Ⅰ式		五領Ⅱ式	五領Ⅲ・Ⅳ式	
西原大塚遺跡第72地点における時期区分と該当住居跡		弥生後期後葉	弥生後期末葉	古墳前期初頭	古墳前期前葉	古墳前期中葉	古墳前期後葉	
		1期	2期	3期	4期	5期	6期	
		355 Y	409 Y	410 Y	404 Y	361 Y	365 Y	
		362 Y	413 Y	420 Y	411 Y	405 Y	406 Y	
			418 Y		415 Y	407 Y	408 Y	
					416 Y		419 Y	
					417 Y			

第22表　弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年基準

１期－弥生時代後期後葉（355・362号住居跡）

器種構成としては、⑤壷形土器・⑥甕形土器である。

⑤壷形土器

355Ｙ－１は幅広複合口縁を呈し、比較的に頸部が長く、胴部から頸部の移行はスムーズである。複合部には５本一単位の棒状貼付文が付され、地文には縄文が施されずにハケ目痕を残すものである。同様の幅広複合口縁を呈するものとして、355Ｙ－17・18があるが、これらは複合部の地文に単節斜縄文が施文されている。幅狭複合口縁を呈するものとしては、355Ｙ－19、362Ｙ－23がある。

この段階の壷形土器の特徴としては、幅広・幅狭の複合口縁を呈し、単節斜縄文、自縄結節文による縄文施文の土器のみで占めていることから、弥生時代在来の特徴をもつものが主体と考えられる。

⑥甕形土器

355Ｙ－２は口縁部形態が「く」の字に屈曲せず、口唇部に刻みがあるもので、355Ｙ－25は小破片ながら、「く」の字口縁で、口唇部の刻みがなく、前者より新しい様相と考えられる。調整としては、355Ｙ－２がナデ甕であり、古い様相と言える。西原大塚遺跡第70地点では、この段階でハケ甕が主体となるものである（尾形　2023）。

２期－弥生時代後期末葉（409・413・418号住居跡）

器種構成としては、①坩形土器・③鉢形土器・⑤壷形土器・⑥甕形土器である。

①坩形土器

409Ｙ－１・２がある。本地点では著しい住居跡の重複がみられるため、409Ｙを切る５期の407Ｙ、６期の365Ｙからの混入品である可能性がある。

③鉢形土器

409Ｙ－３は小型鉢で、胴部はやや膨らみ、口縁部が直立するもので、内外面にハケ目調整を残し、その後指頭により仕上げられている粗雑な土器である。

418Ｙ－１はやや大きめの平底を呈する内湾タイプで、口縁部に縄文を施文しないもので千葉県市原市唐崎台遺跡（田中　1993）、千葉県木更津市マミヤク遺跡（野口・小沢他　1989）などの東京湾沿岸系の久ヶ原式の中でも多くみられる類として、弥生時代在来の土器と考えられる。

⑤壷形土器

418Ｙ－４は外反する口縁部に合わせて複合部を薄く貼付けるタイプであり、１期の355Ｙ－１のように複合部を直立状に貼付けるタイプより新出タイプと考えられる。西原大塚遺跡第70地点では、３期以降の特徴であるため、小破片であることもあり混入品の可能性もある。

418Ｙ－５は胴部に自縄結節文を伴う文様が施文されており、東京湾沿岸の特徴をもつ土器である。409Ｙ－４は頸部屈曲部に断面三角形の凸帯がまわる土器で、東海地方東部の菊川式や山中式に系譜をもつ特徴と考えられる。

⑥甕形土器

調整として、本期以降すべてハケ甕となる。なお、１点のみ４期からナデ甕の416Ｙ－27があるが、混入品の可能性がある。本期における資料は乏しいが、口唇部に刻みがあるものとないものが共存するが、この段階以降は「く」の字口縁で刻みがないものが主流となる。

3期－古墳時代前期初頭（410・420号住居跡）

器種構成は少なく、⑤壺形土器・⑥甕形土器の2器種である。

⑤壺形土器

この段階では、出土例が極めて少なく、420Y－2は単純口縁で外反するものである。

⑥甕形土器

口縁部形態としては、すべて「く」の字口縁で屈曲するものである。口唇部の刻みの有無としては、すべて刻みがなく、ハケ甕である。

4期－古墳時代前期前葉（404・411・415・416・417号住居跡）

器種構成は、②器台形土器・④高坏形土器・⑤壺形土器・⑥甕形土器・⑧ミニチュア土器である。

②器台形土器

小破片であるが、417Y－4・5がある。いずれも口縁部が内湾するタイプである。本地点における器台形土器の出現は、2期のものを除けば、坩形土器より1段階先行するものと考えられる。

④高坏形土器

坏部形態として、口縁部が内湾する404Y－1、逆三角形状の411Y－2、坏部下端が有稜の416Y－1、口縁部直下が有段の416Y－11があり、種類が多い。内湾するタイプと逆三角形タイプは、弥生時代在来のもので、笹森氏による口縁部が内湾し半球状を呈する器形で口縁部が無文のもの（B類）に該当するものと思われる（笹森　1993）。有稜・有段タイプについては、東海地方西部に系譜ともつものであろう。

⑤壺形土器

弥生時代在来の幅広・幅狭複合口縁壺が若干出土しており、単純口縁では口縁部が外反するタイプと内湾するタイプがあり、新しく台付壺と小型壺が加わる。

複合口縁壺では、416Y－17が複合部の貼付けが外反する口縁部に直立しているが、417Y－7は外反する口縁部に合わせて複合部を薄く貼付けるタイプである。後者のタイプは西原大塚遺跡第70地点では3期（古墳時代前期初頭）から見られ、古墳時代に入ってから出現する新出タイプである。笹森氏によるⅥ期（五領Ⅰ式）の段階で出現するものである（笹森　1993）。

404Y－2は台付壺であり、志木市では希少な土器と言える。上下端が欠損するが、壺の形態は胴部下半に最大径をもつやや下膨れのタイプで、愛知県・岐阜県・三重県で類例が見られる。伊勢湾地方第Ⅳ様式から系譜を引くものと考えらえる（小林・杉原　1968）。

小型壺の417Y－2の底部は中央部がやや窪み、輪台状を呈しているもので、これについては、平底甕404Y－3の底部と同じように4期の叩き甕（416Y－9）の底部形態に類似する。

⑥甕形土器

新たな土器として、平底甕、叩き甕、受口状口縁甕が加わっている。

弥生時代在来の甕形土器については、口縁部形態が「く」の字に屈曲するものであり、口唇部の刻みの有無としては、両者が共伴している。416Y－6・7のような全体に縦長タイプは、一見すると弥生時代中期後半の宮ノ台式土器に類似する土器である。

平底甕は、器面全体にハケ目調整が施され、404Y－3は胴部下半に顕著に指頭による成形痕が残る、いわば無調整のものである。また、底部形態も単純な平底ではなく、一見、叩き甕の底部を思わせ

るような中央が窪み輪台状を呈するものである。

411Ｙ－６、416Ｙ－９は叩き甕で、市内では西原大塚遺跡内のみの出土であり、さらに出土例も破片資料のみで稀有な存在であったが、416Ｙ－９は口縁部から胴部上半を欠損するが、最も残りの良いものである。志木市での叩き甕の出現は、今のところ４期以降と考えられる。

416Ｙ－24はいわゆる受口状口縁甕である。この土器については、愛知県廻間遺跡でも受口状口縁を有する甕形土器を「近江型甕」（赤塚　1990）として、埼玉県東松山市反町遺跡においても受口状口縁甕の系譜については、甕Ｅとし、「近江系」の系譜で考えられている（赤熊・福田　2011）。416Ｙ－８は口縁部形態として、口唇部外面に弱い面取りを施し、僅かに内湾することから、受口状を呈しているが、本来の受口状口縁甕とは異なり、在地系もしくは模倣によるものであろう。

⑧ミニチュア土器

416Ｙ－10の１点がある。やや大きめであるが、主流の壺形土器とは特徴が異なることから、ミニチュア土器として扱った。外面全体は良く磨かれており赤彩されている。

５期－古墳時代前期中葉（361・405・407号住居跡）

器種構成は、①坩形土器・②器台形土器・③鉢形土器・④高坏形土器・⑤壺形土器・⑥甕形土器・⑦甑形土器で、⑧ミニチュア土器の出土はみられなかった。

①坩形土器

坩形土器の出現は、すでに２期で掲載しているが、基本的には本期からと考えられる。そのため、西原大塚遺跡第70地点において、出土しなかった理由として、５期以降の資料がなかったことで説明がつくであろう。この段階での坩形土器は、底部形態が碁笥底、平底、丸底とバラエティーに富んでおり、安定した出土状況と言える。

②器台形土器

器台形土器の安定した出土は、本期からと考えられる。また、この段階には、新たな土器として、405Ｙ－10のような受部が鍔状となる、いわゆる北陸系装飾器台が出現する。

405Ｙ－11は裾部に向かって大きく開く脚台部をもち、廻間編年７期以降の特徴である。

405Ｙ－９は脚台部が細長くやや柱状に間延びしているタイプであるが、柱状脚については、高坏形土器の五領Ⅲ式の特徴に見られる特徴であり、器台形土器にはあまり顕著なものは類例としてあげることは難しいが、廻間編年における器台Ｂ１の脚台部の７・８期以降に特徴変化の「直線化」に相当するものと考えられる。脚台部の長脚化の現象は、廻間編年７期以降でも高坏形土器においても顕著に認められないことから、柱状脚を作り出した母体とすれば、畿内系とするのが妥当と思われる。

③鉢形土器

407Ｙ－７は小型鉢で、複合口縁を呈する内湾タイプである。内面赤彩の土器で口縁複合部にＲの無節斜縄文を施文し、円形赤彩文１か所を施文される特徴は、東京湾沿岸系を特徴とする土器と考えられる。笹森氏による口縁部が内湾し半球状を呈する器形で、口唇部に縄文が施文されているもの（Ａ類）に該当する（笹森　1993）。小破片であるため混入品の可能性がある。

405Ｙ－６は底部が小さく逆三角形を呈するもので、405Ｙ－７は有段口縁鉢である。

④高坏形土器

407Ｙ－３は坏部が小型で内湾タイプのものである。弥生時代在来のものとも考えられるが、廻間遺

跡の高坏Bの椀形高坏に分類できるものであろう（赤塚　1990）。

⑤壺形土器

良好な資料として、大型壺の361Y－1がある。幅広複合口縁を呈し、頸部が屈曲し、胴部はきれいな球状のものである。この幅広複合口縁は1期の355Y－1のような弥生時代在来の口縁部に直立気味に貼られる複合部の作りとは異なり、口縁部の外反と一体化したものである。

⑥甕形土器

新たな土器として、S字口縁甕の405Y－24がある。また、いずれも破片であるが、叩き甕では405Y－38、受口状口縁甕では405Y－31が出土している。S字口縁甕の出現時期については、反町遺跡から比べ、1段階遅れている状況である。

従来の甕形土器は、すべて口縁部形態が「く」の字に屈曲し、口唇部の刻みの有無としては、すべて刻みなしである。調整としてもすべてハケ甕が基本となるが、最終的な仕上げとして、405Y－21のようにハケ目調整後に指頭押捺が施される土器が共伴している。

平底甕の405Y－21は、底部形態とし、底部中央が円形に窪んだ輪台状のものがこの段階にも存在し、叩き甕の底部形態を意識して製作されたものと思われる。

⑦甑形土器

この段階には405Y－20の1点が出土している。この土器は大型で、逆台形状で胴部から口縁部にかけて直線的に開き口縁部が複合口縁を呈するものである。底部を欠損しているため厳密には器種の特定は難しいところであるが、東松山市反町遺跡の甑Bに分類されるもので、Ⅱ－2期の179・206号住居跡出土のものと酷似しているため、甑形土器でよいであろう。底部は多孔式と考えられる。この土器については、「他地域系統の可能性」として理解されているようである（赤熊・福田　2011）。

6期－古墳時代前期後葉（365・406・408・419号住居跡）

器種構成は、①坩形土器・②器台形土器・③鉢形土器・④高坏形土器・⑤壺形土器・⑥甕形土器・⑦甑形土器・⑧ミニチュアと全器種が揃っている。

土器様相としては、前段階の5期同様に畿内を系譜にもつ土器群による構成が確立し、甕形土器ではS字口縁甕が伴うものである。

この段階は、稲荷台遺跡第3段階の「「柱状脚部高坏」、「無透孔屈折脚高坏」等と呼ばれる高坏の参入に象徴される段階」（書上　1994）に相当し、現時点での西原大塚遺跡における古墳時代前期の最終段階である。

①坩形土器

底部が碁笥底の406Y－1・2の2点のみで、平底、丸底のものは出土していない。これについては、五領Ⅲ式のメルクマールとなる、埼玉県さいたま市（旧大宮市）下加南遺跡4号住居跡（笹森　1986）においても6点の小型坩はすべて碁笥底であることからも碁笥底タイプは坩形土器においては最新タイプと考えられる。

②器台形土器

406Y－3、408Y－1は、受部形態として、口縁部下端に有段をもち、口縁部は直線的に外反・外傾するタイプである。この特徴をもつ土器は、廻間編年8期の最新タイプである器台B4（赤塚　1990）に類似し、本地点における出現と一致するものである。

③鉢形土器

大型の365Ｙ－７が１点出土している。このような大型のものは市内でも皆無である。

④高坏形土器

畿内に系譜を引くと考えられる、いわゆる柱状脚部高坏が365Ｙ－５、408Ｙ－２、419－２で出土している。柱状を呈し中空の脚台部をもつ土器については、書上元博氏により、「下加南型高坏」と呼称され、「直線的に開く深身の坏部、中実円筒の内部をくり抜いた肉厚の長い柱状脚、屈曲して開く円錐台形の裾部」を特徴とされている（書上　1996）。脚部は欠損しているが、口縁部が僅かにくびれ、坏部下端が有段ないし有稜を呈する365Ｙ－６、419Ｙ－１もこの類の可能性がある。また、脚台部が柱状を呈するものの365Ｙ－５、419Ｙ－２は中空ではなく棒状を呈するものである。

⑤壷形土器

新たに畿内系及びいわゆる「伊勢型二重口縁壷」（田口　1981）が出土している。

365Ｙ－２は前段階の361Ｙ－１に継続する幅広複合口縁の土器である。408Ｙ－９は幅狭複合口縁を呈し、口唇部にLR単節斜縄文を施文されるもので、この段階までこのタイプが共伴する出土するのにはやや疑問が残る。小破片であるため、混入品の可能性もある。

365Ｙ－１、408Ｙ－11はいわゆる二重口縁壷で、前者は大型壷のもので、いわゆる「伊勢型二重口縁壷」と考えられる。この土器の特徴は、畿内系とは異なり、全体に大型で器厚が厚く重量感があり、頸部は直立せず外傾し、二重口縁の形態は端部がシャープで精巧な作りのものである。ヘラ磨き調整は口縁部から胴部に至るまですべて縦方向に施され、無文の土器である。後者はおそらく畿内に系譜をもつものであろう。

365Ｙ－３・４、419Ｙ－３は小型壷と思われるが、バラエティーが多く、365Ｙ－４はミニチュア土器なのか419Ｙ－３は小型甕なのかなど分類が難しい。

⑥甕形土器

従来の甕形土器は、すべて口縁部形態が「く」の字に屈曲するものであるが、この段階でも406Ｙ－19のように頸部は屈曲するが、口唇部に刻みをもつものが存在する。

365Ｙ－10は脚台部が高台のように短いもので、市内では西原大塚遺跡第14地点36Ｙ－１（佐々木・尾形　1996）に同類のものが見られ、脚台部端部が摩耗しており、製作当初からの形状であったのか、破損後の再利用であるのか不明としている。

Ｓ字口縁甕としては、365Ｙ－８が全体を知り得る貴重な資料である。極端に器厚を薄くし、口縁部の作りもシャープで精巧な作りのものである。

⑦甑形土器

この段階には、365Ｙ－11、408Ｙ－20が出土している。前者は底部筒抜け式で、後者は多孔式のもので、いずれも小型品である。

（３）器種毎の土器様相の推移について

以上、前項では、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡19軒の住居跡の新旧関係を基本に土器様相の推移を１～６期に区分し時期毎に説明してきた。ここでは今回分類できた①坩形土器、②器台形土器、③鉢形土器、④高坏形土器、⑤壷形土器、⑥甕形土器、⑧甑形土器の８器種について、器種毎に気が付いたことをまとめることとする。

①坩形土器

1～4期を通してでは、2期で409Y－1・2の2点が出土している。5期になると、質・量ともに安定した様相として把握することができる。これについては器台形土器・鉢形土器と同様な状況であるため、4期と5期との境界がはっきり区別できる感がある。反町遺跡（赤熊・田中他　2011）における坩形土器については、Ⅱ－2期が出現時期であることから、本遺跡の坩形土器の出現と一致するものである。そうした場合、2期の409Y－1・2については、第3図の遺構分布図を再度確認してみてもわかるように5期の407Y、6期の365Yにも切られ複雑な切り合い関係があるため、混入品であることも想定した方がよいと思われる。

②器台形土器

器台形土器と高坏形土器については、脚台部のみの残存では器種の特定が難しいが、今回、明らかに東海地方の脚台部の特徴である、「ハ」の字状を呈する器形の他に柱状に細長い器台形土器が5期の405Y－9にみられる。この柱状脚の器台形土器については、西原大塚遺跡全体で見ても稀な存在であるが、笹森紀巳子氏により五領Ⅲ式（横川　1982）とされる本庄市（旧児玉町）後張遺跡第177号住居跡（立石他　1982）の長脚状の器台形土器（笹森　1989）と比べ、受部の外反する口縁部や脚台部の裾部の末端部が反り返るという特徴を有さないことから、五領Ⅲ式よりも古い様相として考えたい。これは住居跡の新旧関係で405Yが6期の406Yに切られていることからも言えることで、この器台形土器に見られる柱状化は高坏形土器より1段階早い5期からと判断できる。

さらに今回、希少で良好な資料として、405Y－10の器台が出土している。この土器は口縁部を欠損するものの鍔状の特徴をもち、中央に円形の貫通孔をもつもので、いわゆる北陸系装飾器台の名称で浸透しているものである。その出自・系譜については、「不明な部分が多く残されている」（書上1994）とされるが、北陸地方ないし日本海沿岸地域に系譜を引くとものと考えられる。用途については、「祭祀的意義をもった特殊な土師器」（玉口　1972）と考えられている。さらに、高坏形土器と器台形土器の属性を兼ね備えた「特殊器台」の中で、本資料のように坏部の中央に貫通孔をもつ「高坏状装飾器台形土器」（野村　2013）であり、この器台形土器については、県内での類例として、美里町（旧美里村）日の森遺跡第1号溝（菅谷　1978・埼玉県　1982）、東松山市下道添遺跡13号方形周溝墓（坂野　1987）、さいたま市（旧岩槻市）諏訪山遺跡5号住居跡（柳田・横川・増田　1971、埼玉県1982）、上尾市稲荷台遺跡第55号住居跡（書上　1994）などの資料が古くから知られている。最新では埼玉県坂戸市反町遺跡第130・185・206・241・246・272・280・305号住居跡、同遺跡第79号溝跡から、質・量ともに良好な資料が出土している（赤熊・田中他　2011）。出自については、いわゆる北陸系装飾器台として浸透しているが、坂野和信氏によると、「有孔器台A類」とし、「布留式系の小型器台A類の脚部を大型化したもので、畿内と在地的要素が一体化したもの」と捉えられている（坂野1987）。

器台形土器の出現は、今回、坩形土器より1段階早い段階となるが、反町遺跡においても坩形土器の1段階前のⅡ－1期（赤熊・福田　2011）とされており、同じ結果となった。これと同様に中耕遺跡（杉崎　1993）の土器編年や従来からの横川氏の論文（横川　1982）でも器台形土器が先行して出現するとして一致する結果と言える。しかし、坩形土器と器台形土器のセット関係で考えるのならば、先行して器台形土器の出現があった場合、それはセットで組み合わせができない状況となる。そのため、最初は器台形土器が単独で使用されており、坩形土器が1段階遅れて出現することにより、セット関係

が誕生するものと考えざるを得ないであろう。

また、第１段階（前野町式）で、坩形土器と器台形土器の共伴例を示す論文（笹森　1989）や川口市鍛冶谷・新田口遺跡の分析（福田　1992）では、反対に坩形土器が器台形土器に先行して序列されており（註２）、複雑な状況を示している。こうした問題は、調査では、土器の廃棄段階での現象を捉えているだけにすぎないため、廃棄時における土器の選択や何らかの行為があったのかなどの総合的な検討を行う必要があろう。

③鉢形土器

５期の405Ｙ－６のような底部が小さく逆三角形を呈するものは、非常に単純なタイプであるため、類似タイプは多くありそうであるが、ここでは畿内第Ⅴ様式から継続して見られるもので鉢Ａ類に該当するものと考えたい（奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　1983）。405Ｙ－７は有段口縁鉢で、古墳時代後期の有段坏に似た形態のもので、これも坩形土器から派生したものであろうか。

６期に365Ｙ－７のような大型のものが１点出土しているが、市内では皆無のものである。この段階の土器については、その主体が外来系土器であるため、この土器と365Ｙ－１のいわゆる「伊勢型二重口縁壺」に調整技法等が類似することから、東海西部地方に系譜を引く可能性が考えられる。

④高坏形土器

本地点では、１～３期における出土はなく、４期からの出土となる。坏部形態は内湾するタイプや坏底部が有段ないし有稜を呈するタイプがある。また、脚台部は「ハ」の字状を呈するのが通常タイプであるが、６期では柱状を呈した土器が365Ｙ－５、408Ｙ－２、419－２に見られる。この柱状脚の器台については、従来の五領Ⅲ式（横川　1982）を示す基準となる資料であり、笹森紀巳子氏により、さいたま市下加南遺跡第４・７号住居跡を例に確固たる位置付けがなされている（笹森　1986）。そのうち408Ｙ－２は中空の脚台部をもつ「下加南型高坏」（書上　1996）と考えられる。また、脚台部が柱状を呈するものの365Ｙ－５・419Ｙ－２のように中空ではなく棒状を呈するものが、後張遺跡177号住居跡（立石他　1982）からも「下加南型高坏」と共伴して見られるが、これらを同系列のものと考えてよいか判断に困るものである。

⑤壺形土器

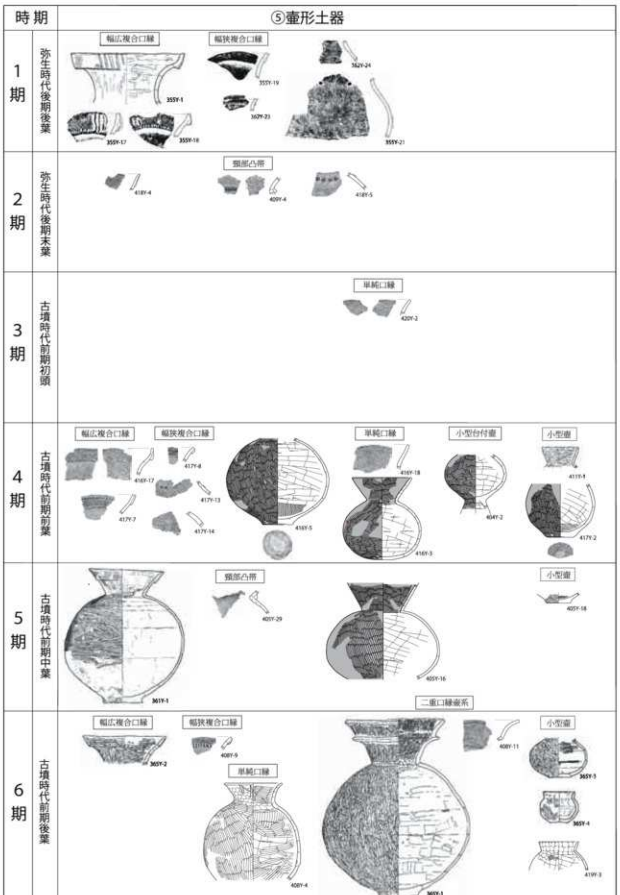
まず、幅広複合口縁壺に関しては、１期の355Ｙ－１に見られるが、以降は３期の417Ｙ－７、４期の416Ｙ－16がある。しかし、口縁部文様の有無から見ると、１期のものも地文に縄文の施文もなく、ハケ目調整のみで、文様としては、辛うじて棒状貼付文が施文される程度となる。３期以降になると棒状貼付文も省略され、３期の417Ｙ－７は複合部の地文に単節斜状文を施文するのみとなり、４期の416Ｙ－16は地文にも縄文を施文せずにハケ目調整のみとなっている。これについては、西原大塚遺跡第70地点（尾形・徳留・大久保・深井　2023）の結果と類似し、３期以降の文様の衰退は顕著と言える。

また、幅広複合口縁の355Ｙ－１は、弥生時代在来のものと違い、口縁部に直立気味に貼られる複合部の作りではなく、口縁部の外反と一体化したものである。この土器については、一見、畿内・東海地方の二重口縁壺の外見に類似している感じである。弥生時代在来の幅広複合口縁を古墳時代風にアレンジさせたもので、古墳時代前期に出現する新出タイプと考えたい。

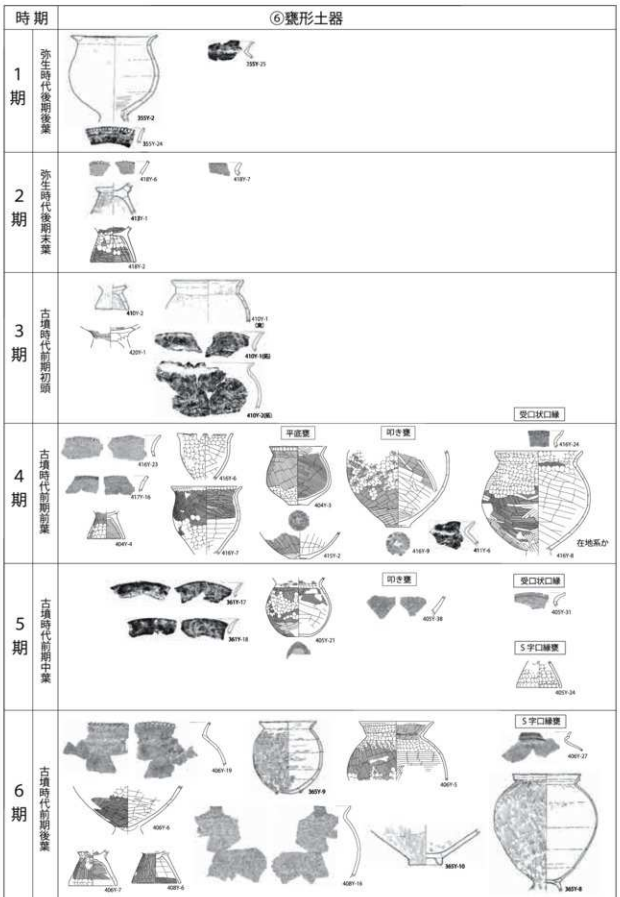
幅狭複合口縁壺については、小破片のみの出土であり、各住居跡出土としても混入品である可能性があるが、１期では362Ｙ－23、４期では417Ｙ－８、６期では408Ｙ－９がある。

時期		①坩形土器	②器台形土器	③鉢形土器	④高坏形土器
1期	弥生時代後期後葉				
2期	弥生時代後期末葉	基筒底 409Y-2 409Y-1 混入品か		409Y-3 416Y-1	
3期	古墳時代前期初頭				
4期	古墳時代前期前葉		417Y-4 417Y-5		404Y-1 411Y-2 416Y-3 416Y-1 415Y-1 416Y-11
5期	古墳時代前期中葉	基筒底 405Y-1 丸底 405Y-3 平底 405Y-4 405Y-2	北陸系装飾器台 405Y-8 405Y-2 405Y-10 405Y-11 405Y-9	407Y-7 混入品か 405Y-6 405Y-7	407Y-3 405Y-13
6期	古墳時代前期後葉	406Y-1 406Y-2	406Y-3 406Y-1	365Y-7	下加南型高坏 406Y-4 406Y-2 419Y-2 406Y-5 365Y-6 419Y-1 365Y-5

第 34 図　西原大塚遺跡第 72 地点における土器変遷１（１／８）



第 35 図　西原大塚遺跡第 72 地点における土器変遷２（１／８）



第 36 図　西原大塚遺跡第 72 地点における土器変遷 3（1 ／ 8）

単純口縁壷については、３期では420Ｙ－２、４期では416Ｙ－３があるが、小型壷は411Ｙ－１のように単純口縁が多いものと思われる。

頸部形態については、１期において355Ｙ・362Ｙの資料を見る限りでは、緩やかなカーブをもち屈曲は認められないが、４期以降、明らかに頸部形態が屈曲するものへと変化する。２期の409Ｙ－４、５期の405Ｙ－29は頸部屈曲部に断面三角形の凸帯がまわる土器で、東海地方東部の菊川式や山中式に系譜をもつ特徴と考えられる。

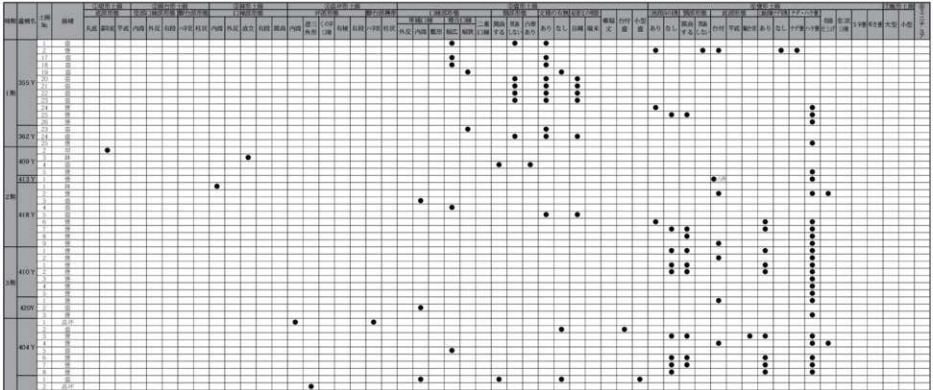
365Ｙ－１は二重口縁壷で、いわゆる「伊勢湾型二重口縁壷」（田口　1981）と考えられる。時期については、６期に比定され、これは従来から言われている五領Ⅲ式（横川　1982）の良好な資料に掲げられることが可能であろう。利根川章彦氏による論考（利根川　1993）では、「東海西部系統の二重口縁壷」に相当するものと考えられる。その論考の中で紹介されている、静岡県焼津市小深田西遺跡２号墳出土土器（第６図２）は、本例と器形や口縁部から胴部至るまでの縦方向のヘラ磨き調整が施される特徴などよく類似している。利根川氏により布留式（中）段階に比定されるものである。

第37図　西原大塚遺跡第72地点における土器変遷４
（1／8・1／6）

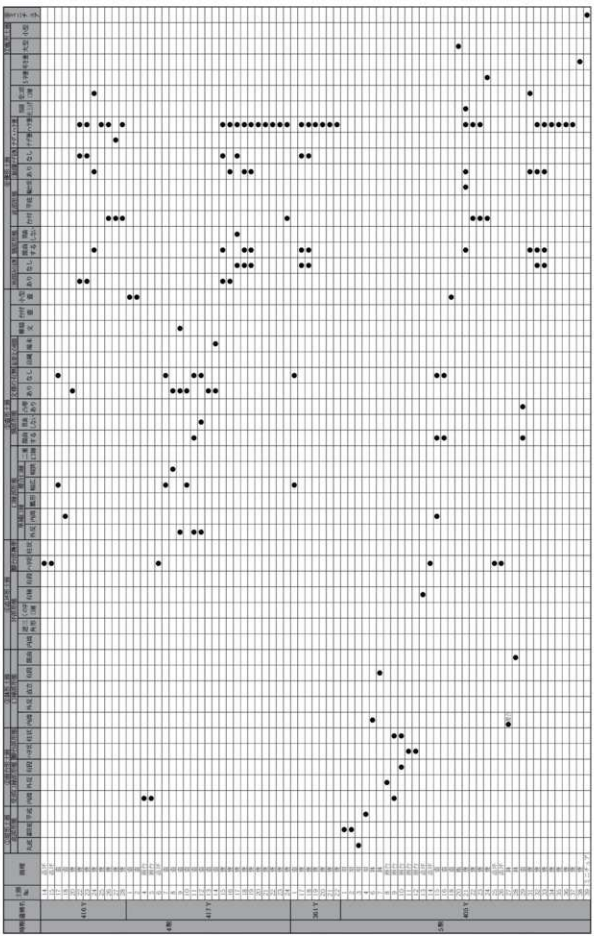
⑥甕形土器

１～６期を通し、弥生時代在来の台付甕が出土している。まず、口縁部形態と口唇部の刻みの有無についてであるが、口縁部形態については、１期の355Ｙ－２では屈曲は見られないが、２期以降は屈曲しているものが主体と言える。しかし、４期の416Ｙ・７・８については、胴部がやや長胴なもので、このタイプについては屈曲が見られない異例なものと言える。一見すると弥生時代中期後半の宮ノ台式土器に類似する土器であるが、上尾市稲荷台遺跡（書上　1994）の甕形土器の分類では、１Ｂ Ⅲ類の「長胴化した甕」であり、「比較的新しい様相を持った甕の一群」と考えられるものであろう。これらの土器の調整を見ると、特に416Ｙ－６は器面全体に指頭による押捺痕が残るもので、基本的に成形時に付いた成形痕とは異なるもので、指頭押捺が仕上げとなるもので注目に値する。

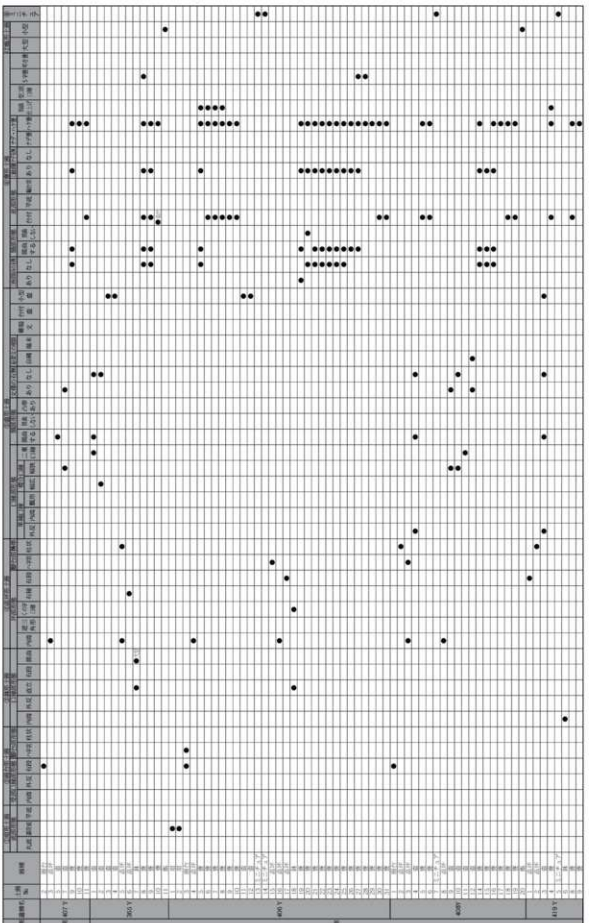
口唇部の刻みについては、１期の355Ｙ－２では刻みがあるが、２期以降では刻みがあるものとないもの共存しており、６期でも406Ｙ－19のように口唇部に刻みがあるものが伴っている。傾向として、



第23表　各器種に見られる主な属性の推移（1）



第23表　各器種に見られる主な属性の推移（２）



第23表　各器種に見られる主な属性の推移（３）

２期以降は口唇部に刻みがないものが主体となり、古墳時代前期では減少傾向にあるイメージであるが、西原大塚遺跡第70地点では、１期（弥生時代後期後葉）～３期（古墳時代前期初頭）までは刻みをもつものだけで、４期（古墳時代前期前葉）以降には刻みがないものが共伴しているように両者が混在していることもあり、刻みをもつものは新しい段階まで存続するようである。

ナデ甕とハケ甕の割合については、１期の355Ｙ－２についてはナデ甕であり、２期以降の資料に関しては、４期の416Ｙ－27が１点のみナデ甕が出土しているが、これについては混入の可能性があるため、西原大塚遺跡第70地点と同様に２期以降はすべてハケ甕と考えて良いであろう。

平底甕は、４期（404Ｙ－３）から出現し、５期（405Ｙ－21）にも見られる。平底甕の特徴として、器面全体にハケ目調整が施され、404Ｙ－３は胴部下半に顕著に指頭による成形痕が残る、いわば無調整のものである。前述した指頭押捺の仕上げとは異なるが、この指頭押捺による仕上げはこうした指頭による成形痕のイメージを模倣したことにより誕生したものと思われる。５期の405Ｙ－24のＳ字口縁甕の脚台部の指頭による成形痕から考えると、本地点での時間軸は前後してしまうが、元々の系譜はＳ字口縁甕の無調整ながら最終的な仕上げである技法が由来しているものと考えたい。２期の418Ｙ－２についても混入品の可能性がある。

叩き甕では、４期の416Ｙ－９が市内で最も残りが良い資料である。出現は４期であり、５期まで弱体ながら出土している。市内での出土例としては、すべて西原大塚遺跡内であり、西原大塚遺跡区画整理160Ｙ－27（佐々木・内野・宮川　2009）、西原大塚遺跡第180地点571Ｙ－20（大久保・尾形・深井　2018）の２点のみである。反町遺跡における出現は、Ⅱ－１期であり、「神奈川・千葉のものより確実に１段階遅れるものである」（赤熊・福田　2011）とまとめられているが、本遺跡と反町遺跡の出現時期はほぼ同時期と言えよう。このように叩き甕の出土は市内では極めて少ないため、特別に重要な意味をもつものとして受け止めなくてはいけない事項の一つと考えるべきである。

また、今回、叩き甕の底部に類似する輪台状を呈するものが、４期の壷形土器417Ｙ－２、甕形土器404Ｙ－３、５期の甕形土器405Ｙ－21に見られる。叩き甕の底部を模倣しての誕生と考えられる。

Ｓ字口縁甕は、５期からの出現である。405Ｙ－24は口縁部の確認はできないが、脚台部内面に折り返しがあるものとして判断している。６期の406Ｙ－27・28は上下で接合ができなかったが、比較的に残りが良いものである。365Ｙ－８は市内で最も良好な資料である。市内での出土例としては、西原大塚遺跡第179地点588Ｙ－18～21（尾形・大久保・二瓶・本山　2014）、西原大塚遺跡第180地点570Ｙ－73・74（大久保・尾形・深井　2018）、西原大塚遺跡第213地点遺構外10（尾形・大久保・深井・青木　2019）、新邸遺跡第８地点５Ｈ－６、６Ｈ－５（尾形・深井・青木　2007）がある。

４期の416Ｙ－24と５期の405Ｙ－31は頸部から口縁部が屈曲し、口唇部に刻みを持たないものであるが、口縁部形態は口唇部に面取りを施し、器厚が厚めのいわゆる受口状口縁甕である。受口状口縁甕については、すでにＳ字口縁甕の出現より前に関東地方に広く分布していることが判明している（及川・池田・北村　1994）が、受口状口縁甕とＳ字口縁甕の関係については、「Ｓ字口縁甕の成立には、おそらく端部内面を強くナデ付ける手法が係っており、口縁部形態に限れば、この横ナデ手法の導入が、最終的にＳ字状の口縁部形態の出現を促したと考えられる」と分析されている（松本　2022）。本地点でのＳ字口縁甕の出現についても次段階５期からであることから、１段階早く出現していることで理解できるものである。廻間遺跡の分析においては、甕Ａが「く字状口縁台付甕」、甕Ｂが「受口系口縁台付甕」、甕Ｃが「Ｓ字状口縁台付甕」と分類され、甕Ｂの出現は甕Ｃが廻間２期で出現とされる中、

甕Bは「廻間式土器直前様式では甕B（受口甕）が甕全体の中で多くの比率を占める形式として存在する」とし、さらに受口系口縁台付甕がS字状口縁台付甕の出現より前に存在し、「所謂近江型甕」としているが、「従来は全て近江系の系譜で処理されている場合が多いように思われるが、濃尾平野を中心として広く受容され、東海各地へ伝播し、それぞれの地域で再び新解釈が付け加えられてゆくタイプの甕であると再評価する必要がある」としている（赤塚　1990）。また、埼玉県東松山市反町遺跡でも受口状口縁甕の系譜については、甕Eとし、「近江系」の系譜で考えられている（赤熊・福田　2011）。

416Y－9は口縁部形態として、口唇部外面に弱い面取りを施し、僅かに内湾することから、受口状を呈しているが、本来の受口状口縁甕とは異なり、在地系もしくは模倣によるものであろうか。

⑦甑形土器

甑形土器については、数量的に非常に少なく、5期では405Y－20、6期では365Y－11、408Y－20がある。この甑形土器が数量的に少ないことについては、「非日常的な用途の土器であることを示す」（杉崎　1993）と考えられている。特に405Y－20のような大型甑については、市内でも出土例はないが、類例として反町遺跡Ⅱ－2期の段階で比較的にまとまって出土しており、この大型甑については、底部が多孔式タイプと思われる。

⑧ミニチュア土器

厳密には、ミニチュア土器と小型壺の分類が難しいところであるが、本地点では4期の416Y－10が初現となる。その後、6期において406Y－30・31、419Y－5が出土している。

（4）5・6期の年代観

各時期の編年基準を前項（2）で記述したが、ここでは特に本地点5・6期について考えてみることにしたい。

西原大塚遺跡第70地点（尾形　2023）では、5期を設定しながらも出土遺物がなかったため、設定のみとなってしまったが、5期の土器様相としては、前段階の4期までは、弥生時代在来の幅広複合口縁壺や口唇部に刻みをもつハケ甕、東海地方に系譜をもつ高坏形土器や壺形土器などで構成されており、遠方の土器様相をもつとしても東海地方西部が限界のものであろう。しかし、5期の段階には、各器種で従来からの系譜では追えない土器、つまり畿内を系譜にもつ土器群が主体となる構成が確立していくものと考えられる。

従って、近隣における土器編年を参考にすると、5期は、稲荷台遺跡第2段階の「畿内系の定型化した小型丸底壺・小型丸底鉢の参入に象徴される段階」（書上　1994）、反町遺跡ではⅡ－2期（4世紀前半～中葉）、6期については、稲荷台遺跡第3段階の「東海地方西部の影響かの土器群は希薄化し、土器組成が畿内の布留式系にかなり傾斜する段階」、反町遺跡ではⅡ－3期（4世紀中葉～末）に相当するものと考えられる。

（5）住居跡出土土器の個体数と器種別割合について

本地点における住居跡出土土器の個体数は、全部で244点であった。個体数と器種別割合を示したのが第24表である。

これによると、器種別で見ると、坩形土器9点／4％、器台形土器11点／4％、鉢形土器9点／4％、高坏形土器は29点／12％、壺形土器65点／27％、甕形土器112点／46％、甑形土器3点／

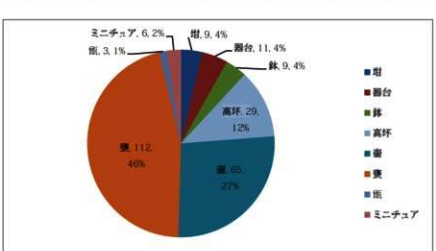
１％、ミニチュア土器６点／２％という結果であった。

この結果について、昨年度報告した西原大塚遺跡第70地点（尾形　2023）と比較すると、まず、第72地点で一番多く出土した器種は、甕形土器の46％、次いで壷形土器の27％で、この結果は第70地点の順位と同じである。また、壷・甕形土器のトータルを見てみると、第72地点では73％、第70地点では80％と７％の差がある。第70地点における壷・甕形土器のトータル80％の残り20％の内訳を見ると鉢形土器７％、高坏形土器10％、ミニチュア土器３％であるが、第72地点における壷・甕形土器のトータル73％の残り27％の内訳は、坩形土器４％、器台形土器４％、鉢形土器４％、高坏形土器12％、甑形土器１％、ミニチュア土器２％と第70地点では坩形土器と器台形土器の出土は全くなかったが、第72地点では坩・器台形土器のトータルは８％を占め、甑形土器も１％であった。

次に今回の第72地点における住居別の器種別割合を知るために第38図を示したので見てみることにする。これによると、前述したように第72地点の壷・甕形土器のトータル73％を基本とすると、例えば355・361・361・362・420Ｙでは壷・甕形土器のトータルは100％という内容で、その他の器種が出土していないため、それだけでも本来その割合を高くしているはずであるが、逆に73％までその割

住居跡	坩	器台	鉢	高坏	壷	甕	甑	ミニチュア	合　計
355Y					8	4			12
361Y					1	6			7
362Y					2	1			3
365Y			1	2	4	3	1		11
404Y				1	2	5			8
405Y	5	5	4	4	7	12	1	1	39
406Y	2	1	1	4	2	19		2	31
407Y		2		2	4	3			11
408Y		1		3	6	8	1	1	20
409Y	2		1		2				5
410Y						7			7
411Y				2	1	6			9
413Y						1			1
415Y				1	1	5			7
416Y				7	9	11		1	28
417Y		2		1	10	11			24
418Y			1		3	5			9
419Y			1	2	2	3		1	9
420Y					1	2			3
合　計	9	11	9	29	65	112	3	6	244

（単位：点）



第24表　弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡出土の掲載土器個体数と器種別割合

合を低くしているのであれば、かなり低い割合の住居跡があるものと想像ができるであろう。

それでは、壷・甕形土器のトータル73％を平均とし、それ以下の住居跡について見てみると、70％以下の住居跡は、365・405～408・419Yの6軒をあげることができる。

特に405Yについては、全体の土器39点と今回の住居跡で最多の出土数の中、壷・甕のトータルは19点／49％と一番低い値であった。

次に低い値の住居跡は419Yで5点／56％、さらに365Yで7点／64％、407Yで7点／64％、406Yで21点／68％、408Yで14点／70％と通常の住居跡に見られる甕・壷形土器の占める割合から比較すると低い値であった。

（6）土器組成における壷・甕形土器のトータルが低い要因

西原大塚遺跡第70地点における成果の一つである「本遺跡全体で一貫して時期毎での器種別割合が同じではないことを示す重要な結果につながった」ことを踏まえて、本地点においても器種別割合を示すこととした。

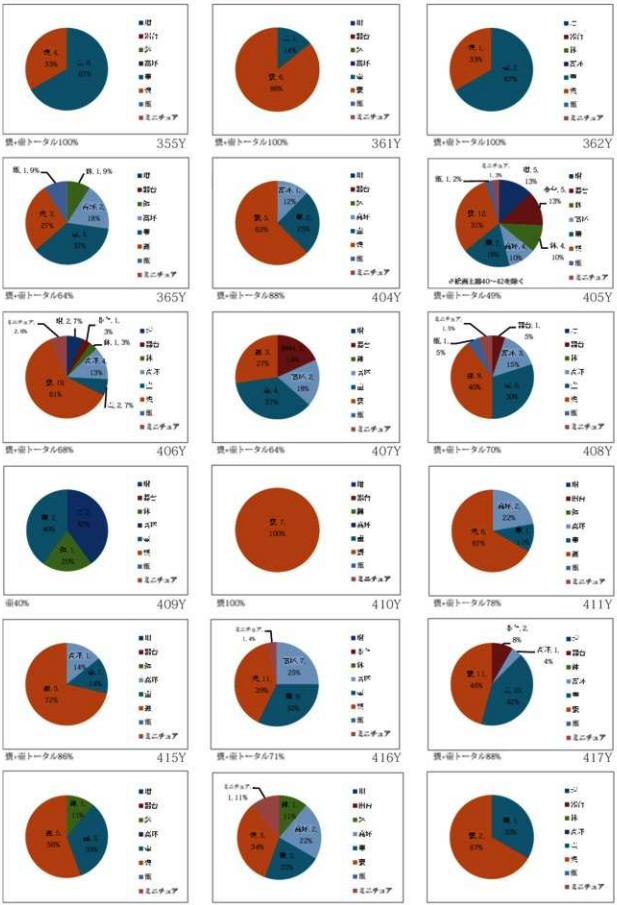
前項（5）では、特に405・419Yの2軒については、壷・甕のトータルが60％以下という極めて低い値であることがわかったが、この2軒に共通点を考えてみると、まず、壷・甕形土器以外の器種が豊富であるということであろう。さらに、土器様相としては、外来系土器が際立って多く出土していることである。この2軒の時期については、405Yが5期、419Yが6期に位置付けられるということから、この現象は古墳時代に入り、少し時間が経過し、前期中葉・後葉の段階で、弥生時代在来の土器群の消滅と古墳時代的な斉一性をもつ土師器と呼ばれる土器群の確立を意味するものと考えられる。前述した壷・甕のトータルが低い365・406・407・408Yの4軒についても時期は407Yが5期、365・406・408Yが6期ということで、すべて5期以降ということからも本地点では5期を境に本格的に古墳時代本来の様相が明確化したと言えるであろう。

ただし、405Yからは甑形土器の出土は見られないが他の器種はかなり揃っており、供献用である坩・器台形土器もトータル23％を占めている。しかし、365・419Yについては、供献用の坩・器台形土器は1点も伴わないということで特異な状況を示しており、こうした土器組成の違いにはまた何の意味を持つものなのか今後の課題となるところであろう。

以上、地点単位でまとめると、西原大塚遺跡第70地点では一般的な食器である壷・甕形土器の占める割合が80％と高かったが、第72地点では壷・甕形土器の占める割合が73％と低く、その差の部分に第70地点では出土がなかった坩形土器と器台形土器と甑形土器が含まれていた。このことから、本地点の調査成果として、5期の古墳時代前期中葉以降、器種としては、壷・甕・鉢形土器などの一般食器以外、つまり祭祀的な要素をもつと考えられる坩・器台形土器などの組成がプラスとなり、同時に畿内地域の系譜をもつ古墳時代本来の土師器が確固たる存在として確立したものと考えれる。

（7）甕形土器の調整技法について気が付いたこと

今回、甕形土器の調整技法について細かく観察した結果、ハケ目調整、あるいはヘラ磨き調整とは別に最終的な仕上げとして、指頭による押捺痕を残す土器が多く見られた。この指頭押捺痕については、本来は土器を成形する過程における粘土を積み上げる際に見られる成形痕と捉えるのが一般的なものであると考えていたが、2期の418Y－2、4期の404Y－4、416Y－6～9、5期の405Y－21、6



第38図　弥生時代後期～古墳時代前期の各住居跡出土土器の器種別割合　※18軒分データ（413Yを除く）

期の406Ｙ－５～８は、ハケ目調整後に見られる痕跡となる。そのため、この指頭押捺痕について、当初は手持ち移動による偶然に付着したものと軽く思っていたものである。しかし、416Ｙ－６については、外面全面と内面口縁部に万遍なく付着しており、406Ｙ－５、416Ｙ－８についても外面口縁部から胴部上半、内面にも顕著に付着していることから、もはや偶然ではなく一つの仕上げ技法と考えざるを得ない状況と言えるものである。この416－６については、一見すると器面の遺存状態が悪くヘラ磨き調整やハケ目調整が見づらい感があるが、そうではなく、良く観察すると全体にボワンボワンといった押捺痕と指紋が観察でき、横方向に連なり、基本的には下から上に移動していることがわかる。

この指頭押捺痕は、甕形土器以外にも坩・鉢・高坏・壷形土器でも観察することができ、坩形土器では５期の405Ｙ－４、鉢形土器では２期の409Ｙ－３、高坏形土器では６期の408Ｙ－３、壷形土器では６期の408Ｙ－４、419Ｙ－３が該当する。特に408Ｙ－３の高坏形土器は外面全面に顕著に付着している。

この指頭押捺による仕上げは、概して新出要素と考えられ、４期以降の特徴と考えられる。ただし、２期の409Ｙ－３、418Ｙ－２については、確定は難しいが住居跡の複雑な重複により、他の住居跡からの混入品とも考えられるため、今後の調査成果を待って判断したいものである。また、注意しなければならないのは、４期の404Ｙ－３の外面の口縁部及び胴部下半に見られる指頭押捺痕である。これについては、明らかに胴部ハケ目調整ないし横ナデ前に施されたもので、特に胴部下半については未調整として捉えられるものである。未調整として指頭押捺痕が残る土器として考えられるのは、Ｓ字口縁甕の脚台部調整である。５期の405Ｙ－24のＳ字口縁甕の脚台部にも同様な指頭押捺による成形技法が使用されているため、その影響によるものと考えられる。

しかし、今回の第72地点の土器に見られる、仕上げとして考えられる押捺痕についてもＳ字口縁甕の脚台部に見られる無調整の指頭押捺による成形痕の外観上の仕上げを視覚的な印象で製作されたのではないかと推測するものである。

（８）まとめ

以上、今回の報告をまとめるにあたり、大まかな器種毎の時代の推移を見てきたが、ここでは、土器様相に見られる画期についてまとめることにする。

土器様相に見られる大きな画期については、一つ目は、２期と３期であり、この差は弥生時代と古墳時代の差を示すものと考えられる。すなわち、弥生時代在来の特徴をもつ土器から新出要素による古墳時代的な特徴をもつ土器への変化として理解される。

二つ目は、４期と５期であり、この差は坩・器台形土器の小型精製土器、叩き甕といった畿内系土器や北陸系装飾器台などの外来系土器の出現である。

三つ目は、５期と６期であり、この差は伊勢型二重口縁壷やＳ字口縁甕、いわゆる下加南型土器と呼称される柱状脚部高坏などの外来系土器を主体とする土器群への変換の時期で、古墳時代的な特徴をもつ土器群による安定した土器組成であり、すなわち、畿内系土器群の土器組成の確立である。

[註]

註１　今回の時期設定及び第22表の編年基準については、前回報告を行った西原大塚遺跡第70地点（尾形　2023）を基本に１～５期を共通として、一部修正と６期を追加する試みを行った。弥生時代後期～古墳時代前期の時期区分については、弥生時代後期・古墳時代前期をそれぞれ５区分し、初頭・前葉・中葉・後葉・末葉と表記することにした。

註２　分析中、福田氏は、「器台は４期までに既に存在していると思われるが、明確な位置付けが可能な個体がなく、本期が初現」としている。

[引用・参考文献]

赤熊浩一・田中広明他　2011『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

赤熊浩一・福田　聖　2011「Ⅷ　調査のまとめ　３．古墳時代の土器変遷」『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

赤塚次郎　1990『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

石野博信・関川尚功　1976『纒向』桜井市教育委員会

大久保聡・尾形則敏・深井恵子　2018『志木市の遺跡群23』志木市の文化財第70集　埼玉県志木市教育委員会

大村　直　2004「久ヶ原式・山田橋式の構成原理―東京湾岸地域後期弥生土器型式の特質と移住・物流―」『史館』第33号　史館同人

及川良彦・池田　治・北村尚子　1994「関東における近江系について」『庄内式土器研究Ⅶ―庄内式併行期の土器生産とその動き―「庄内式期の土器の併行関係」庄内式土器研究会

尾形則敏　2023「第４章　調査のまとめ」『埋蔵文化財調査報告書９』志木市の文化財第91集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・大久保聡・深井恵子・青木　修　2019『西原大塚遺跡第213地点　中野遺跡第102地点　中野遺跡第104地点　埋蔵文化財発掘調査報告』志木市の文化財第72集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・大久保聡・二瓶秀幸・本山直子　2014『西原大塚遺跡第179地点　埋蔵文化財発掘調査報告』志木市の文化財第56集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡・深井恵子　2023『埋蔵文化財調査報告書９』志木市の文化財第91集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・徳留彰紀・深井恵子・青木　修　2013『志木市遺跡群20』志木市の文化財第51集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・深井恵子・青木　修　2007『新邸遺跡第８地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第11集　埼玉県志木市遺跡調査会

書上元博　1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1996『新屋敷遺跡Ｃ区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

加藤修司　1978「小型器台・小型丸底坩の出現をめぐる諸問題」『物質文化』29号

小林行雄・杉原荘介　1968『弥生式土器集成　本編・資料編』東京堂出版　日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会埼玉県　1982『新編埼玉県史　資料編2』

佐々木保俊・尾形則敏　1996『城山遺跡第12地点　城山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第14地点　中野遺跡第11地点　中野遺跡第16地点　市場裏遺跡第１地点　田子山遺跡第10地点　中道遺跡第21地点　田子山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第21地点　市場裏遺跡第２地点　中道遺跡第26地点　発掘調査報告書』志木市の文化財第24集　埼玉県志木市教育委員会

佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳　2009『西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ　西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集　埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合　埼玉県志木市遺跡調査会

笹森紀巳子　1986『下加南遺跡』大宮市遺跡調査会報告　別冊３　大宮市遺跡調査会

1989「小型器台形土器に関する覚書」『古代』第87集　早稲田大学考古学会

笹森紀巳子　1990「大宮市内出土の外来系土器について」『大宮市立博物館研究紀要』第２集　大宮市立博物館

1993「大宮台地における弥生後期土器―変遷の素描―」『二十一世紀への考古学』櫻井清彦先生古稀記念論文集雄山閣

菅谷浩之　1978『日の森遺跡』美里村教育委員会

杉崎茂樹他　1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

関川尚功　1976「畿内地方の古式土師器」『纒向』桜井市教育委員会

高橋一夫　1997「新座市出土の『叩き甕』から」『にいくら』№2　跡見学園女子大学　花蹊記念資料館・学芸員課程

田口一郎　1981『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書第22集

立石盛詞他　1982『関越自動車道関係　埋蔵文化財発掘調査報告―Ⅶ―後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中清美　1993「唐崎台遺跡の竪穴住居跡等の編年試案」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ―設立10年記念特集―』財団法人市原市文化財センター

玉口時雄　1972『古式土師器小考　福島県いわき市平原高野遺跡調査報告』『東洋大学文学部紀要』第25号

寺沢　薫　1986「畿内産古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告49　奈良県教育委員会

利根川章彦　1993「二重口縁部壺小考（上）」『調査研究報告6』埼玉県立さきたま資料館

奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　1983『特別展　三世紀の九州と近畿』

西川修一　1991「関東のタタキ甕」『神奈川考古』第27号　神奈川考古同人会

野口行雄・小沢　洋他　1989『小浜遺跡群Ⅱ　マミヤク遺跡』財団法人　君津郡市文化財センター発掘調査報告書第44集

木更津市小浜土地区画整理組合　財団法人　君津郡市文化財センター

野村高弘　2013「古墳前期東日本における高坏状装飾器台」『東京大学考古学研究室研究紀要』第27号　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室

坂野和信　1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

比田井克仁　1983「古墳時代前期高坏考」『古代』第74号

1997「弥生時代後期における時間軸の検討―南武蔵地域の検討を通して―」『古代』第103号　早稲田大学考古学会

1999「遺物の変遷―遺物から見た後期の社会変革―」『文化財の保護』第31号　東京都教育委員会

2001「関東における古墳出現の変革」雄山閣

福田　聖　1992「観冶谷新田口遺跡出土土器の分析―前篇―」『研究紀要』第9号　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

古屋紀之　2013『横浜市都筑区北川谷遺物群における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年』『横浜市歴史博物館』VOL.17

2014「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『久ヶ原・弥生町期の現在』西相模考古学会　記念シンポジウム資料集

松本　完　2005「久が原式」『考古学リーダー5　南関東の弥生土器』六一書房

2022「児玉地域における古墳時代前期の土器様相―女堀川・旧赤堀川流域の古墳時代前期の土器の分析を中心として―」『調査研究報告』第1号　本庄早稲田の杜ミュージアム

柳田敏司・横川好富・増田逸郎　1971『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告第8集　埼玉県遺跡調査会

横川好富　1982『埼玉県の古式土師器』『埼玉県史研究』第10号　埼玉県

図　　版

1. 調査前風景

2. 表土剥ぎ風景

3. 404号住居跡遺物出土状態

4. 405号住居跡遺物出土状態

5. 405号住居跡遺物出土状態

6. 405号住居跡遺物出土状態

7. 405号住居跡貯蔵穴遺物出土状態

8. 405号住居跡

1. 406号住居跡遺物出土状態

2. 406号住居跡

3. 406号住居跡貯蔵穴

4. 407・408号住居跡

5. 408号住居跡

6. 409号住居跡

7. 415号住居跡

8. 調査風景

1. 416号住居跡遺物出土状態

2. 416号住居跡遺物出土状態

3. 416号住居跡遺物出土状態

4. 416号住居跡貯蔵穴遺物出土状態

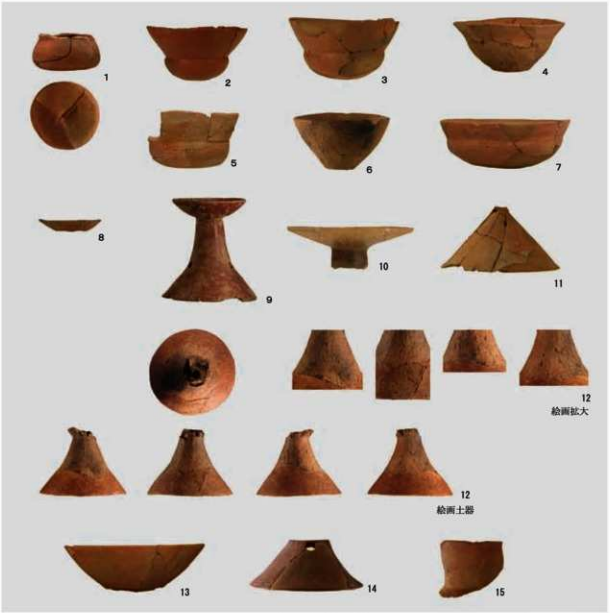
5. 417号住居跡

6. 418号住居跡

7. 419号住居跡

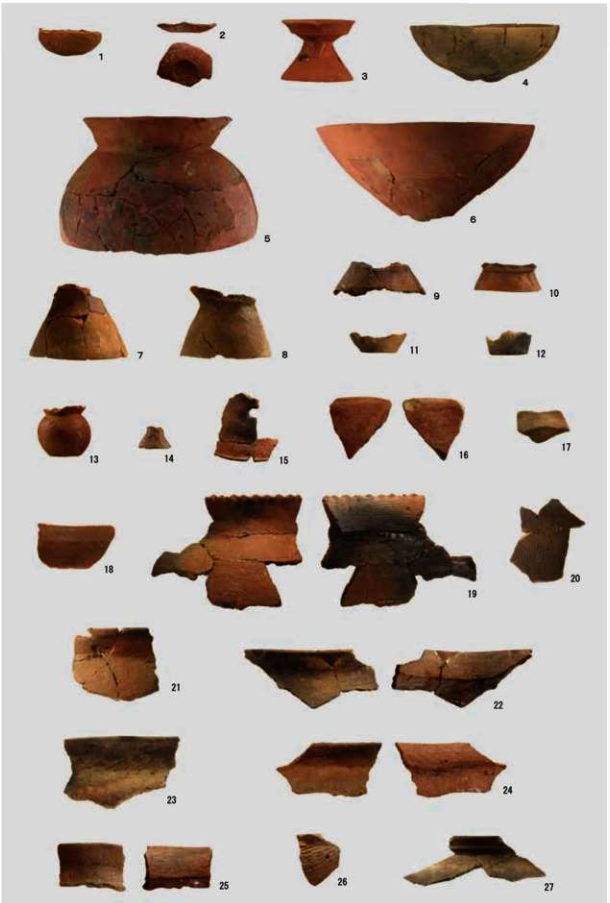
8. 420号住居跡

1. 404号住居跡出土遺物



2. 405号住居跡出土遺物 1

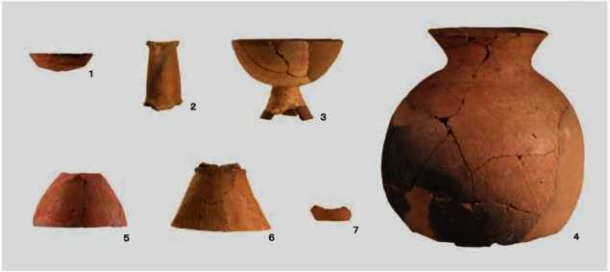
405号住居跡出土遺物2



406号住居跡出土遺物 1

1. 406号住居跡出土遺物2

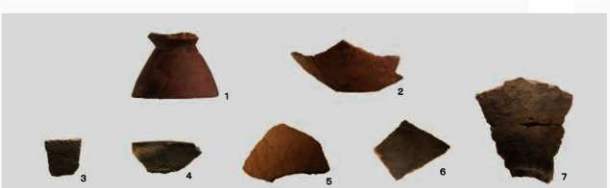
2. 407号住居跡出土遺物



3. 408号住居跡出土遺物1

1. 408号住居跡出土遺物２

2. 409号住居跡出土遺物



3. 415号住居跡出土遺物

416号住居跡出土遺物1

1. 416号住居跡出土遺物２

2. 417号住居跡出土遺物

1. 418号住居跡出土遺物

2. 419号住居跡出土遺物

3. 420号住居跡出土遺物

遺構外出土遺物 1

53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
土製円盤
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90

遺構外出土遺物２

91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
117
112
113
114
115
116
118
銅製品
（煙管雁首）
119
鉄製品
（釘）

遺構外出土遺物３

報告書抄録

ふりがな	しきしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 10
書名	志木市埋蔵文化財調査報告書 10
シリーズ名	志木市の文化財
シリーズ番号	第95集
著者氏名	尾形則敏　大久保聡　深井恵子
編集機関	埼玉県志木市教育委員会
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号　TEL 048（473）1111
発行年月日	令和6（2024）年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積（㎡） （全体面積）	調査原因
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 （第72地点）	しきしさいわいちょう 志木市幸町 3丁目7360-7364	11228	09-007	35° 49′ 27″	139° 33′ 44″	20021120 ～ 20030109	1,171.00	農地土壌改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西原大塚遺跡 （第72地点）	集落跡 墓跡	弥生時代後期～古墳時代前期 中世以降	住居跡　16軒 井戸跡　1基	土器・絵画土器・土製品（勾玉）・石器（砥石）・穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩 遺物なし	古墳時代前期の住居跡からは、S字口縁甕・叩き甕・二重口縁壺・柱状脚高坏・北陸系装飾器台などの外来系土器がまとまって出土している。

要約

西原大塚遺跡は、縄文時代中期の環状集落や弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡を主体とする遺跡である。今回は第72地点の調査成果を収録している。

第72地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡16軒、中世以降の井戸跡1基が検出された。特に古墳時代前期の住居跡からはS字口縁甕・タタキ成形甕・二重口縁壺・柱状脚高坏・有段高坏・北陸系装飾器台などの外来系土器がまとまって出土しており、過去の調査例を含め本地点周辺は注目されるエリアであろう。特に405YはS字甕・叩き甕・北陸系装飾器台などの外来系土器の他、絵画土器、勾玉・砥石なども出土しており、西原大塚遺跡内の中でも注目できる住居跡である。

志木市の文化財　第95集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 10

発　行　埼玉県志木市教育委員会
　　埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発行日　令和６（2024）年１月31日
印　刷　株式会社　白峰社